
平凡少年が幻想入り

コロンプスの鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡少年が幻想入り

【Nコード】

N1622J

【作者名】

コロンプスの鶏

【あらすじ】

百人中九十九人が少年のことをこう言うだろう。

「普通だね、顔とゲームの腕以外は」

原作知識がある主人公は幻想郷でどれだけのことが出来るのか？

果たして少年の運命は！？基本コメディ作品（恋愛要素含む・・・と思っ）

プロローグ（前書き）

主人公最強系です。あとキャラが崩壊する可能性があります。
私の駄文で俺の嫁が汚されたくねえ！という類の人は
すみやかに戻ってください。

これは無理だなと諦めて痛みを耐えようとしたのだが、
背中が地面に当たることは無かった。
なぜかって？それは簡単なことだ。そこに隙間が出来たから

プロローグ（後書き）

プロローグなので短めに仕上げました。

主人公はエキストラぐらいなら一回もピチュらずにクリアできます。
クリアした東方は紅魔郷から地霊殿まで。

文花帖は全世界ナイトメアをクリアしたあたりで断念した。

幻想入り

「ハッ！ここはどこだ！？」

俺は気が付いたら小屋らしきところで寝ていた。

うん、明らかにおかしい、たしかに俺は少なくとも地上4000メートルから落ちていたはずだ。

普通なら助かるはずが無いというのに助かった。しかも体には傷一つ無い、どういうことだ？

もの思いに耽っていると小屋の戸が開いて女の子が入ってきた。

年は18歳くらいだろうか？大きな鎌を持っている。はたから見たらいかにも死神……死神？

あの顔………鎌……え？小町？

「おや、気が付いたようだね」

小町？がそういつて近づいてくる。おお、近くで見ると中々美人じゃないか。

「おかげさんで、ところで何で俺はここにいるんだ？」

「そりゃこっちの台詞だね、あんたがいきなり空から降ってきたんだで、亡霊じゃないようだからこっちに連れて来たってわけさ」

むう、やっぱり空から落ちてきたのか。

「ならなんで俺は傷一つ負っていないんだ？」

「地面に当たる寸前であんたが減速したんだ、覚えてないのかい？」
減速？

「まったく全然ちつとも覚えてない」

「ふ〜ん、まあいいさ。ともかくあんたは映姫様に一度会ってもら
うから」

「映姫ってヤマザナドウか？」

「おや、よく知ってるね。話が早い、じゃあついてきて」

確定だ。ここは幻想郷。忘れられた者たちが集う世界。幽霊、妖怪、
神、何でもござれの世界だ。

いまここに居るのは小野塚小町^{おのつかこまち}、死神だ。

『距離を操る程度の能力』を持っていて幽霊から渡し賃をもらい、
三途の川を渡って

閻魔の元へ届けることをしているがサボリ癖があるので映姫に怒ら
れている。

そして今から会うのは四季映姫^{しきえいぎ}・ヤマザナドウ。閻魔だ。

『白黒はつきりつける程度の能力』を持ち、生前の罪を裁く仕事を
している。

『悔悟の棒』とか『浄玻璃の鏡』とかを使って生前の罪を見たり裁
いたりしている。

『六十年目の東方裁判』が映姫のテーマソングなのだが、これがい
い曲なのだ。

東方には素敵な曲が多く存在し、俺が好きなのは幽霊楽d「お〜い、

早くしないと置いていくよ」

おっと、もの思いに耽りすぎた。どれ、映姫の顔を拝みに行くか。

少年&少女移動中・・・

映姫の部屋の前までたどり着いた。小町が距離を操ってくれたからすぐ着いたな。

小町が目の前にある白い扉をノックする。

「映姫様、不審な人間をお連れしました」

不審なつて・・・まあその通りだけど。もう少し言い方を考えてほしいな。

数秒すると中から声が聞こえてきた。どうやら入ってもいいようだ。

「失礼します」

中は意外と狭かった。中も真っ白とは・・・白黒つけるのも度が過ぎるな。

「ご苦労様小町、仕事に戻りなさい」

小町はさっさと戻っていった。まあどうせサボると思うけど・・・

とりあえず俺の前に居る映姫様の状態を説明しよう。

第一印象、小さい。身長はどう見ても140センチもないだろう。持ち上げようと思ったたら簡単に持ち上がると思う。そんなちっちゃ

いのに

とつても偉い感じがするからやっぱりすごい人・・・もとい閻魔なんだろう。

しかし、映姫様もやはり期待を裏切らない。すっげえ可愛い。

なんかこう、お持ち帰りしたいぐらい可愛い。閻魔っぽいからしてるもんだから

なんていうかこう・・・とりあえず抱きしめたい感情が出てくる。

「さて人間、あなたはこういった経緯でここに来たのでむぐっ！」

何か話している最中だったがあんまりにも可愛かったので欲望に勝てず抱きしめてしまった。

なんか心が満たされていく。映姫マジ可愛い、もがいてるけど力及ばず俺の手から抜け出せない。

とかいろいろ思っているときいきなり吹っ飛ばされて壁にぶつかった。さすがに痛かったぜ。

「／／／／いきなり何するんですかっ！／／／」

顔を真っ赤にして怒る映姫。やっべえ怒ってるところも可愛い。

「何って・・・ハグしたただけだろう。ハグは友好の証だぜ？（嘘）」

「それでもいきなりあんなことするなんて無礼にもほどがあります！死刑です、死刑！」

「失敬な！可愛い子に抱きついて何が悪い！」

「／／／／！！！」

おお、可愛いなんていわれて照れている。以外に初心つひだな閻魔様。

「まあ冗談はこれくらいにしておいて、ここに来た経緯、だったか？」

「……はあ、怒る気も失せました」

おお、持ち直した。まだ顔は赤いけどね。

少年説明中……

「……にわかには信じがたい話ですが、嘘ついている顔のは見えませんね」

「ちなみに誰が俺をここに連れてきたかは多分分かる」

「……八雲紫ですか」

「そういうことだ」

大妖怪八雲紫やくもゆかり『境界を操る程度の能力を持つ』幻想郷最古参の妖怪だ。

一般的にスキマ妖怪と言われる紫はいつの間にか家の中に居たりする。

幻想郷に必要な不可欠な存在であり、博麗大結界と共に幻想郷を隔離したりしている。

しかし外の世界から人間を連れてくることもしばしば。その人間は大抵妖怪の餌となっている。

髪は金髪でいつも日傘を持っている。服は紫色。ババアとか言つとスキマツアーに招待される。

「ところでなん「なんで幻想郷のことをいろいろ知っているか、だる?」「・・・はい」

「秘密だ」

「・・・まあいいでしょう。帰りたいならばとりあえず八雲紫を訪ねるとよいでしょう」

「まあそうだろうな。どこにいるかわかんねえけど」

「私も赴任したばかりなので詳しいことは分かりませんが・・・まあ何とかなるでしょう」

そんな適当でいいのか四季映姫。

「・・・じゃあとりあえずここを出て適当に歩いてみるわ」

「ちょっと待ってください、小町に人里まで送らせます」

「ん、わかった」

少年&少女移動中・・・

三十分ほど歩いたら三途の川まで着いた。途中歩くと遅いので私に捕まって飛びませんか？

という案が出されたが却下した。だって格好悪いじゃん。

「ZZZ・・・」

小町は思いつきりサボっていた。映姫の額には青筋が立っている。哀れ小町。

「小町・・・起きなさい」

「はえ？えつ映姫様！寝てませんよ！？サボってなんか居ませんよ？」

「小町、あなたは何度言えば分かるのですか！大体あなたは~~~~~」

少女説教中・・・

~~~~~分かりましたか！」

「・・・はい」

映姫の説教は軽く三時間は続いたが、まだまだ続きそうなので何とか説得してやめてもらった。ちなみに小町は軽く魂が抜けかけている。そりゃあ三時間も説教されたらそうなるわな。

「・・・まあいいでしょう。小町、この方を人里に連れて行ってください」

「分かりました、じゃあ行くよ、え〜っと」

「ああ、まだ名前を言ってなかったか。俺の名前はだ」

八神零 やがみれん

幻想入り（後書き）

映姫様はツンデレっぽく仕上げたいです。

## 今現在の状況

「小町、荷物とって来るからちょっと待ってて」

そういつて俺は（おそらく小町の宿舎である）小屋に入る。

そこには俺の持っていた肩掛けバッグが置いてあった。

PSP、ソフト、お菓子、充電器・・・なくなっているものは無いようだ。

チュッパチ　ツプスを二本取り出し一本を舐める。一番大好きなコ  
ーラ味だ。

もう片方のプリン味を小町に渡して俺達は出発する。

小町は初めて見る食べ物に若干警戒していたが、舐めてみると意外  
においしかったらしく

ご機嫌な様子だ。気に入ってくれてよかった。

「ん？・・・気のせいかな」

なにか後ろに気配を感じたが誰もいなかった。

少年&少女移動中・・・

「おお、意外に繁栄して・・・無いな」

俺の記憶では明治時代ぐらいまで栄えていたはずだ。

しかし俺の目に映っているのは小さい農村。



寺子屋らしきものも見当たらない。農業に勤しんでいる人が十数人居るだけだ。

ふと映姫の言葉が頭によみがえってきた。

『私も赴任したばかりなので

』

今、幻想郷がどういう状況なのか理解した。

「小町、お前が映姫と幻想郷に来てからどのくらい経った？」

「ん〜っと、大体二週間ぐらいかな？」

間違いない。おそらくここは俺の知っている幻想郷ではない。俺の知っている幻想郷のずっと、おそらく千年以上昔だろう。まだ紫が『幻と実体の境界』を引いていない頃、まだ現実とつながっている頃だ。

しかし、紫の能力を使わない限り俺は現実には帰れないだろう。なにせ時間軸が大幅にずれている。このまま帰っても何千年も昔の日本に一人取り残されるだけだ。となると紫を訪ねなければいけないわけだが、それは難しい。場所が分からない上にもし分かっていたとしても妖怪に襲われる可能性が高いからだ。

いや、無理に帰る必要は無い。昔とはいえ幻想郷に来れたのだ。ここに永住する手が無いわけではない。現代の科学を知るのであればこの地で暮らすのも難しいけど、「おいッ！聞いてんの？」

っと、小町がいつの間にか話しかけていたようだ。

この集中すると周りが見えなくなる癖はどうにかした方がいいな。

「すまん、考え事してた」

「つたく、ちゃんと聞きなさいよ！重要なことなんだから。」

映姫様がわざわざあんたのために住む所用意してくださったんだからそこ行くよ」

これはうれしい予想外なことだ。住む所があるだけでいろいろと俄然楽になる。

「マジで？じゃあさっさと行くうぜ」

「あんたが話し聞かなかつたんだろ！まったく……こつちだよ」

そう言って小町は歩き出す。俺もそれについて行く……まただ。後ろに気配を感じたがやはり誰もいない。

再度少年&少女移動中……

「ここだよ」

「……ここかよ」

小町が指差している建物は明らかに倉庫、右から見ても左から見ても倉庫だ。

「せめてもう少し人の住めるところがよかった……」

「大丈夫だよ、ここはもう使われていない倉庫らしいから。掃除すれば何とか住めるだろ」

「まあ室内で寝れるだけマシか、映姫に礼を言っておいてくれ」

「あいよ、じゃあ私は仕事があるから行くよ」

「・・・さぼるなよ」

「さ、サボるわけ無いだろう。真面目に仕事するぞ」

「（凶星だったか）じゃあな、送ってくれてありがとう」

「いいつてことぞ」

そう言って小町は飛んでいった。どうせサボる気だろう。

「どれ、とりあえず入ってみるか」

「まあ十分住めることには住めるな」

倉庫の中は埃つぽかったが中々広く、住みやすそうだった。端っこに布団が置いてある、おそらく映姫が手配してくれたんだろう。

何から何まで世話になる。今度饅頭でも持って行ってやるか。

「・・・とりあえず掃除するか」

隣の家に挨拶に行つてついでに箒と雑巾を貸してくれと言つたら快く貸してくれた。

箒で埃を粗方掃いてから井戸で汲んできた水を雑巾にしみこませて絞り、床や壁を拭く。

途中水の入った桶をひっくり返してしまい、時間が倍かかったのは秘密だ。

少年掃除中・・・

「うし、こんなもんだろう」

端っこまで念入りに拭いて布団は屋根の上において天日干しをしている。

すでに借りたものは返した。さて・・・どうするか。

そしてまた後ろにある気配。間違いないだろう、あいつだ。

「いるんだらう？八雲紫」

「あら、よくわかったわね」

突如、俺の後ろに隙間が現れ、中から金髪の美女が現れた。

今現在の状況（後書き）

主要キャラクター登場

## 最強能力発覚！

「とりあえず聞きたいことがいくつかある・・・いいか？」

「ええ、かまわないわ」

俺の質問に答えるのは八雲紫やくもむかりいわずと知れた大妖怪だ。

誰よりも幻想郷を知り誰よりも幻想郷を愛する最強クラスの妖怪。俺が幻想郷に来てしまったのもこのスキマ妖怪の仕業だ。

「まず一つ目、なぜ俺をここに連れてきたんだ？」

わざわざどこにでも居るような人間を時間を超えてまでここに連れてくる。

その意図が分からないのだ。

「それがね、私はまだ能力のコントロールが不安定で上手く出来ないのよ」

「つまりお前の単なるミスでここに連れて来られたというわけか？」

「ええ、けどそれだけではここには来れないわ」

「・・・どづいことだ？」

「あなたが何かしら特別だったから私の隙間があなたの所に開いたの」

「特別ねえ、俺はあつちで特別なことは何も無かったぞ?」

「正確にはここに来ることで特別になる運命だった、ということね」  
運命? 幻想郷に来ることが俺の運命・・・しかも特別になるだと?  
それは何かしらの能力がつくと言うことか? それなら超嬉しいこと  
だ。

「まあどうせこっちに来てしまった事実は変わらないからそれはいい  
でしょう。」

二つ目の質問だ。 幻想郷に来たとき俺は地上四千メートルあたり  
から落ちた。

しかし減速して助かったと小町は言った。 それもお前が?」

「いいえ、私は何もしてないわ。 あなたが幻想郷に来ることで付い  
てしまった能力よ」

「・・・最後の質問だ、俺の能力はなんだ?」

「知りたい?」

「ああ、とつても知りたいな」

「いいけど・・・ただ無料ではねえ?」

条件をつけるか、まあ紫の性格からして普通に教えてくれるとは思  
ってなかったがな。

「俺が叶えられる範囲なら・・・」



「あら、物分かりがいいわね。そうね・・・私の家で家事をしてもらおうかしら?」

「そんなことでいいのか?」

これでも家事には自信がある。なにせ両親が共働きで朝早く出て夜遅く帰ってくるから

掃除洗濯は勿論の事、夕食も自分で作っている。それを中学の頃から続けていたから

家事に関しては中々のエキスパートだ。しかし、一つだけ重大な問題がある。

「・・・毎日ここから通うの?」

「いいえ、私の家に住みこみでいいわよ。それとも私と一緒に住むのはいや?」

嫌な訳が無い。美女の家に住み込みとかマジで夢のようだ。

ここまで来て夢だったら俺はあまりの悲しみに引きこもるね、絶対。

「滅相も無い、光栄の極みでございます」

恭しくお辞儀をすると、紫がクスクスと笑う。

「じゃあ決定ね、早速移動するわよ」

「え!ちよつと、先に俺の能力教え」レッツゴ」あああああ

あああああ!?!?」

先に俺の能力教えるって言おうとしたらスキマに飲み込まれた。

少年&少女移動？中・・・

「あいだっ！まったく、もうちょっとゆっくり下ろせないのか？」

隙間に飲み込まれた次の瞬間紫の家に放り出されてケツを強打した。痛みを堪えてあたりを見回すとそこは和風の部屋、広さは大体二十畳ってところか。

見慣れない部屋なのに落ち着けるような不思議な部屋だ。

で、俺の後ろには隙間から上半身だけ出している紫がいると。

「どうかしら？私の家の居心地は？」

「ああ、落ち着けそうだ」

「そう、それはよかった」

そういってまたクスクスと笑う紫。

「さて、聞いてもいいか？俺の能力はいったい何なのか」

「わかったわ、ちょっとじっとしていてね？」

そう言って紫は俺の頭に手をのせる。

三分ほど経っただろうか？紫は俺の頭から手を離れた。

「で、俺の能力はなんだったんだ？」

「それはそれはすごい能力だったわ、嫉妬しちゃうぐらい」

焦らされてよけいに知りたくなってきた。

すごい能力って言ってるし、あゝもうイライラする。

「いいから早く教えてくれ」

「あなたの能力は『不可能と可能を操る程度の能力』よ」

・・・なにそれ？意味わかんない。

「どつという意味だ？」

「つまり不可能を可能に、可能を不可能にすることが出来るのよ」

・・・おk、理解。俺の能力は簡単に言つと何でも出来るようだ。不可能を可能に出来るって・・・どこのチート？

プロアク ヨンリプレイでもこんなことできねえよ。

「理解できたのなら何かやってみなさい」

何かやってみろって言われたってな・・・飛んでみるか！

俺が空を飛ぶことは『可能』だ。

「・・・おお、浮いた」

とりあえず宙に浮くことに成功した、のだがすぐに落ちてしまった。その後も手から炎を出すとかいろいろ試してみたがあんまり上手くいかなかった。

紫いわく、練習不足、だそうだ。練習すればすぐに上達するだろう。

「一応自己紹介しておくわ。私は八雲紫、能力は『境界を操る程度の能力』よ」

「俺は八神零<sup>やがみれん</sup>能力は『不可能と可能を操る程度の能力だ』だ」

「じゃあさっそく夕食を作ってもらおうかしら?」

「よっしゃ、何がいい?」

「まかせるわ」

明日から忙しくなりそうな予感がした。

## 最強能力発覚！（後書き）

主人公のこといろいろと説明しておきます。

名前：八神零<sup>やがみれん</sup>

身長：178センチメートル

体重：65キログラム

能力：『不可能と可能を操る程度の能力』

年齢：16歳

顔：クールな感じでイケメン

性格：冷静、何が起きても動じずにやるべきことをするタイプ

最強の能力を持っているがそれを悪い事に使おうとは思っていない

自分が馬鹿にされても特に何も思わないが、自分の大切な人を馬鹿にされるとイラツと来る。変なところで頭がいいが基本的に普通の人

勝負に能力はあまり使わない（素で避けられるから）

弾幕：うねるレーザーを基本としているんな種類の玉を放つ。意外に避けにくい

代表スペルカードは、禁術『絶対領域』

## 能力の把握（前書き）

あけましておめでとつごぞいます。

正月は祖母の家でまったりとしていたので小説は更新できませんでした。

今日から少しずつ更新していきますのでよろしくお願いします。

## 能力の把握

「知らない天井・・・と言うわけでもないな」

障子の隙間から朝の光が差し込む。

立ち上がって障子を開けると、小鳥のさえずる声が心地よく響き、深い緑色の葉はざわめく。

自分が幻想郷に来たと言うことをあらためて実感する。

現在の時間は朝七時、時計を確認するまでもなく朝七時。

わずか十六年の生活で朝七時に起きる習慣がついてしまったのだ。

静かに佇んでいると腹の虫がなったのでとりあえず朝飯を作り台所へ向かう。

紫の家はとりあえず広い。自分の部屋から台所まで一分ほど歩く。しかも結構複雑な造りをしているので下手すると迷う。昨日はマジで迷ってしまった。

家の中で迷子になるとなんともいえぬ複雑な気持ちになる。正直落ち込みました。

家の中に地図貼っておけよ、とか思っていると何時の間にか台所に着いていた。

「さて、今朝は何を作ろうかな？」

この幻想郷には海が無い。なので本来鮭や鱈子などのオーソドックスな海の幸は食べられない。

のだが紫がどこからともなく新鮮な魚を持ってくるので普通に食べられる。  
いやあ、役得役得。ということで、鮭を焼いて胡瓜の浅漬けと大根の味噌汁を作ることにする。

少年料理中・・・

「よっしゃ完成、うむ我ながらいい出来だ」

味噌汁が冷めないうちに茶の間に運び紫を起こしに行「いい香りね」  
・・・くまでもなかった。

「中々の自信作だぜ」

「それは楽しみね」

茶碗に炊きたての米を山盛りにして食卓に置く。この時代、といっても幻想郷は江戸時代くらいまで技術は進んでいるのだが、さすがに炊飯器はない。  
そのため釜で米を炊かなければいけないのだが、意外と上手くいった。  
小学生時代の調理実習の賜物だろう。

「いただきます」

二人で食材に感謝を込めて合掌する。

紫が何か食べるとき、奇怪なことに音がまったくない。



茶碗を置く音も、味噌汁を啜る音も、咀嚼する音すらもないのだ。  
(豆知識)

「(もぐもぐ)紫、飯食った後能力の練習付き合って」

「別に私がいなくても出来ると思うけど?」

「(もぐもぐ)いや、人に及ぼす効果とかいろいろ知りたいわけよ」

「自分で試せば良いじゃない」

「(ごっくん)自分以外の生き物には使えない能力かもしれないじゃない?」

「・・・いいわ、付き合っただげる」

「(もぐもぐ)さんきゅ」

少年少女食事中・・・

「」「ごちそうさまでした」「」

うむ、満足。胡瓜の浅漬けが改心の出来だった。

「どっだった?」

「美味しかったわ」

そいつって微笑を浮かべる。といつても紫はいつも微笑を浮かべている。  
表情の変化がないと、なんとなく怖い。何考えているのか分からないからだ。

「そりゃよかった。じゃあ裏庭でも行くぞぜ」

「せっかちなえ、もう少しゆっくりすれば良いのに」

「さつさと自分の能力把握しないと何があるか分からんからな」

少年少女移動中・・・

紫の家の裏庭はあまり整備されていない。しかし庭はきちんと整備されている。

おおかた外からは見えない裏庭は適当でいいという考えだろう。  
見栄っ張りな妖怪だ。

「今失礼なこと考えてなかった？」

「気のせいだ、ところで能力使うに当たってなんかコツとか無い？」

「上手く出来ない内は声に出してみると良いわ。あなたの場合』」  
は可能だ』とか」

「なるほど」

「あとは自分のやりたいことを強くイメージすることね、そのくら

いしかないわ」

「なるほど・・・じゃあ実践してみるか！」

とりあえず飛んでみることにする。前はすぐに落ちてしまったが、紫から教えてもらったコツを思い出して、再度やってみる。

広い大空を自分が縦横無尽に飛び回る風景を強くイメージする。そしてそのイメージを言葉に乗せる。

「俺が『大空を自由に飛び回るとは可能』だ」

突如体が浮かび上がる。しかし今回は落ちることは無い。試しに上がれと念じてみると体がさらに浮かび上がった。

その辺を軽く飛び回ってみてすぐにコツをつかんだ。なるほど、空を飛ぶということはなんとも気持ちのいいことだ。

まあこれ以上紫を待たせるわけにも行かないのでさっさと下りるとにする。

「あとは今やったこと的应用ね、次は『可能』を操ってみて」

「つまり？」

「可能なことを不可能にするってことよ」

「OK、じゃあやってみる」

さっきと同じ要領で自分の思いを強くイメージし、言葉に乗せる。

「紫が『これから三分間能力を使うことは不可能』だ」

・・・紫に外見の変化は無い。しかし成功しているのなら隙間は開かないはずだ。

「紫、隙間開いてみて」

「・・・開けないわね」

どうやら成功らしい。能力を無くすことも出来るとは・・・強いな。

ほかにどんなことが出来るか後で実験するでしょう。

回避せよ！死亡フラグ（前書き）

奴が！奴が来る！

## 回避せよ！死亡フラグ

なんやかんやで一カ月後・・・

この一ヶ月間朝起きて飯食べて修行して寝るを繰り返していたところ、

能力をある程度コントロールできるようになった。この能力マジ底が見えねえ。

今では念じただけで思い通りのことが出来るようになってる。

一応何でも出来る能力なのだが、基本掃除とか洗濯に使っている。

修行ついでにこの幻想郷についていろいろ調べていたのだが、

ここは自分が居た世界の約千二百年前だということが分かった。

分かりやすく言うと西行寺幽々子が生まれるずっと前だ。

え？どうやって調べたかって？俺の能力に常識は通用しねえ（キリッ  
っていう感じで能力使ったらわかってしまった。使い勝手マジヤバ  
ス。

「じゃ、散歩してくるわ」

「いつてらっしや〜い」

俺はいつも通り昼飯を食べたあと散歩に出かける。

最近は幻想郷の地理を把握するために散歩に出るのが日課になっている。

能力を使えば地理など一瞬で把握できるのだが、そんなことばかり

やっている

どごそのNET姫のようになってしまつので、できるだけ外に出るようにしているのだ。

まあ散歩と言つても実態は空を飛んでいるのだが。

「今日はいい天気だな、何かいいことがありそうだ」

季節は（おそらく）夏。推定気温は32度という真夏日なのだが俺は汗一つ掻かない。

自分の周りに結界張つて中の気温を二十度に設定しているからだ。ああなんという便利な能力。

上空から見渡す幻想郷の景色はなんともいえぬ美しさだ。

幻想入り前に住んでいたマンションやビルだらけの都会とはまったく違い、

村などを除いて一面が緑に覆われている。しかしその緑色の中で一箇所だけ

黄色に覆われているところがある。今日はそこに行つてみる予定だ。

少年移動中・・・

「・・・すつげえ」

そこは見渡す限りの向日葵畑だった。

小学校時代に育てたような一メートルくらいの向日葵ではない。一本一本が猪木よりでかい。ゆうに三メートルはあるだろう。

その聳え立った向日葵に心を奪われてしまっていたが・・・

「美しいでしょう?」

「ああ、美しい。つい見とれてしまっていた・・・って誰?」

不意に後ろから声をかけられた。振り返ってみるとそこに居たのは深い緑色の髪に日傘を差した一人の女性。やんわりと微笑んだ優しいそうな目。

訂正、微笑を浮かべちゃいるけど目が笑っていない。ありゃあ獲物を駆る鷹の目だ。

ああ、忘れていたよ。太陽の焔ヒレはこいつのステージだったか。

風見幽香かざみゆうか、『花を操る程度の能力』を持つ幻想郷最古参の大妖怪だ。能力自体は基本的にたいしたことはないのだが、高い妖力と身体能力だけで大妖怪と呼ばれる

肉弾戦最強の妖怪だ。マスタースパークの老家本元である。

花をこよなく愛し、少しでも花を傷つける野郎には容赦なく裁きを下す。

通称、—USC《アルティメットサディスティッククリチャー》とか言われる筋金入りのDSだ。

「人に名を尋ねる時は自分から名乗るのが礼儀じゃなくて?」

正論だが・・・まさか幽香にそんなこと言われるとは思ってなかったぜ。

とりあえず怒らせないように返答しないと大変なことになる(俺の命的な意味で)

「これは失礼、俺は八神零、レンと呼んでくれ。君は?」



「私は風見幽香、自由呼んでくれてかまわないわ」

「（ゆうかりんって呼んだら殺されるな）じゃあ幽香って呼ばせてもらおう」

さて、ここからが問題だ。自然に、怪しいところを見せずにここを去らないと

喧嘩を売られる危険性がある。能力を使えば負けるわけではないのだが、使う前に

蹴りでも叩き込まれたら一発KOに決まっている。ノックアウトですめばまだいいほうだな。

「・・・それにしても綺麗な向日葵だ、幽香が手入れしているのか？」

「ええ、この子達は中々育てるのが大変なのよ？すぐ垂れてしまうし」

幽香はうれしそうに笑っている。花を褒められたことがうれしいようだ。

頼むからその気分の良さを保っていてくれ。

「へえ、でもこの向日葵は真っ直ぐと育っているぞ」

「それは私が花を操っているからよ。」

そりゃお前なら出来るだろうな、能力だし。しかしここは冗談だと思っっていることにお気づい。

「フツ、じゃあそろそろ俺はお暇させてもらおうか」

そう言つて俺は人里の方向に歩き出す。飛んでいったら絶対に絡まれるからだ。

三步ほど歩いたところで後ろから声をかけられた。

「あらもう行くの？もう少し遊んでいかない？」

その言葉と同時に後ろから殺気が放たれる。

やばいやばいやばいやばい後ろ見れないくらいとんでもないさつきなんですけど！？

足が竦み、ひざが笑い、冷や汗が流れ、金縛りにあつたように体が動かない。

しかし、ここで焦つたら余計に悪い状況に陥る。冷静に対処しろ俺、

BE COOL

「普通の人間にそんな殺気を放つか？普通」

「残念ながら空を飛ぶ人間は普通の人間とは言わないのよ」

なるほど、そこから見られていたのか。ということは最初から戦う気だつたってことだな。

・・・ここから戦闘を避けることはおそらく不可能だろう。やるしかない。

今思うと、いきなり攻撃してこなくて本当に助かった。

能力なしの俺が幽香と戦うなんて、柴千春が範馬勇次郎に挑むようなものだ。

「あんまり争いごとは好きじゃないんだけどな」

「クスクス、すぐに死んだら駄目よ？」

俺の本能が危険を察知する。早く逃げると叫ぶ。しかしそれに従ったら間違いなく殺<sup>や</sup>られる。

(まさか最初に戦う相手がこんな大妖怪だとはな、俺も運が悪い)

幽香が飛び込んでくる前に肉体を強化、痛覚を無くし、動体視力と反射神経を思いきり上げる。

それと同時に幽香が日傘をたたみ、一瞬で俺に近づき鋭い突きを繰り出してきた。

目に

「怖ッ！」

とっさに身を縮めて傘をよける。髪が数本弾け飛んだが、見なかったことにしておく。

防がれるとは思いつつも、威嚇代わりに腹に掌底をぶちこむ。

パシッ

空いている左手でいとも容易く払いのけられました

返す刃で握られた拳が恐ろしい速度で迫ってくる。瞬間的に額を限界まで強化。

鼻がへし折られる(もしくは顔面を陥没させられる)軌道で迫る拳を頭突きで防ぐ。

ゴガギン!とありえない音が向日葵畑一帯に響く。ええ、超痛い

す。涙隠すのに必死です。

流石の幽香もびっくりしたようで目を丸くして驚いている。  
この隙を見逃す俺ではないわ！

素早く幽香の懐に入り込み左手で右の袖、右手で襟を掴み豪快に背  
負い投げをかます。

しかし流石はゆうかりん、空中で華麗に一回転し、優雅に着地する。  
まあ距離をとるための行動だったからどうでもいいんだが。

「・・・やるわね」

「いやあ、ここまでだ。疲れたから俺は帰る。続きはまた今度やる  
うぜ」

「逃がさないわよ」

そう言つて一気に距離をつめてくる。

まあそりゃあ返してくれないわな。予想通りだ。

「いんや、逃げさせてもらつ」

ヴオン！という音とともに俺の足元（正確には足の下）に隙間が開  
かれる。

距離をとつてからじゃないと落ちてる途中で捕まえられる危険性が  
あったからね。

「お前は強かったよ」

隙間が閉じる瞬間、マスバラしきものがほんの少しだけ隙間を潜り  
抜け、俺の髪を焦がした。

……もうやだ俺あそこに近づきたくない。

## お茶会

「さて、今日は何をして過ごすそうか？」

朝食を食べ、散歩を終わらせたら基本的に暇な時間が待っている。その時間をいつもは紫と話したり将棋（能力で作った）したりして時間をつぶしているのだが、今日は紫が居ないのだ。たまに急に居なくなっただけの間にか帰ってきたりしている。

どこに言っているのかは特に聞いていない（興味がないから）

「・・・幽香の所に行ってみるか」

あの後まだ一回も行っていないので急に襲われる危険性もあるが、まあ大丈夫だろう（適当）

そうと決まれば即行動に移す。お気に入りの服（人里でつけた着物）に着替えて

太陽の畑まで飛んでいく。

少年移動中・・・

「あいかかわらず咲き乱れてんな」

太陽の畑は数日前と変わらず大量の向日葵が咲いていた。

やはりここの向日葵は美しい。ずっと見ても飽きない。

一本持ち帰りたいところだがそんなことをしたら間違はなく死が待っているのでやめておく。

「本当にまた来たのね」

後ろから声がかけられる。

「ああ、けど今日は戦いに来たわけじゃないけどな」

俺は振り向いてそう答える。

「あらそうなの？残念ね・・・」

顔では笑っているが体から殺気がにじみ出ている。おそらく殺るき満々だったんだろう。

「今日はいい天気だからお茶でもと思ってな」

そう言っつて俺はテーブルと椅子を出す。テーブルの上には羊羹とお茶が二人分乗っかっている。

幽香はいきなり出てきた物にちよつと驚いている。が、すぐに平静を取り戻した

ちなみに羊羹とお茶は最高級だ。いやあ、俺の能力って便利

「まあ座れよ」

「じゃあ遠慮なく」

遠慮なんかする妖怪じゃねえだろ！と心の中で思いつつ、椅子を引いてやる。

「あらありがとう」

「なに、レディに優しくするのは当然だろう？」

と、ちよつとキザな台詞を言い、自分も椅子に座る。

「さて、あらためて自己紹介しておこうか。俺の名前は八神零。

能力は『不可能と可能を操る程度の能力』だ。種族は一応人間」

「その能力で私の正拳も防いだわけ？」

「ああ、幽香の正拳を人間が頭で防ぐなんて『不可能』だからな」

あ、羊羹美味い。

「ほら、羊羹美味いぞ。今日はまあ向日葵でも眺めながらゆっくりしようぜ」

「・・・そうね」

少女少女花見中・・・

「じゃ、また来るわ」

「ええ、待ってるわ」

その後小一時間花を見ながらゆっくりして花見はお開きになった。

しかし仲直りできてよかった。ここに来るたびに命狙われてたさすがに死ねる。



現在の時刻は午後一時。ちょうどお昼時なのだが先ほど羊羹を食べたので腹は空いてない。  
紫は出かけると半日は帰ってこないのので家に帰っても暇なだけだろう。

「けどこの時代はまだ原作キャラがほとんど居ないんだよね・・・」  
そう、どこかに言って暇をつぶそうにも知ってる人があまり居ないので行くところがないのだ。  
大抵のキャラが生まれていない。主人公達は千年以上待たないと生まれてこない。  
どうにかならんかといういろいろ考えながら飛んでいると、ふとある人物が頭に浮かんだ。

## 月の逃亡者

俺は今現在の広島あたりに来ている。

ここに来た理由は能力を使ってあいつらのいる場所を調べたらここだったからだ。

「え〜つと・・・こつちか」

ちなみに俺は今山を登っている。草が生い茂って道なんか存在しないが必死で登っている。

飛んでいけばいいと思う人もいるかもしれないが、飛んではところを誰かに見られでもしたら

取り返しのつかないことが起こるかもしれないので我慢して歩いている。

「ふう・・・やっと着いた」

俺の目の前には小さな山小屋？がある。高い山の森の奥の奥の奥に存在するので

場所を記憶していない限り、ここにたどり着くのは不可能だろう。

普通こんなところに住む人なんて誰もいないだろう。しかしあいつらは逃亡中で

見つかつてはいけないのだから、こんなところに住んでいるのもうなづける。

そう、俺が今から会うのは蓬萊山輝夜ほうらいざんかくやと八意永琳やじこるえいりんだ

千三百年ほど前にかぐや姫として地上に来て、その後月からの使者を皆殺しにして逃亡した、  
このことらしいので、もうすでにどこかにいるだろう、と考えたのだ。

能力で探してみたら案の定こんなところにいた、というわけだ。  
ちなみに不審者扱いされて殺される危険性も考えて、痛みを無くして死なない状態にしている。

「（ガンガン）ごめんください」

さすがに出るわけがないとは思いつつもドアを叩いてみる。

「（ガチャ）何の用？」

俺の予想を見事に打ち破り蓬萊山輝夜が出てきた。

このNEET姫は自分が追われていることを理解しているのだろうか？

蓬萊山輝夜ほうらいさんかくや、『永遠と須臾を操る程度の能力』を持ち、

月の都の姫である。何の不自由のない生活に退屈した輝夜は永琳に蓬萊の薬を作らせ、

それを服用した罪により、望んで地上に追放される。後の『かぐや姫』である。

その後罪を許され月からの使者が来たのだが、いろいろあって、月の使者のリーダーを

務めていた永琳と協力し、月の使者を皆殺し、以降地上で隠れ住んでいる。

とりあえず黙っていてもアレなので話してみる。

「永琳さんいるかな？」

「今は出かけているわ」

なるほど。永琳がいないから開けたのか。もしも永琳がいたら絶対  
対に開けさせないだろうし、

もし開けさせたとしてもその瞬間矢が飛んでくるだろう。

買い物にでも行っているんだろうか？なんにせよ居なくてよかった

ZE

「そうかい、じゃあとりあえず（グサツ）！！！！？」

いきなり後ろから矢が飛んできて俺の心臓を貫いた。

さすがにびっくりしたが、輝夜はもっと驚いていて気絶している。  
なぜかって？

身長が低いから俺の胸の位置に顔があるので、いきなり俺を貫いて  
現れた矢にびっくりしすぎたのだ。

何事もなかったかのように振り向いてみるとこれまたびっくりした  
顔で立っている美人。

八意永琳やじころえいりん、『あらゆる薬を作る程度の能力』を持ち

月の都の創設者の一人。年齢は数十億くらいだ。蓬萊山輝夜の家庭  
教師だったのだが、

蓬萊の薬を服用する輝夜を止められなかった事を悔いており、『輝  
夜は自分が守る』

という使命感を持ってしまい、以降輝夜の従者として生活している。  
蓬萊の薬を作った張本人であり、自身も服用している。

「いやあ、まさかいきなり撃つて来るとは思わなかったぜ」

その言葉で我に返ったのか、永琳は弓を構え無数の矢を放ってくる。さすがに全部刺さったりしたら気分的に落ち込むので全部素手で叩き落とす。

余計に驚いている永琳に一声かける。

「とりあえず落ち着け。別に危害を加えるわけじゃないから」

「!?!? どういうこと!」

余計に混乱しているようだ。多分月からの追っ手だと思われているんだろうな。

いやあ、不死にしておいてよかった。マジで死ぬところだった。能力で少し頭の血を下げてやる。OK 落ち着いたようだ。

「とりあえず家に入ろうぜ、順番に説明するから」

「・・・私たちの家なんだけれど」

「そういうこともある」

輝夜を持ち上げて（お姫様抱っこ）家の中へ運ぶ。

永琳は俺にまったく殺気がないことに気が付いたのか、すでに弓はしまっている。

家の中は若干寒かった。まあ高い山の上だしこの時代にストーブなんてあるわけがないので

しかたないことなのだが、気になるので気温を20度前後まで上げる。

後ろで永琳が、気温が！？とか言っているが無視しておく。

俺は椅子を三つ削ってそのうちの一つに輝夜を座らせておく。  
永琳はありえないことが連続で起こるので少しなれたようだ。もう  
驚く事をやめている。

「ほら説明するからまず座ろっぜ」

そっついながらテーブルと饅頭とお茶を創る。

「・・・いったいどこから出したんですか？」

「いやまあ順番に話すからちよつと待ってくれ」

俺は幻想郷のことについていろいろと話した。

魑魅魍魎の妖怪達が跋扈する世界だということ。

妖怪意外にもいろんな種族が共存していること。

幻想郷にいる奴等は大抵『〜程度の能力』を持っていること。

俺の能力が『不可能と可能を操る程度の能力』だということ。

幻想郷に住まないかと誘いに来たこと。

「まあそっついわけなんだが」

ちなみに輝夜はいつの間にか起きていて饅頭をおいしそうに食べて  
いる。

何回かのどに詰まらせていることは言うまでもない。

「しかしなぜ私たちを？」

「今は言うことは出来ない。いずれ分かるときが来る」

「・・・そうですか」

ちなみになぜ今言えないかはまだ現実と幻の境界がないからだ。今このことを説明すると歴史が狂う可能性がある。

「で、幻想郷に来るか？」

「・・・しばらく考えさせてください」

まあすぐに答えが出るとは思っていなかったが、どうせ来ることにはなるだろう。

「わかった。まあ急ぐことはないからゆっくり考えるといい」

そういつて俺は立ち上がる。もうそろそろ帰らないと紫に起こられるからな。

「帰るんですか？」

「？ああ」

「その前に・・・矢を抜いた方が良くかと」

「あ」

忘れてた。

## 月の逃亡者（後書き）

すいません。カオスになりすぎました。



・・・やりすぎた

「嗚呼<sup>あめ</sup>、これが最後の一本か・・・」

ただいまの時刻は三時のおやつ時。だが持ってきたお菓子が底をついた。

幻想郷に来てから約二ヶ月。すぐになくならないように節約していたのだが・・・

ついにチュッパチャップス（プリン味）一本になってしまったのだ。

「悔いの残らないように味わって食べよう・・・いただきます」

泣く泣く最後の一本を口に入れ「あら、おいしそう。私にも頂戴<sup>バク</sup>」

・・・

「ぐすつ、俺のチュッパチャップス・・・最後のチュッパチャップス・・・」

「うんおいしい」

紫に食われた。最後の一本を食われた。残しておいた一本を食われた。

人のものを奪っておいて悪びれた様子もないスキマ妖怪八雲紫。この加齢臭め。

最後を一本の味わって食べるのがどれだけ大事なことが分かっていないんだ。

なんかもう新しく創る気も失せた。というか生きる気も失せた。いつそ土に還りたい。

四時間後・・・

「藁人形に・・・藁人形に・・・藁人形に、五寸五寸五寸釘ごすんごすんごすんくぎ・・・」

「レン・・・そろそろご飯作ってくれない？」

ずぶとい大妖怪も少し焦っている。家事をやるはずの人間が部屋の隅っこで体育座りをしてうつむいて、ずっとなにかの呪いの様な物を呟いているのだ。そりゃあ焦るだろう。

罪悪感も少しだけ出てきたようだ。しかし俺の傷ついた心ははまだ



っても不可能。

念のためゆかりんが泣いている写真をさまざまな角度から撮ってから許すことにする。

それにしても泣いているゆかりんなんてレアすぎる。あらためて自分の能力のすごさを思い知った。

「あゝはいはい、もう怒ってないよ。ごめんな〜」

紫を抱きしめて頭をなでて言葉をかけて落ち着かせる。勿論安心感増大のおまけ付き。

十分ほど経って紫から寝息が聞こえてきた。泣き疲れて寝てしまったようだ。

ちなみに寝るまでずっと紫は『ごめんね』と繰り返していた。

さすがにやりすぎたと俺も反省しました。泣くとは夢にも思わなかったもん。

あと、これは俺の憶測だが、紫はもしかしたら生まれて始めて泣いたのではないだろうか？

妖怪の実力社会の中でいろいろあっただろう。自分の力をよく思わないもの。

自分を利用しようとするもの。殺そうとするもの。信頼できる人（妖怪）なんていなかっただろう。

そんなことを考えていると急に紫が愛しく思えた。

なにがあっても俺はこいつを守る。そう勝手に決めた。

「おやすみ・・・」

俺は布団に紫を寝かせ、そっと部屋を出た。

・・・やりすぎた（後書き）

若干壊れかけましたね。

ゆかりん論者の方には申し訳ございませんでした。

## 我が唯一にして最大の

「五千二百六十二円になりまーす」

「ありがとうございますー」

俺は今元の世界に戻ってきている。無論お菓子を買ったためだ。ちなみにお金は財布から無限に出てくるので金額を気にする必要はない。

「わざわざ買いにこなくても創ればいいんじゃない？」

「お菓子だけは創ってはいけないと感じたのだよ。あと他にも用事があるしな」

隣には紫がいる。朝に元の世界にお菓子買いに行くといったらついでくるといったのだ。

さすがに行方不明者にされていたら洒落にならないので日付は俺が幻想入りした直後に設定してある。

「さて、アイツを幻想入りさせにいくか」

幻想入りする前、本当は親友の家に行く予定だったのだ。いまからそいつを拉致して幻想郷に持っていくのだ。

「紫ーこれから友達のところに行くけど来るか？」

「行くわ」

「なら・・・」

少年少女移動中・・・

ピンポン

チャイムを鳴らして三秒後、ドアが開いた。

中から顔を出したのは一人の小年。

那<sup>なか</sup>華<sup>がわ</sup>川<sup>こう</sup>紅、俺の唯一にして最大の親友だ。

身長は俺より少し高く、性格は冷静沈着。けどツツコミが下手なやつだ。

俺が東方を進めたらどっぷりはまってしまった奴の一人である。

腕前は俺とほとんど同じ。しかしこいつはキーボードでクリアするのだ。

いやまったく信じられん。俺はキーボードじゃ細かい動きが出来ない。

「おお、来たか。まあ入れよ」

「おじゃましまっせ」

中に入ると紅はすぐにパソコンをいじり始めた。

どうやら永夜抄の途中だったようだ。難易度はルナティック。俺達は一応クリアできる。

「いや、この家来るのも久しぶりだな」

「お前三日前に来たじゃん」

そっけだっけ？よく覚えていない。なにせ二ヶ月ほど前のことだ。

「ところで紅よ」

「なに？」

「俺幻想入りしちゃった」

「そうか、ゆかりんとかに会ったか？」

俺の突然の電波発言にも戸惑うことなく対応する紅。

まあいつつもふざけた発言ばかりしていたから慣れてしまったんだろう。

「ああ、紫と幽香と輝夜と永琳に会った」

「どうせなら主人公に会えよ」

「いやあ、俺がいる時代にはまだお前の後ろにいる奴とかしかいないだよ」

「お前の電波にも磨きがかかってきて・・・なんだ夢か」

紅は後ろを向いてからすぐにパソコンに向き直る。

「あら、私はあなたの夢の住人だったのかしら？」





「よし、じゃあ俺達は帰る。達者で暮らせよ」

「待てよ！今の思いつきり俺幻想入りフラグ立ってたじゃん！」

「冗談だ。で、来るのか？」

「行くに決まってるじゃん」

「一名様ご案内だ。紫、つなげて」

「わかったわ」

俺達は幻想郷に戻った。新たな外来人を連れて。

よかったな

「幻想郷に来た感想を一言どうぞ」

「空気がうまい」

「たしかに」

現在紫家で俺が創った饅頭と緑茶でまったりとしている。

紅はせっかく幻想郷に来たというのにオーバリアクションを見せない。

まったく冷静な男だ。俺の前では、はっちゃけることもあるけど

「えゝお前も今日からこの紫家で暮らすわけですが、働かざるもの食うべからずです」

「と言いつと?」

「つまり掃除洗濯などの家事を俺といっしょにやるってことだ」

「OKまかせろ。家事ならお手のモンだ」

「だがしかし!もっと重要なことがあるのだよ」

「・・・なんとなく理解した。死亡フラグ妖怪の回避だろうか?」

「その通り!」

俺の言わんとすることが分かるとは・・・さすが我が親友、むしろ

心友。

「そのためにあなたの能力を今から調べるのよ」

俺と紅の間にいきなり紫が出てきた・・・

「なるほど・・・だが能力がついてない可能性とかはないのか？」

のにもかかわらず平然として緑茶をすする紅。本当に冷静な奴だ。

「外来人が幻想郷に来た場合は約千分の一の確立で能力がつく」

「・・・ついてない確立の方が圧倒的に高いじゃないか」

「さらに戦闘に使える能力が付く確立はそのまた千分の一だ」

「天文学的数値だな」

「大丈夫だ、俺もチート能力手に入れたから」

「兎にも角、調べてみましょう？」

そういつて紫が紅の頭に手を置く。さあ吉と出るか凶と出るか？

二十分後・・・

ようやく紫が紅の頭から手を離れた。ずいぶん時間がかかったな。俺のときは三分ほどですんだのだが、結局どういった能力だったの

だろうか？

「・・・あなたの今の能力は『空間を操る程度の能力』よ」

空間ねえ、使いようによつては弾幕勝負で負けることはないな。まあ俺はどんな勝負でも負けるわけないけどな。しかし・・・

「空間を操る・・・面白そうだな」

「それはいいんだが紫、今の、というのはどういうことだ？」

「それは俺も思った。どういうことなんだ？紫さん」

「紫でいいわ」

「了解、じゃあ紫、どういうことなんだ？」

「簡単に説明するわね、まず普通の妖怪たちは生まれたときからっただけ

自分固有の能力を持っているのよ。けど極稀に複数の能力を持って生まれてくるのがいるわ」

「つまり俺は・・・」

「ご察しの通り。あなたは複数の能力を持っていて、今使えるのは『空間』だけなのよ」

「紫、紅はいつたいどれくらいの能力を持っているんだ？」

「・・・ざっと七つほど」



「よし、明日から頼むぞ、零」

「おK、さっさと覚えるよ、紅」

「それよりさっさと夜ご飯作ってよね」

「了解」

さて、明日からもっと忙しくなりそうだな。

## 鬼畜ゆうかりん

あれから一ヶ月。紅もすっかり空間を操れるようになった。最近はずっと普通の弾幕を出すために霊力の強化に当たっている。しかしまだ二つ目の能力は開花していない。まあ空間だけでも最強すぎるんだが。

しかし戦闘の経験はゼロだ。本番でビビっちゃ元も子もないからな。早めに体に覚えこませなきゃ・・・

あと紅が料理を手伝ってくれることによって一気にLVアップした。やはり二人でやると楽しいし、何より味見が二人になることによって、より料理がうまくなる。

そして紅には隠れた才能があった。それは・・・

「最高だああああ！（バリボリ）」

「うむ、我ながらよく出来た（ガリガリ）」

「天下第一品よねえ（無音）」

漬物を漬けることだ。

半端なくうまい。これがあるだけでご飯山盛り三倍いけるくらいうまい。

ちなみに俺のお気に入りには柴漬はっばしけである。紫と紅はたくあん。いやあマジ柴漬けうまいわ（バリボリ）



少年少女食事中・・・

「」「ごちそうさまでした」「」

満足満足。今日も半端ないつまさだった。

「紅、皿洗ったら出かけようぜ」

「どいかに?」

「適当に」

「k・・・(そういえばこつち幻想郷に来てから一度も紫家出てないな)お

「よし、じゃあさつさと皿洗つべ」

「三分以内に終わらせるぞ」

「一分の間違いだろ」

「お前が時間止めれば一秒で終わるだろ」

「面倒くさいからヤダ。さ、話ししてる暇があったら皿洗つぞ」

「よっしや」

少年皿洗い中……

「じゃあ紫、行ってくるわ……あ？」

「どうした？」

「またいなくなった」

「気にすんな、ゆかりんの考えることなんてわかりやしないんだから」

「……それもそうだな」

「さ、行くうぜ零。どこに行くんだ？人里か？」

「そつえば最近人里行ってねえな……まあ今日行くところは」

「太陽の畑だ」

「……は？」

「太陽の畑だ」

「……」

紅の額から冷や汗がたらたら出ている。それに若干震えているようだ。

「あゝごめん零、俺お腹が頭痛で痛いからいけないわ」

「落ち着け紅、お腹が頭痛で痛いことはありえない」

「うるせえ！グードさんも『ありえない、なんてことはありえない』って言ってたじゃねえか！」

「あーあれ矛盾してるよな」

「話しそれたけどさー太陽の畑つつたらゆうかりんいるじゃんよー、絶対殺されるって」

「大丈夫だ……………(多分)」

「多分つつたか！今多分つつたろ！」

「うるせえな！どうせいつかは会うことになるんだからいいじゃん」

「俺はまだ死にたくない！死にたくないん」「うるせえ(ドガッ)ゲハッ!？」

めんどくさかったので腹に一発かまして気絶させました  
さ、背負っていこうか。

少年移動中……

大要の畑に着きました。しかし幽香がいません。勿論紅は気絶しています。

こういうときは、みんなでいっしょに呼んで見よう！せーのっ

「ゆうかりーん！」

「誰がゆうかりんよ！」

「OH！落ち着くんだ、話せば分かる」

いつの間にか俺の背後にまわり、首筋に日傘を当ててきやがった！  
なんてクレイジーな奴だ！だからUSCって言われるんだ！

「今すぐく失礼なこと考えなかった？」

「それは気のせいだよゆうかりん」

「ゆうかりんって言うなって言ってるでしょ！」

「ちよっ！待って！首に風穴空くからそれ以上を日傘を押し付ける  
な！」

多分この状態でマスパとか撃たれたら余裕で死ねるね、紅もいっし  
よに。

「まあ落ち着けよ、今日は喧嘩売りに来たわけじゃないからとりあ  
えず日傘を離してくれ」

「……じゃあ何しに来たのよ？」

ようやく日傘を突きつけるのをやめてくれた。いやあ死ぬかと思っ  
た。

「こいつ関係だ、つと！」

紅を地面に下ろす。

「・・・誰よ？」

「俺の親友さ、能力は『空間を操る程度の能力』だ」

「で？」

「は？」

「だからなんでここに連れて来たかって聞いてるのよ！」

「まあまあそう怒るな、小皺が増えるぞ」

「殺す！」

幽香は日傘の先端を俺たちに向けて構えた、そしてどんどん妖力が先端に集まって・・・って

「待て待て待て！俺は良いが紅が死ぬって！」

「殺すのよー！」

その言葉と同時に俺の視界が真っ白になった。

「アブねー、お前今結界張らなかつたらマジで死んでたぞ！」

「死ねばよかったのよ！」

「わかつたわかつた謝るから話を聞いてくれ」

俺は目の前に向日葵畑に会う様な柄のテーブルと椅子、紅茶とクッキーを出す。

「あらこのお菓子美味しいわね」

変わり身速ッ！

「こんなものでよかつたらいくらでも」

違う種類のクッキー、ケーキなどをたっぷり創る。

「この誠意に免じてさっきの無礼な発言は許してあげるわ」

「そいつはどうもゆうかり」次言ったら容赦しないわよ」「ユーカリ

の葉っぱってうまいよね」

また死に掛けるところだった……

「で、結局何の用なの？」

「そこに寝てる男と殺さない程度に戦ってほしい」

「理由は？」

「少しでも戦いに慣れさせないといつ死ぬか分からないんだよ、この幻想郷は

それに俺以外で戦闘してくれる奴なんて限られてるだろ。たのむぜフラワーマスター」

「……死んでも文句は言わないでね」

「そのときはそのときだ、そう簡単に死ぬならどっちみちすぐ死ぬだろ」

「報酬は？」

「常識の範囲内ならなんでもいいよ」

「OK、引き受けましょう」

「交渉成立だ、じゃあこいつ叩き起こして夕方まで鍛えてやって、俺その間散歩してくるわ」

そういつて俺はふわりと浮かび上がる。

「よろしくー」

返事も聞かずに超音速<sup>マッハ</sup>で飛んでいく。  
さあどこに行こうかな？



## 試合、むしろ死合（前書き）

えー最弱なる斬賊の『平凡少年が幻想入り』seed kou』  
が始まりました。

この作品は僕と最弱なる斬賊で前から考えていた作品でしてね、  
紅視点で描かれる作品です。休日しか更新できないようですが、  
あちらの方も（むしろあちらの方が）面白いのでよろしく願ひし  
ます。

きちんと二人で話し合っで決めているので、盗作ではありません。  
抗議は受け付けませんよー

## 試合、むしろ死合

「あれ？いないな？」

昼時

そろそろお昼にしようかと太陽の畑まで来て見たのだが、幽香も紅もいなかった。

まあ冷静に考えてみると、あの幽香が花のあるところで思い切り戦うわけがない、という結論に至ったわけで。おそらくどこかに移動しているのだろう。

とりあえずその辺りを探して「ギャアアー！（ドゴーン）」……見る必要もなかった。

山のほうから紅の悲鳴と爆発音が聞こえたので、そっちに飛んでいく。

少年移動中……

「うわーさすがに鬼畜過ぎるな」

そこには空を飛んで弾幕を撃ちまくる幽香とそれを空間を駆使しながら何とか避けている紅がいた。

勿論地面にはクレーターだらけ、幽香はドSの微笑を崩さず元祖マ

スタースパークを乱射する。

うーん、幽香に預けたのは間違いだったな？あ、直撃した。死んだんじゃないか？

「一方的な虐殺ひとまず戦闘を止めるためにゆうかりんの前に出る。」

「幽香ー、ストップストップ、それ以上やったら死ぬから。つーか死んでるから」

「大丈夫よ、死なない程度にセーブしたから」

よく見ると死んだクイーン　ンゴスタのようにピクピクと動いている。

ギリギリ死んではないようだ。まあ死んでもアレイズかければ生き返るけど。

「中々センスあったわよ、一応手加減していたけど攻撃がほとんど当たらなかったわ」

「一応つてところが気になるな・・・まあひとまず

『フルケア』

HP全回復の魔法、フルケアを唱えると、紅の体が黄緑色の光に包まれる。

範囲魔法なので俺と幽香の体も同様に黄緑色の光で包まれる。

「紅、起きろー。おきないとお前のP　P3000粉々に破壊するぞー」

すると紅の目蓋が徐々に開いていき、その黒き瞳が俺を捉えた瞬



「何の話だ!」

「幽香に殺されかけたのはお前の差し金だろうが!」

「あれにはちゃんと訳が「問答無用!」!?!」

紅が一瞬で距離をつめ、ボディーブローをくらわしてきた。

「ぐっ!」

すぐに体勢を立て直し、また少し距離を稼ぐ。

あいつ・・・もうゆるさねえ。力の差を教えてやる。

「先に攻撃してきたのはお前だからな!後悔すんなよ!」

「鉄拳『問答無用の一撃』」

ただ単に超音速<sup>マッハ</sup>で近づいてぶん殴るだけなんだが、弱い妖怪や人間程度ならおそらくよくて内臓破裂、悪かったら死ぬだろう。

だが俺は親友を倒すのに躊躇しない!弱者は常に負ける運命にあるのだ!

「終わりだあああああ!」

狙うは心臓。一撃で決めるつもりだ。紅、怨むなら自分の弱さを怨みな!

まさに一瞬で紅に近づき、左の胸に拳が当たるそのときだった。

紅の姿が掻き消えた。

はたして、紅は俺の後ろにいた。

空間を転移させたのか？否、あの一瞬で俺の攻撃を見切り、転移できるはずもない。

幽香に助けてもらったか？否、あの幽香が紅を助ける義理も理由もない。

ならば考えられることは一つしかない。

「紅・・・新しい能力を見つけたな？」

「・・・ああ、そのようだ」

## 二つ目の能力

「どうだ？紫」

今俺達は紫家に戻り、居間で饅頭食った紫に新たな能力を調べてもらっている。

前のように能力を調べるのに時間がかかっていることと、幽香にしがかれて疲れたのが原因なのか

紅は正座したまま熟睡している。はたから見たら精神集中しているようにしか見えないだろう。

ちなみに“俺達”の中には幽香も入っている。勿論勝手についてきたのだ。

あと、予想はしていたが、どうやら紫と幽香は知り合いらしい。友達ではないようだ。

しかし戦闘の意思があるわけではないようなので今は置いておく。

「分かったわ」

紫がやっと紅の頭から手を離れた。

「コウの二つ目の能力は・・・」

「ちょっと待って、こいつ起こすから」

俺はゆっくりと紅に近づき

「っしゃあー！（ガッンー！）」

慧音ばりの強烈な頭突きをかます。

「グアツ!？」

少年悶絶中・・・

「普通に起こせよ・・・」

「その考えはなかった」

まだ頭を抑えて痛そうにしている紅。よほど痛かったのだろう。

「で、もう言ってもいいかしら？」

「「おk」

「紅の二つ目の能力は『時間を操る程度の能力』よ」

・・・え？

「紫、もう一回言って」

「『時間を操る程度の能力』よ」

OK、聞き間違いではないようだ。

「・・・紅」



「言いたいことは分かっているさ」

「PAD長だな」

「ああ、PAD長だ」

「おめでとう、完全に瀟洒な執事の誕生だな。燕尾服創ってやろうか？」

「さすがにそれは勘弁してくれ」

「何意味不明なこといつてるのよ」

おっと、紫たちの存在を忘れていたぜ。

「まあ気にしなくていいよ、ただのネタだ」

「余計に気になるわね」

「いくら紫が頭よくてもこればかりは理解できないよ。なあ紅」

「ああ、さすがにこれはな」

俺達は顔を見合わせてニヤリとする。原作ではありえないことだからな、これは。

そのとき、淡々と饅頭を食べていた幽香が口を開く。

「レン、そんなことより約束を忘れてないでしょうね」

約束？俺なんか約束したっけ？

「忘れたの？何でもするって約束でしょう？」

・・・あ、あの時か（十二話『鬼畜ゆうかりん』参照）

「思い出した。で、なにがいい？」

「あの時私たち決着つけてなかったわよね？」

もういやな予感しかしない。

「いやあ、あの時続けてたら俺が負けてたと思うぜ」

「けど決着はついてないじゃない。だから・・・」

「・・・だから？」

「死合しましょ」

字が違ーう！それどちらかが死ぬまで止まらないデスゲームですか  
ら！

せめて試合なら何とかなるのに・・・

「まだ死にたくないんだけど」

「死合」

「いやだから「死合」・・・まじかよ」

「明日の正午、太陽の畑で待っているわ」

そういつて幽香は夜の闇へと消え「あ、そうそう」・・・なかった。

「来なかったら・・・分かるわよね？」

幽香はドSな笑みを浮かべて夜の闇へと消えていった。

紫と紅は落ち込む俺にこういつてくれた。

「・・・ご愁傷様」

と

俺生きて霊夢に会えるのかな・・・

## 死合、いやマジで死合

「・・・逝ってきます」

「ああ、逝ってこい。骨は拾ってやると言いたいが骨が残っているか分からないので言わないでおく」

「・・・・・・・・」

「零、お前は良い奴だったよ」

「ありがとう、友よ」

俺達は抱擁を交わし、離れる。俺はゆっくりと空中に浮き、静止する。

時間は午後十一時五十分。今から太陽の畑に向かうのだ。

幽香との決闘まがいの殺し合いは正午に始まる。今から飛んで向かえば五分前には着くだろう。

いやね！勝てるんだよ！勝てるんですよ！能力使えば楽勝ですよ！？  
けどね！勝ったら勝ったで付き纏われるじゃない！一生狙われ続けるよ！

そんなのいやだ！俺はまだ死にたくないんだ！という感情で俺の心は溢れています。

あー面倒くせえ、マジどうしようかなー、いつそのことボロボロに負かしちゃおっかなー。

ドSをあえていぢめる・・・いいかもしれな(r y  
まあとりあえず行きますか。

俺は紅に一瞥をよこし、飛んでいく。いざ、決戦の地へ。

少年移動中・・・

太陽の畑にはすでに元の姿になかった。向日葵はすべて端に移動している。

おそらくは思い切り戦つたためだろう。面倒くさいことになりそうだそこにはいつもどおりの幽香がいた。少なくとも外見だけは。

体中から妖気と殺気が滲み出て、いかにも“私、いまから戦闘します”みたいになっている。

幽香は俺を見つけるとドSの象徴である微笑をよこした。

俺は地面に降り立つ。

「来たぞ幽香」

「まだ十一時五十九分よ」

懐から懐中時計らしきものを取り出し、時間を確認する幽香。

「幽香、やめにしないか？そもそもなぜ俺とそんなに戦いたいんだ？」

「愚問ね、まだ決着がついていないでしょう？」

・・・説得で来る可能性を信じてみたが、無駄だった様だ。  
仕方ない・・・幽香には悪いが、少し本気でやらせてもらおう。

「・・・時間よ」

幽香は日傘をたたみ、俺に向ける。

俺は構えずに、身体能力を強化する。

「女に手を上げるのは嫌いなんだがなあ」

その瞬間、幽香の目が獲物を狩るソレへと変わった。

「行くわよ？」

幽香が突然いなくなり、気が付いた時には俺は吹き飛んでいた。

「ゲハッ!？」

近くにあった岩に激突し、ボキボキ!と、いやな音がした。  
アバラが何本か折れたのだろう。鈍かった痛みが徐々に激痛に変わる。

「なるほど・・・前はまったく本気ではなかったようだな」

「あれ、これでも本気じゃないわよ？」

まったく、なんて化物だ。常人が勝てる相手ではない。

だがしかし!俺は常人ではない。即座に体を治し、何事もなかったかのようになり上がる。

今度は先ほどの何倍にも身体強化をかける。

「だが、俺もまったく本気じゃない。今ので止めをさせなかったのが、おまえの敗因だ」

刹那、幽香が消えた。いや、少なくとも常人から見たら消えたようにしか見えなかっただろう。

しかし、こちらは能力で身体能力を上げている身である。

それもさきほど吹き飛ばされたときは比べ物にならないほどに。俺の目には幽香がはつきりと見えていた。

日傘を突き出し、性格に俺の心臓を貫かんと、尖った先端が迫ってくる。

「・・・遅いよ、幽香」

懐に入り込み、腹に強烈な一撃を叩き込む。

「ウツ!?!」

今度は幽香が数十メートル吹き飛び、地面に叩きつけられる。

しかし、すぐに立ち上がってくる。どうやら効いていないようだ

「やるわね・・・けど次はそううまくいかないわよ」

先ほどよりさらに早く、幽香が迫ってくる。が、まだ遅い。

一瞬で幽香の後ろに回りこみ、乱打を浴びせる。

「!?!」

また吹き飛ばされるが、今回はすぐには立ち上がってこない。どうやら少しは効いたみたいだな・・・

「幽香・・・もうやめにしないか？」

「馬鹿いわないで、どちらかが負けを認めるまで終わりはしないわ、終わらせないけど」

・・・ここでやめてくれればどれだけうれしかったことが。おそらく説得はもう無理だろう。やるしかないか・・・

立ち上がった幽香を見て、俺は心を決める。

「残念だが、終わらせてもらうぞ。禁術『絶対領域』」

この技名を宣言した瞬間、世界が変わる。

この技は前回の戦闘の後に、俺が考えた技の中で最も奇怪な技だ。幻想郷中の妖怪たちが束になっても絶対に勝てないだろう。

「何をしたのか分からないけど・・・終わらせはしないわよ！」

幽香が渾身の左ストレートを放ってくる。

「おいおい、『か弱い人間の女の子』がそんな弱いパンチで俺を殺すつもりか？」

それを俺は指一本で制す。



この技は俺の半径二十五メートルに境界を引く、ある種の耐久スペルだ。

その中は完全な俺の領域。何人たりとも逆らえはしない。

俺の言葉は常に絶対で、俺の言ったことは常にその通りになり、俺のやることはすべて正しくなる。

つまり、今の幽香はただの人間の女の子に過ぎない。

「!?!?何をしたの」

「知らなくていい。『止まれ』」

幽香はその場でピクリとも動かなくなる。

「さあ・・・どうしてほしい？」

俺は幽香の目を見る。

今はまるつきり状況が逆だ。今度はこちらが狩る側の回っている。

獲物を狩る鷹の目をしていた幽香の目は、今や恐怖で染まっている。額にはうっすらと冷や汗が滲み、心なしか震えているように見える。

「目を抉ってほしいか？爪を剥がしてほしいか？それとも・・・すぐに死にたいか？」

俺はとびつきりの笑顔を作ると同時に幽香の何倍もの殺気を放出する。

「!?!?馬鹿にしないで!?!」

喚く、叫ぶ、鳴く。あらゆる手を使って動こうとするが、その体は微塵にも動かない。

初めて味わう恐怖を、初めて味わう敗北を認めようとはしない。

「さつきも言ったとおり、俺は女をいたぶる趣味はないんだよ。降参してくれ。」

「……いやよ」

ここまでの絶対的な力の差を見せ付けられて、幽香はなおも降参しようとはしない。

「まあ降参しようとしなかつと、お前の負けは確定事項だ。もう『寝ろ』『寝ろ』」

突如、留め金が外れたように、幽香の体は崩れ落ちる。

ただ単に寝かせただけである。一時間もすれば目を覚ますだろう。

俺は柔らかなベッドを創り出し、幽香をそこに寝かせる。

太陽の光が当たりキラキラと輝く髪を一度撫で、俺はその場を後にした。

死命、いやマジで死命（後書き）

やっちゃった感MAX

## 味噌汁は出汁が命

あれから一ヶ月、幽香の姿は一度も見えていない。

太陽の畑に行っても姿を見せず、気配すら残ってなかった。

向日葵も手入れがされていないせいか、くたびれていたので治しておいてやった。

俺に勝つために修行でも積んでいるのだろうか、それとも唯単に落ち込んでいるだけだろうか？

そんな日が続いた頃・・・

「・・・これでどうだ？紅」

「・・・若干だがコクが足りない。もう少し煮干を入れたらどうだ？」

「やっぱりか、しかし鰹節ももう少し必要だと思わんか？」

「なるほど・・・いいんじゃないか？」

俺は味噌汁の研究に勤しんでいた。

誰もが美味しいといえる味噌汁の完成を目指し、ひたすらいい出汁ができる材料を探し、

それに合う食材を見つけ、紅や紫に味見をしてもらい、日夜修行に勤しむのだ。

味噌汁は無限の可能性を秘めている。その材料や食材、火加減や具の厚さによって

味は変わり続ける。その日の気温なども関係しているだろう。その中でどれだけ完璧な味噌汁を作り続けることが出来るか？それに挑戦しているのだ。

一度完璧な味噌汁が作れたからといってもう一度作れるとは限らない。  
問題はいつどんなときでも美味しい味噌汁が作れるかどうかということだ。

そういうわけで、今日も俺は味噌汁を作りつつける。（創ればいいって思った奴、表へ出る）

「零、そろそろ朝飯の時間だぞ」

「もうそんな時間が、今日は何にする？」

「たしか良い卵が入ってたはずだ。玉子焼きでも作ろうか。中に八ム入れて」

「あとこの味噌汁と、お前の漬物、もやしがあるからおひたし作るか」

「よし、決定。早速調理開始だ」

少年調理中……（ついでに食事中……）

「ふう……食後の一服は最高だな」

「そうだな、食後の一服をリボ ナポリンでするお前はどうかと思

うがな」

「ん、紅はリボン トロンの方が好きだったか？」

「そういう意味じゃねーよ。茶飲め、茶」

なんてふざけた会話をしながら会話を楽しむ一日。  
ちなみに紫は気が付いたらまたいなくなっていた。勿論食事した後  
でね。

あいつ本当どこ行ってんだろ？今度こっそりついていってみるか。

「よしっ！皿洗ったら研究再開するべ」

「ちょいまち、柴漬け切れてきたから漬けなおしてからだ」

「おいおい、切れるの想定して先に作っておけよ」

「お前が予想以上に食うからだろうが！」

「気にするな、ひとまず皿洗うぞ」

少年皿洗い中……

「二分三十七秒、この量にしては少し遅かったな」

「ああ、二分三十秒切りたかったところだ」

「よし、じゃあ俺味噌汁の研究に没頭してくる」

「じゃあ俺は漬物漬けなおしてくる」

「美味しいのよろしく」

「俺が不味いのなんて作ったことあるか？」

「あつたら今頃お前は死んでいる、てか殺している」

「死にたくないからさっさと漬けてくるわ」

「いつてらー」

・・・久々に浅漬け喰いたくなつたな。  
味噌汁作った後に頼みに行ってみるか。

少年移動中・・・

「ん〜っと、次はオーソドックスにもやしで作るかな？」

もやしの味噌汁はとても美味しい。もやしの出汁と、あのシャキシャキした歯ごたえが  
絶妙なハーモニーを生み出してうんたらかんだらだからだ。

材料の種類、食材の種類なんて無限に存在するのだから、  
当然組み合わせも無限に変わってくる。その上味噌も数百種類ある  
のだ。

その無限の可能性からたった一つの完成を導き出すことは不可能。

だからこそやる価値がある。

不可能だということは、終わりが無いということだ。

終わりが無いということは、いくらでも美味さを積み重ねることが出来るということだ。

つまり！霊夢や魔理沙が生まれてくるまで約千二百年！

その間に俺の味噌汁はどんどんL V U Pするということ！千二百年後が楽しみだ！

とまあ、こんな感じで妄想に耽りながらもやしの根と芽をとる俺。

これをしないと一気に味が落ちるモンでね、一本一本手作業で丁寧にやらなきゃいけないわけよ。

少年料理中・・・

「うし、完成」

我ながらよく出来た。試しに小皿に少し入れて、口に含み味を見る。

「・・・よし！今まで出一番の出来だ！」

「そうなの？私にも飲ませて」

「いいぞ！この美味さは誰かに伝えなきゃもつ、たい、な・・・い？」

今俺の後ろから聞こえた声は紛れもなく・・・



「……いつのまにここに来た、幽香」

ゆうかりんでした

「十分前くらいかしら？」

「うそお！そんな前からいたのか！」

「あなた、話しかけても聞く耳持たずで一心不乱にお味噌汁をかき混ぜてたわよ」

なんと……集中すると周りが見えなくなるといっが、まさかここまでとは。

「で、今日は何の用事で来たんだ？再試合リベンジに来たのか？」

「私も勝てないとわかった相手に突っ込むほど愚かじゃないわ。今日は礼を言いに来たの」

「礼？俺何か礼を言われるようなことしたっけ？」

「私が寝ている間に花の手入れをしてくれたじゃない」

その程度のこと……つか一ヶ月間ずっと寝ていたのか？

「なるほどね……ほら、味噌汁」

殺し合いをする気もないようなので、味噌汁を勧める。  
それを無言で受け取り飲む幽香。

「・・・どうだ？」

「こんな美味しいお味噌汁、生まれて初めて飲んだわ」

「どうやら、高評価をいただけたようだ。」

「それはよかった。レシピいるか？」

「是非」

この後紅が手伝いに来て、幽香をゆうかりんと言ってしまったのは、また別のお話である。

味噌汁は出汁が命（後書き）

・・・あれ？味噌汁のことしか書いてないや

## メタル アソリッド

いつのまにか一年後

気が付いたら一年経ってました。

毎日毎日味噌汁作って幻想郷飛び回って紅や紫と将棋したりしてたら一年が過ぎていました。

今では俺も紅と身長が同じくらい（185cm）まで伸びている。いやあ、成長期っていいね。

さて、本題に入るうか。

俺は今、某蛇的潜入作戦に使われた、ステルス迷彩をつけている。

紅は空間を操り、俺の声と紅の声が（外に漏れないように）お互いに聞こえるようにしている。

時はさかのぼる

「さて、今回諸君に集まってもらったのはほかでもない」

「諸君つつつても俺とお前しかいないじゃん」

「要は雰囲気なのだよ。俺の親友を四年もやっていてそんなこともわからないのか」

「逆にこういうアホなボケに突っ込むのが親友である俺の役目じゃね？」

「そうともいう。ともかく、すでに知っていると思うが、改めて今日の議題の説明をするぞ」

ここは紫家の一室。強力な結界を張っているので紫の力を持っていても入ることおろか、

中の様子を見ることも、声を聞き取ることも出来ない。勿論中にスキマは開けない。

さて、なぜこのようなことをしているのか？それにはある理由があるのだ。

「さて、今日もいつの間にか出かける紫のことについてなのだが、前回決めたことには

ある問題があることにいまさら気が付いた」

「はたしてそれはいかなることや？」

「紫がスキマで行くので追うことが出来ない」

「OH！それは計算外だったな」

この会話からでも分かるように、俺達はいつの間にか出かけていつの間にか帰ってきている紫は

いったいどこに行ってるのか突き止めよう、ということだ。

一度面と向かって聞いてみたが、うまくはぐらかされてしまったので、

なにかやましいことを隠しているに違いない、という結論に至ったのだ。

ここで紫の弱みを握れば原作の食い込んでからも有利になることは間違いない。

この議題は今日で三回目。いずれも紫が出かけている日に行っている。

還って来るまでずっと話し込み、前回尾行するという結論に至ったのだが……

残念ながら紫はスキマでさっさと行ってしまおうのでついて行くことが出来ないのだ。

「けどさー、お前の能力使えば普通についていけるんじゃない？」

「それも考えた。しかし残念なことに紫は強力な探知結界を出かけるときに

周囲に張り巡らしていることが判明した。近づいたら勿論、その探知結界を破壊

しようとしてもおそろくばれる。俺じゃなかったら絶対に尾行するのは不可能だ」

「じゃあお前なら大丈夫ってことだろ」

「それもそうなんだけどさーおもしろくないじゃん。ゲームでチートばかり使ってる

飽きてくるじゃん？それと同じでこの能力ばかりつかってもなんとなく気分悪いのよ」

「んー、じゃあどうすんだ？」

「実はお前が来る前にな、一回だけ歩いて出かけるところを見た事があるんだ。」

おそらくその日の気分だろうが、必ずその日は来る」

「つまりその日まで待て、と」

「そゆこと」

で、現在に至る。

その後の何回かの議論により、俺が尾行して、能力で紫家にいる紅に逐一連絡しながら進むという紅の案を採用した。一番手っ取り早く、効率が良いと判断したからだ。

実はこの一年の間に何度か歩いて出かけることがあった。しかし、そういうときに限って人里に遊びに行っているときなどと重なり、結局は一年後になってしまったのだ。そしてついに紫が歩いて出かける日がやってきた。

一分前に俺達が洗濯している間に紫が出かけたことを能力で確認した。

一時的に洗濯は紅に任せて、ステルス迷彩をつけて透明になり、バックパックにナイフ、Mk・22、SAA、RPG-7を詰め込む。服装はスピ

リットに無限ペイントと、

まさに完璧なステルス状態になる。(この間約二秒)

紅は洗濯をしながら一瞬で俺と紅をつなぐ。いつでも出来るように練習していたのだ。

俺は外に出て、林の中に身を潜める。

俺は今も零ではない。あるコードネームを名乗り、任務を遂行する蛇。

「こちらスネーク。これより、スネークイーター作戦を開始する」

任務は、<sup>THE BOSS</sup>最愛の人を殺すこと。嘘



## 死とスキマと不可能と600那由他

「こちらスネーク、紫は人里の外れにある村に向かっていているようだ、少佐」

「把握した、そのまま潜入を続けてくれ」

「了解」

ただいま尾行中。

紫は上機嫌なようで、鼻歌を歌いながら歩いている。俺はその1km前を足音立てずに、状況を逐一紫家にいる少佐（紅）に連絡しながら歩いている。

能力をうまくつかって、紫の状況はリアルタイムで監視していて、いくつもの方面からの映像が少佐の下に流れ、即席で作ったモニターに映るようにしている。

いくら紫が人気がない林の中を歩いていようと、俺の能力で紫の半径2mの音を拾い、多方向からの映像も、すべてが紅の元に受信され、紅から俺の元に届く。

まさに完璧だ、結界内に入るか大きい音でも立てない限りばれることはない。

そう思っていた矢先・・・

『バキッ!』

足元に落ちていた枝を踏んでしまった。

「おいスネーク!紫がこっちの方向を凝視しているぞ!」

「まさか聞こえたのか・・・いや、もし聞こえたとしてもこの林の中だ。

反射しまくってこの位置がばれることはない。その証拠に、ほら・・・」

紫がこちらから目を離し、再度歩き始めた。

「頼むからノーアラートでクリアしてくれよ」

「はは、そんなへまをする俺じゃないぜ、っと、林を抜けたようだ」

紫が林を抜け、村に下りていくのが見える。

「とりあえず問題はない、このまま潜入を続ける、オーバー」

少年尾行中・・・

紫は村についてからまた新たな結界を張った。自分を見えなくする結界だ。

しかし俺の能力を舐めてはいけない。姿を消そうがまったく関係なくモニターに映り続ける。まさにチート。

紫は歩き続け、ある家の前で止まった。  
おそらくこの村で一番大きな家だろう、とても古い家だ。  
紫はその家の門の鍵をあけずに、スキマの中に入った。  
そして・・・

「やっぱりついてきていたのね」

「!!!!!!??」

「スネーク！どうしたんだ！スネーク！スネー……ーク！」

「で、私をつけてきたというわけね」

「はい、その通りでございませす」

俺は地面に正座して説教されている。

さすがに尾行した事についてはご立腹のようだったが、一年前から計画していたのを聞いて

逆に感心していた。こんな無駄なことに一年も、と。

「まあいいわ、そろそろ教えようと思っていた頃だったし」

「よく分からんが許してくれるならありがたい」

「とりあえずコウもよんでくれるかしら??」

「了解」

俺は紅に声をつなげる。

「紅？見つかったからここに来て。魔力出すから」

そういつて体からある程度の魔力を放出する。

すると数秒後、俺達の目の前に紅が現れた。

紅は自分が行ったことのある場所じゃないと転移は出来ない。

なのでこういう場合は魔力や霊気を放出し、場所を固定しなければいけないのだ。

「まったく、お前が枝を踏まなければ、ばれることもなかったろうに」

「いやあ、面目ない」

「さ、行くわよ」

紫は先ほどに家の門を開け、中に入っていった。

俺も入ろうとしたが、紅がそれを止め、手招きで此方に来いと指示する。

「……零、この表札見ろ」

「表札？なんでそんなもん……え？」

その家の表札には達筆でこう書かれていた。

『西行寺』と。

「・・・お前まだ幽々子は生まれていないって言ってなかったか？」

「いや、Wikiに千年以上亡霊をやっている、って書かれていたから精々千年ほどかと・・・」

「おいてくわよー」

「・・・とりあえず行くぞ」

「そうだな、特に今会っても悪いわけじゃないし」

驚いたが、早くに幽々子に会えることは非常に喜ばしい。

俺達はそそくさと西行寺家の門をくぐる。

門の中はだだっ広く、誰一人もいないし、いる気配も一つしかなかった。

おそらくは幽々子だろう。

「紅、生前の幽々子はたしか自分の能力を嫌っていたはずだ。俺達の記憶とは大分違うだろう」

「たしか・・・自分の能力を疎んで自害したんだっけか？」

「その通り、あまり気に障るようなことをいっなよ」

「そういうことを言うのはいっつもお前だろう」

「こっちよ、早くして」

俺は紅の言葉を見無視して紫についていく。

「また来たわ」

「お久しぶりね、妖怪さん」

幽々子を見た第一感想。若い。

おそらくまだ二十歳にもなっていないだろう。まだ精々俺達と同じ年、

あるいはもう少し上か、いずれにしてもすごく若く、可愛いことは確かだ。

「そちらの方は？」

「私の友人よ」

「俺は零、紫の家で家事をやらせてもらっている。一応人間だ」

「俺は紅、同じく紫の家で家事をやっている。これまた一応人間だ」

「私は西行寺幽々子、幽々子って呼んでね」

予想通り、俺の知っている幽々子とは違い、少し暗い。

あんな能力を持って生まれてきた悲しい人間、なんだよなあ、今は。

「けれど、人間なら私に近づかないほうがいいわ。

私は『死に誘う程度の能力』を持っている。近づいたら死んでしまいかもしれないわ」

死んでしまう、か・・・ククク、その程度で死んでしまう、か。

「おい紅、死んでしまつらしいぜ？」

「らしいな、じゃあ近づいてみるか」

俺は幽々子の力なんて効きはしない。紅は紅で空間と時間を組み合わせた結界を作る。

俺達は同時に足を踏み出し、少しずつ幽々子に近づく。

「！やめて！」

幽々子が心底怯えた表情で叫ぶ、が、そんなことは気にせず一気に近づく。

「あれあれえ？死なないなあ」

「そうだな、まったく違和感もないなあ」

幽々子の目の前に立ち、そう言い放つ。

「俺は『不可能と可能を操る程度の能力』を持っている。死に誘っ

てもなんてことないさ」

「俺は『空間を操る程度の能力』と『時間を操る程度の能力』を持っている。」

俺の周りの空間を固定してその中の時間を止めればそんな能力効かないのさ」

なるほど・・・紅はそういう風にして幽々子の能力を防いでいたのか。

「・・・一応人間ってそういう意味だったのね」

「そういうこと、安心していいと思うよ」

「どうせ俺達は死んでも死なないような輩だしな」

「俺にいたっては死ぬことはありえないからな」

幽々子はそんな会話をしている俺達を見て、クスクスと笑った。



死とスキマと不可能と600那由他（後書き）

書くのを忘れていましたが、紫の家は山奥にひっそりと建っています。

ゆえに歩いて出かけるならば、山を降りなければなりません。

通称山田

「映姫に会いに行くぞ！」

「・・・何だいきなり」

昼、飯を食い終わってお茶を楽しんでいるときに提案する俺。

「いや、だってさ、よく考えたらお前小町とか映姫に会ってないっしょ」

「確かにそうだな」

「だから会いに行こうぜ」

「・・・おk」

あ、ちなみに紫は飯を食ったらまた消えた、多分幽々子のところだろう。

まあ原作でも『あの方は苦手』と言っていたから誘っても行かないだろう。

「さ、お土産持って行こうぜ」

「あつちで創ればいいじゃん」

「それじゃなんとなくもったいないじゃん。映姫とかにはびっくり

させてみたいのよ」

「・・・まあいいけど」

「おし、行くぞ」

俺は最高級の紅茶の葉、熱いお湯（時間を止めて熱いままにしている）、ケーキを創つてバスケット（無論能力で創った）に入れ、空に飛び上がる。紅は空間を椅子の形に固定し、それに座り浮かび上がらせる。

「小町はおそらくサボっている。目の前まで飛んでいってもばれな  
いだろう」

「おk、じゃあさっさと行くうぜ」

「急ぎすぎるとケーキが崩れるからゆっくりな」

「把握」

少年飛行中・・・

二十分ほど飛ぶと三途の川に着いた。その畔には一軒の小屋、小町の家だ。

しかし小町はそこにはいなく、川のほとりの草の上で、腕を枕に寝ていた。

「ZZZZ・・・そりゃないですよ映姫様」ZZZZ」

・・・いつたい何の夢を見ているんだ。  
ひとまず起こさないと向こう岸までつくことが出来んな。

「小町、またあなたはサボって！起きなさい！」

映姫の声真似をして小町を起こす。

つか、俺の場合は声真似であって声真似ではない。能力を使ってその人の声そのものになるので、よほど口調が違つとかない限り、ばれる事なんてまずない。その証拠に・・・

「すみませんでしたッ」

俺の発した言葉から一秒も経たないうちに小町は華麗にジャンプし土下座を決めた。

なんと言う無駄のない洗練された動き。けどその動き自体が無駄だからまつたく意味がない。

「HEY！久しぶりだな小町」

「はあ？」

聞きなれない声がして素つ頓狂な声を上げる小町。

「俺を忘れたのか？一年と二、三ヶ月前に会つたろう。ちなみにさつきのは俺の声真似だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ！あの時の！元気だったかい？」

「そうか。よし、俺の名前を言ってみろ」

「えっ？い、いやだなあ、勿論覚えているよ」

・・・やっぱり覚えていなかったか。考えている間が長いと思った。

「はあ、空から降ってきた男だ。名を八神零、思い出したか？」

「ははは、今度こそ思い出したよ。あれから結局どうしてたんだい？」

「今現在は紫家で家事をやらせてもらっている」

「なんだって！どうやってたらそういうことになるんだい！？」

まあ驚くわな。本当は人里で悠々と暮らしているはずだったのに。

「まあいろいろあってな、あ、そうそう、紹介しておくぜ。那華川紅だ」

後ろで黙っていた紅が前に出る。

「ども、コウって呼んでくれ」

「あたしは小野塚小町、小町でいいよ」

「さて、自己紹介が終わったところで映姫にところに連れて行ってくれないか？」

「いいけど・・・一人ずつしか運べないよ？」

「かまわない、どうせお前距離操れるんだからすぐ終わるだろ」

「それはそうだね・・・ってあたしの能力お前さんに言ったっけ？」

あ、そういえば言ったことなかったっけか？まあいいや。

「言ってただろ。俺から運んでくれ」

「？まあいいや、じゃあ乗っとくれ」

以下省略・・・

「と、いうことで、白い門の前にやってまいりました」

「あんた何言ってるんだい？」

「小町、気にしたら負けだ」

「？映姫様、客人ですよ」

小町が大きな白い門に呼びかけた数秒後、中から入りなさいという声が聞こえてきた。

「おっじゃまっしま〜す」

「失礼します」

分かっていると思うが上が俺で下が小町と紅だ。  
扉を開けて現れた俺を見て、自分より大きな椅子に座った映姫は大  
きなため息をついた。

「はあ、あなたでしたか」

「ため息をつくと幸せが逃げるんだぜ」

「ただの迷信です」

映姫はもう一度ため息をつくと立ち上がった。  
いやあ、あいもかわらずの幼女っぷりですね。半端ないっす。

## 妖怪たちの縄張り（前書き）

今日テストの一日目でした。

明日は国、数、英です。

勉強そっちのけで更新していきましょー！。



## 妖怪たちの縄張り

「と、まあこんなところかな」

「なるほどねえ、それにしてもすごい能力もらっちゃまったんだね」

「ああ、俺も紅もな」

映姫の部屋でケーキを食べながら寛いでいる俺達。

今いるメンバーは俺、小町、紅、映姫である。

これまで一年ちよいの幻想郷での生活を語っているところだ。

ちなみに映姫は俺の膝の上でぐっすり眠っている。というか気絶している。

なぜかって？久しぶりに抱きしめたらなぜか真っ赤になって気絶したんだよ。

いやあ、疲れが溜まっていたんだろうネ、たまにはゆっくり休むと良いよネ。

「にしても、そんな気持ちよさそうに寝ている映姫様の姿なんて初めて見るね」

「うーん、映姫も毎日仕事に追われて疲れてるんだろ、働かない部下もいるし」

俺はじろりと小町を睨む。

「ウツ、それは言わないでおくれよ」

「まあ俺の能力で少し夢見を良くしているけどな」

「本当、便利な能力だねえ」

「だろ、この能力なかったらおそらく十回以上死んでるぜ」

「俺もこの能力がなかったら十回くらい殺されてるぜ、零に」

「俺とかまだ良い方じゃん、幽香とかだったら絶対塵も残らねえぞ」

「つかお前十数回も幽香と戦ってたのか？」

「いんや、精々五、六回だけ」

「後の半分は？」

「あれ？まだ言ってなかったっけ？」

「なにが？」

「天魔の話」

「「天魔？」」

「そうだな、アレは四ヶ月くらい前のことだったか」

あくる晴れた日の今日、紅は新作の漬物を漬けるのに忙しく、紫はまたどっか行つた。  
用事がないのは俺だけ、つまり暇だったのだ。  
つうことで……

「紅、ちょっと出てくるわ」

「んあ、りょーかい」

外に遊びに行こう！

行く当てはないが、幻想郷なので大丈夫だろうと思い、俺は外に出たんだ。

あの日は空中を飛び回って風を感じる気分ではなかったから、歩くことにした（空中を）

「角・勇・五郎・兄さアアアアアアん」

俺は歌（ver. よっ い）でも歌いながらこの辺で一番でかい山に向かって歩いていった。

少年移動中……

その山の頂には一本の杉の木が植えられていた。

まあ植えられていたといつてもつぺんが雲の上まで伸びているわけだが。

とまあここまで歩いてきたはいいが、やることがない。

そこで俺が考えたのが・・・

「・・・寝るか」

睡眠だ。

その杉の木によっかかってそのまま爆睡した。一応探知結界つけてな。

大体時間にして三時間ほどか？なにかが結界の中に入ったから目が覚めたんだよ。

で、俺の前に仁王立ちしてたのが・・・

「お主！ここが天魔の縄張りだと知ってのことか！？」

はい、でっかい天狗でした。身長俺より少しでかいくらいの。

天狗つつつても、面をかぶっているようなごつい顔ではなかった。

ただし、その背中にある威風堂々たる漆黒の翼が天狗だと物語っていた。

顔はまさに親父って感じだが、鼻は普通に長い。うん、天狗だねって感じた。

で、その天狗を見て気がついたんだ。

(ここ妖怪の山じゃん)

ってな。

この妖怪の山は文字通り、いろんな妖怪が見られる絶好のデートスポット 嘘

そしてこの山を治めるのが天魔。妖怪の頂点に立つって言うても過言ではない妖怪だ。

「知るか！俺がここで寝て何が悪い！」

俺は言ってやった。語尾が強いのは起こされてイライラしていたからだ。

すると天狗はこういった。

「悪くはない」

「悪くないの!?!」

「しかしここは妖怪の縄張り、そう簡単に認めては示しがかぬ！」

「どうしろってんだ！」

「我輩と決闘を受けられよ！」

・・・なんでそうなるんだってね。

けどこっちにとっては結構いい条件だったのね、勝てばいつでも来れるからね。

あそこなかなか涼しくて寝るには最適なよ。

しかもそいつの出す妖気が精々幽香の五分の一くらいだったのね。だから即答したよ。

「わかった、その決闘受けよう」

しかしその天狗はなぜか驚いたような顔をしたんだ。少ししてこう言った。

「男として・・・一言はないな？」

「あるわけがないだろう」

そういうと天狗は震えだした。

最初は自分から仕掛けておいてびびったのかと思っていた。

しかし、それは違った。

天狗は笑っていた。

そのうち微笑が豪快な笑い声に変わり、辺り一帯に響き渡った。

そしてようやく笑いが止まった直後。

金縛りにあった。

俺は動けなかった。

酷い頭痛がし、目の前が見えないほどのめまいに襲われ、息をすることすらままならなかった。

それほどまでに、その天狗の出す妖気はすさまじかった。

そこで俺はやっと気がついた。その天狗は・・・

「この妖怪の山の主である天魔の挑戦を受けるとは、真に天晴れな人間なりい！」

どうみても天魔です。本当にありがとうございました。

## 妖怪たちの縄張り（後書き）

ちなみにこの辺の設定などは蒼響草さんから許可をもらって使っています。けっして盗んだ訳ではありません。そういうことで、反論は認めません。



## 力vs力

「我輩は妖怪の山の主！鞍馬風雲！人間よ！名を名乗れ！」

鞍馬風雲、くまばりゆう『因果を操る程度の能力』を持つ天狗の王、天魔。

妖気の量は紫や幽香より遥かに多く、幻想郷では向かうところ敵なしだろう。

さらに恐ろしいのが天魔の能力。『因果を操る程度の能力』とは、簡単に言えば、レミリアの『運命を操る程度の能力』と慧音の『歴史を隠す&創る程度の能力』  
をあわせた様な感じだ。つまり風雲は『結果』を創ってから『原因』を創り出せる。

「フ………」

なおも風雲は妖気を放出させた。

並みの妖怪や、人間なら息をすることすら出来ないほどの濃い妖気の中で俺は……

「フ、フフ、フハハ、ハハ、ハハハハ！」

笑った。

狂ったかと思えるほどに、俺は笑い続けた。

「素晴らしい濃さ！そして量！幻想郷に来て以来初めてだ！こんな・  
・良質な『妖気』を持つ者は！」

俺は風雲に超音速で突っ込んでいき、腹にアッパーカットを決めた。

「ぬ・・・！」

風雲はそれを間一髪で防御し、空に飛び上がった。

「魔力が漲り体が動く！すがすがしい気分だ！！」

俺はさらに追い討ちをかけた。

一瞬で風雲の真上に移動し、強烈なかかと落しを喰らわせた。

風雲はモロに喰らい、地面に叩きつけられた。

とまあここまでではネタだった。

「いやあ、ごめんね、いきなり攻撃しちゃって。俺は零、八神零だ。  
よろしく」

俺は地面にめり込んでいる風雲の下に降りて行って言った。

風雲はよっこらしょという掛け声と共に、地面から抜け出してきた。

「ふむ、あれほどの蹴りを喰らったのはいつぶりだろうか？お主本  
当に人間か？」

風雲は土をほろいながら聞いてきた。

「いやあ、一応人間なんだけどね、人外と言われても否定は出来ないよ」

「どうやらこの戦い、久しぶりに楽しくなり気がするの」

「俺は死ぬ気しかしないけどね」

お互いに距離をとり、構えた。

そして風雲は叫んだ。

「残念だが我にも仕事がある。悪いが一瞬で終わらせてもらおう！」

風雲は翼を大きく広げ空高く舞い上がった。そして手元にあった錫杖を頭上に

掲げるとその真上の空に雨雲が発生し、そこから大量の雷がほとばしった。

(・・・あれは喰らったらバラバラじゃあ済まされないな)

降り注ぐ雷はやがて錫杖に吸収され、さらに風雲自身の妖気も大量に練りこまれる。

それらが一連の流れが終わると風雲はその杖を槍投げのポーズを取りながらこちらを見据えた。

「それはこちらの台詞だな。全身全霊を持ってお前を倒そう」

俺は神気を右手に集めた。

集めて集めて集めて集めて凝縮して凝縮して凝縮して凝縮して一つ

の槍にした。

「行くぞ人間よ！この技を見事防いで見せよ！」風雲轟雷・終の一閃」

「しゃらくせえ！消し飛ばしてやろう！神槍『ミストルテイン』」

両者、同時に投げた槍と杖が触れた瞬間、すさまじい轟音と共に大爆発が起きた。

「おいおいマジかよ。まさかアレが相殺されるとはね」

「我輩もまさか人間に破られるとは思ってもいなかったぞ」

お互い、服はボロボロ、体も泥だらけだったが、立っていた。

しかしダメージはまったくと言っていいほど無かった。

さあ、ここからが本番だと思いついたその時・・・

「ふむ、この戦いは我輩の負けを認めざるをえまい」

風雲が負けを認めた。

「え？ちよ、なんで？」

「先ほどの技は我輩の最高の技だったのだ。それを破られては負けを認めるしかあるまい」

天魔は引き際もよかった。

「うーん、消化不良だけどまあいいや。これで俺は自由に立ち入っていいのね？」

「うむ、天魔の名においてお主が妖怪の山に立ち入ることを許す」

「ということがあったんだよ」

「へー、途中なにか電波が入っていた気がするが、突っ込まないで置いてやるっ」

「天魔に喧嘩を売るなんてどういう神経してんだい？」

いやあ、あれは大変だったね、と俺は頭をかく。

紅はそんな俺を見てため息をついた。

「で、あの後も何回か手合わせしたってわけよ」

「命を掛けた？」

「まあ実質な」

「……お前は物事を楽観視しすぎだと思っぞ」

「その通りです」

「ぬおお!？」

突然俺の膝の上にいる映姫がしゃべった。いったいいつから起きていたんだ？

「最初からです」

こいつ……人の心を読みやがった。」

「……声に出ていますよ?」

「え?マジ」

この後、俺の楽観的思考についての説教が深夜まで繰り広げられたのは言うまでもない。

## 亡霊姫

五年の歳月が流れた。

時が経つのは早いもので、俺も紅も二十歳になってしまった。顔も大人びて、筋肉もつき、なにより精神的に成長した。

この五年、料理して幽香んとこ行って料理して紫と将棋して料理して紅と遊んで料理して風雲と死合して料理して幽々子と話して料理して映姫をかかった。

今日もいつもと同じように紅と料理の研究に没頭していた。唯一違うことは紫が朝からいなかったことだけだった。

「よし、あとはこのまま置いておけば夜に食えるぞ」

「つか豚の角煮は食ったことあるけど牛の角煮は初めて食うわ」

「紅よ、幻想郷では常識にとらわれてはいけないのだよ」

「地霊殿のエキストラの中ボスがそんなこと言ってたな」

「名前で言っちゃれよ」

鍋の火を止めて、そろそろ昼飯を作ろうかというときのことだった。

「「あらあゝ」

足元にスキマが現れ、俺達は某教祖様のような声を上げて落ちていった。

少年スキマツアー中・・・

「「あだっ！」

「ってゝ、なんなんだいったい」

「俺が知るか、そこにいる当事者に聞け」

俺達の目の前にスキマを開いた奴が立っていた。

「で、いったいなんのために俺達をこんなところに連れて来たんだ？」

俺達がいるところは、幻想郷中を飛び回った俺も来たこともない所だった。

なにかぼんやりとしていて、生気のない、そんなところ。目の前には長い長い階段があり、どこまでも続いている。

紫は少し躊躇い、それでも凜とした声で答えた。

「単刀直入に言うわ、幽々子が死んだの」

「「なにい!?!」



幽々子が死んだ？つまり亡霊姫となって白玉楼に……もうそんな時期か。

てことはこの階段は白玉楼に続く道か。納得。

「やはり自分の能力の重さに耐え切れなかったのか？」

「そうね、やはりそれが一番大きいと思うわ」

けどたしか亡霊になってからは昔の記憶をなくして楽しんでるんだっけか？

「意外ね、もう少し悲しむかと思ったわ」

「いや、驚きはしたが遅かれ早かれこうなることは分かっていた」

俺は紅とアイコンタクトをし、同時に飛ぶ。

「紫がこんなところに連れてきたってことは、この上に何かあるんだろう？」

「ええ、道中で説明するからついてきて頂戴」

紫も飛び、どんどん階段の上を飛んでいく。俺達もそれについていく。

紫の話の聞くと、幽々子は満開の西行妖の下で自害したようだ。

そしてそれを紫が発見したのは早朝、すでに冷たくなっていたそう

だ。  
紫はその骸を西行妖の封印のために埋葬した。  
なんでも、幽々子の骸を媒体に結界を張ることで、幽々子は転生しなくなるそうだ。

まあ知ってるけどな！

「で、幽々子は亡霊になって白玉楼にいると」

「ええ、けど生前の記憶はなくしているからあっちにとっては初対面よ」

ええ、知っていますとも。

「じゃ、さっさと行こうぜ」

俺はスピードを上げる。

少年少女移動中……

「なんじゃお主達は？」

白玉楼の門には一人のダンディーな男性が立っていた。  
白い口ひげを蓄えた初老の男性だ。紳士的な雰囲気だが、その体は鍛え抜かれている。  
そして腰には一本の剣と、周りには人魂が浮いている。

ここまで来たら該当するのは一人しかいない。

魂魄妖忌こんぱくようき、能力はよく分らん。

妖夢が白玉楼の庭師になる前の庭師だ。妖夢の祖父であり、剣の師匠でもある。

妖夢が『辻斬りみよん』といわれるようになった原因は、この魂魄妖忌が

『真実は斬って知る』などと妖夢に吹き込んだからだ。

「幽々子に会いにきた人間×2と大妖怪だ」

「なんと簡潔な説明、さすがだな零」

「ふっ、ざつとこんなもんよ」

「何を訳の分からないことを言っておる、人間がここまで来れる訳なかるっ」

「いんやあ、俺と俺の横にいる人間、紅は来る事が出来る」

「ついでに紫もいるしな」

妖忌は俺の後ろにいた紫を見つける。

「これは紫殿、幽々子様に会いに来たのですかな？」

「ええ、この二人も一緒にね。私の友人よ、害はないわ」

・・・紫と妖忌って知り合いだったのか？

「つか害はないはねえだろ、虫じゃあるまいし」

「そうかしら？」

「よし、今日の紫の飯はイナゴの佃煮のみな」

「おい零、砂糖ないから買ってこないと作れないぞ」

「そうか、じゃあ後で創るからいいよ」

「謝るからイナゴは勘弁してくれないかしら？」

最初からそういえばいいものを・・・

「まあ紫殿の友人ならいいでしょう、今お茶を用意しましょう」

「気にしないでいいわ」

「「おじゃまします」

少年少女移動中・・・

幽々子は縁側に座ってぼけっとしていた。

俺たちが近づくと、顔をこちらに向けて、微笑んだ。

「あなた達は？」

「俺は八神零、零と呼んでくれるとうれしい」

「俺は紅、那華川紅だ。読び方は適当でいい」

「私は八雲紫、紫って呼んでね」

「私は最行寺幽々子、幽々子って呼んでね」

うむ、これでこそ幽々子。常に明るく微笑んで、警戒心が無く、原作通り、いや、原作よりも明るい、やはり西行寺幽々子はこうでなくては。

「さあさあ、中に入って、お茶にしましょう。妖忌、お茶」

まさに幽々子！普通初対面の人にここまで出ることが出来るか？否！出来るわけが無い！これぞまさに幽々子クオリティ！

「持つてくる必要も無い、はい、お茶と、お茶菓子っ」と

俺は茶の間にあるテーブルにいつも通りの物を出す。そして次の瞬間には消えている。

「……幽々子、自重しようぜ」

「おかわり」

こいつ、話を聞いてねえ。

「……まあいいや、ほれ」

俺は追加を出す。

「すーい、どうやって出してるの？」

「俺の能力に不可能は無い」

この後俺達が帰るまで俺が出した菓子の数が数百個だということはいくらでも無いだろう。

## 亡霊姫（後書き）

さつさと原作のキャラクター出したいなあ。  
次はあの妖怪かな？

## 九尾

いつの間にか二十年が過ぎた。

俺も紅ももう四十歳、すでにオジサンだ。

しかし俺は二十歳の頃から不老にしてあるので年は取っていない。  
紅は紅で時間の中の“老い”という部分だけを止めているとかなんとか。

そんなわけで、今日も元気に・・・

「おらおらおらおらあ！鉄拳『問答無用の一撃！』」

「んなもん当たるか！時を操る力舐めんな！」

修行してます

アレですよ、さすがに幻想郷で生き残るためには能力のみじゃ心もとないということ

毎日毎日能力をフルに使った組み手をしているわけですよ。

あ、ちなみに場所は空中ね。空間を固めて地面代わりにしてるんですよ。

ちなみに今やってるのは試合と書いて殺し合いって読むから。

なにせ一発一発が圧縮させた空気の見えない弾幕とか、マジ死ぬる。

しかし、いくら体を鍛えても、人間には限界があるだろう。

だが、今から約七年前、修行の中で紅が新たな能力を開花させた。





「悪魔か！」

とか色々文句を垂れながらも避けていく紅。  
もう十分人間離れしている。あ、俺も含めてね。

「そろそろ終わらせてもらっぞ紅！閻魔『d』零、紅、ちょっと来てー」・・・行くぞー」

「ああ」

ちょうどクライマックスになるつかという時に紫から呼び出しを喰らった。

俺は能力で、かいた汗を消し、体温を下げ、心拍数を戻す。

「こっちよー」

茶の間から声が聞こえる。俺はふすまを開けた。

「はいはい、何のようですか紫さ・・・ま・・・」

「どうした？零、なにかあった・・・の・・・か・・・」

そこにいた者、俺達の目に映る者は・・・

「可愛いでしょ？今日魔法の森で見つけたんだけど、あんまり可愛いから式にしちゃった」

どう見ても九尾の狐です、本当にありがとうございました。



「紅、俺この子を見てパツと頭に浮かんだ名前があるんだけど？」

紅は俺の意図を察っし、笑う。

「じつはな、俺も咄嗟に浮かんだ名前があるんだよ」

「聞かせてもらえないかしら？」

俺と紅はタイミングを合わせ、同時にこの名前を発する。

「「藍！」」

## 藍が来てから

その後、九尾の狐の名前は正式に“藍”に決定した。

紫も言い名前だといってくれ、藍本人（本狐？）も喜んだ。

さて、今回は藍が来てからの日常を事細かに説明していこうかと思う。

AM 6:00 起床

俺も紅も毎日六時には起きています。家事は色々と時間がかかるのだ。紫が起きる七時過ぎまでにはすでに朝飯の用意をしなければならぬ。

ひとまず起きたら顔を洗って、藍を起こしに行く。

俺は紫の部屋の中に音を立てずに入る。

藍はまだ生まれてきて幼く、一人で寝るのは怖いということで、紫と同じ部屋で寝ているのだ。

ということ、紫を起こさずに、藍だけを起こす必要がある。

まあ紫の周りに、防音効果のある結界を張っておけばいいわけだが。

「藍、起きる時間だよ」

俺は藍を揺り起こす。藍の寝顔はとても愛くるしい。

ずっと見ていても飽きないくらい可愛いのだが、立場上そういうわ

けにもいかない。

「むにゅ、れん兄しゃま？」

俺の精神に9000000000000000000のダメージ！ついでに鼻から出血多量で肉体的にダメージ！

だめだ・・・この呼び方は凶悪すぎる。

「ごふつ、藍、朝ごはん作るから、早く起きて顔洗っておいで」

藍は俺のことを“零兄様” 紅のことを“紅兄様” と呼ぶことになっている。

藍にこの呼び方で呼ばれたとき、初めて『ちえええええん！』のときの気持ちがあった。

うん・・・成仏できる。幸福で満たされてそのまま天に召される。まあ俺の精神的なHPは数千不可思議はあるからそう簡単には成仏しないぜ。

AM 6:10 調理

紅はすでに起き出し、漬物をかき混ぜていた。

「んあ、遅かったな零」

「藍を起こす最中に何回か逝きかけたからな」

「・・・把握」

この会話のみで俺の心情を読み取り、把握する親友。  
そしてこの会話の意味をまったく分からずに、俺の後ろで頭に？マークを浮かべている藍。

藍が来てから、俺と紅は藍に料理を教えることになった。

発端は紫の一言。夕食の席で『藍もいつかはこんな美味しいご飯を作れるようになるのかしら』

と呟いたことである。その日のうちに藍に料理を教えてくださいと頼み込まれたのだ。

「零、冷蔵庫に良い鱈が数匹入っているんだが・・・」

「大方紫が持ってきたんだろ。メス？オス？」

「メスだ、しかも背中模様もはっきりしていて、腹も白い。なによりでかい」

「完璧だな。さっさと捌くぞ。今日は朝から豪勢な食事になりそう  
だ」

「お、二匹で良いか？」

「ああ、残りは照り焼きにして明日食べるべ」

今日は朝から刺身だ。狐が魚が好きかどうかは知らないが、藍は魚を見て、

目を輝かせている。少なくとも藍は大好きなようだ。

「あとは・・・油揚げの味噌汁でも作るか」

この言葉で藍はさらに目を輝かせ、九本の尻尾をつれしそうにパタパタと振る。  
超可愛い・・・また鼻から赤褐色の液体が出るところだったが、なんとか耐えた。

「いいか？藍。鱈はまず腹を裂いた後にえらの方から

AM 8:00 勉強（藍専用）

朝飯を食べた後は藍のお勉強の時間だ。

国語、数学、物理、地理、英語、倫理、歴史、科学、化学、生物、外科、内科など、

あらゆる分野の勉強をする時間だ。十二時まで続く（五十分ごとに十分の休憩）

無論教えているのは俺の他ならない。

俺以外にこんな多くの分野に精通している者なんていないからだ。

原作では藍は数学が得意だ。たしか三途の川の長さとかを計算して、割り出したはずだ。

その主人である紫も相当なもので、宇宙の大きさを割り出したはずだ。

だから藍は数学のみ、俺が出す問題は完璧に答える。まだ小学生レベルの問題だが。

「さて、問題だ。出題した意図を読んで、考え抜いて答える。人里からバスが出て、

初めに三人乗りました。白玉楼で一人降りて、半人だけ乗りました。



た。八雲さん家で

二人降りて、結局合計何人だ？」

「半人です！」

「答えは零人！なぜならそれは！幻想郷にバスはない！」

俺大人げねえ。

PM 1:00 昼飯

昼飯は簡単に秋刀魚と味噌汁、漬物だけだ。

夜は白玉楼で藍の歓迎パーティー兼プチ宴会があるので、軽く食べるだけにしておく。

まあ簡単、とはいっても、お釜でふつくとやわらかく炊かれた最高級の白米に、

新鮮で活きのいい旬の秋刀魚を七輪に乗せ備長炭でミディアムレアに焼かれた、

適度に脂も落ちて、ヘルシーになった焼きたての秋刀魚だ。

味噌汁は、前に食べた鮭の骨から出汁をとり、人参や大根、玉葱にジャガイモ、

そして鮭を惜しみなく入れた、いくらでも飲める石狩汁。

そして極め付けが、これだけでいくらでもご飯がいけると名高い、紅特製の漬物だ。

これで文句をつける輩は、減量中のボクサーくらいだと思つ。

藍も覚えたばかりの箸をうまく使いながら、美味しそうに食べていた。

PM 2:00 修行（藍専用）

藍はまだ生まれたばかりなので、妖気のコントロールがうまく出来ない。

だから今から三時間、妖気のコントロールや体術などを学んでもらう。

「いいか？まず“気”というものは色々なものがある。霊気、妖気、魔力、神力、病気

邪気、狂気、瘴気、その他。あと特別なものに闘気というものがある。霊気は人間、

妖気は妖怪、魔力は魔法使いと一部の人間、神気は神、これらのものは物に宿ったり、

特殊な場所から出ることもある。病気というのは動物や植物のどちらにもあるもので、

凶悪なものはそのものを死にいたらめるものがある。しかし、『病は気から』という

言葉もあるとおり、気持ちの持ちようで症状が和らぐ。覚えておくといい。

邪気、狂気は人間の感情に強く関係している。邪気は邪な者から自然と出る気だ。

この気を出しているものには決して近づくな。狂気は狂った気と書く。

そのものずばりだ。狂っている。これも近づかないほうがいい。瘴気というのは

人間にとっては猛毒、妖怪にとってはそこまで脅威ではない。ただ、吸い過ぎると

下手したら自分を失う。もしくは死ぬ。まあ瘴気の濃い場所に三日くらい

ずっといたららの話だな。最後に闘気だ。これは長年を生き、闘い続けてきた物だけが

持つことが出来る。しかしどれだけ強くても、生き物を殺すことを楽しむ奴、

悲しみを知らない奴が持てる気ではない。闘気を出せるもの、それは真の強者と

呼ぶにふさわしいやつだけだ。敬意を払え。勝てる相手ではない」

俺が言ったことを全てノートに書き込んでいく藍。

しかし、こういう授業は覚えることが全てではない。

「藍、こういうものは体で覚えることも重要だ。外に出なさい」

さすがに部屋の中で闘気とか出すと、部屋が全壊しかねない。

しかも最初は分かりやすいようにでかい気を出さなきゃいけないし。

「いいか？これが霊気だ」

「これが妖気」

「これが魔力」

「これが神気」

「これが病気」





作り終わったら空間&時間で作りたて状態をキープ。  
紫のスキマで一瞬で移動します。

P M 7:00 宴会

今日の宴会に参加しているのは、紫、俺、紅、蒼、藍、幽々子、妖忌、幽香、映姫、小町、

あと実は天魔も来ている。今日はちょうど休日だったらしい。

映姫と小町は俺が無理やり誘った。小町はサボれる上に酒が飲めると聞いて、

必死に映姫の説得を手伝ってくれた。結局は面倒くさかったので、映姫をぎゅっと抱きしめてダウンさせ、運んできたのだ。

今ではもう諦めて、酒をちびりちびりと飲んでいる。小町はがぶ飲みしている。

幽香と妖忌はお互いに酒を注ぎあい、黙々と酒を飲んでいる。

一見、珍しいコンビのようだが、すでに手合わせも何度かした仲らしい。

結果？妖忌の勝ち。やはり年の功には勝てなかったようです。

すでに一升瓶が四本ほど転がっているが、黙々と飲んでいる。そしてニヤニヤしている。

互いに、なにかを感じたようだ。放っておこう。

幽々子は・・・まあご想像にお任せする。・・・わかるだろう？

そして名前が一字組はどうしているかというところ、

まず紫は、縁側に座り藍を膝の上に乗せて日本酒を飲み干している。

藍はその体制で皿ごと持ってきている稲荷寿司をもきゅもきゅと食べている。

あの擬音、反則的なダメージを俺に与える。

紅はその様子を見ながらいろんなジュースを飲んでいる。種類は・

・  
コカ ーラ、ペプ コーラ、ペプシ ックス、ペ シ小豆、リン  
シトロン、リボ ナポリン、  
ファン レモン、フ ンタオレンジ、ファ タグレープ、カピス  
サワー、メ ンソーダ、  
ガ ナ、ヌ ーダ、ジンジ エール、ノンカロリーコカコーラ、そ  
んなもんかな？

炭酸しかない？うん仕様。あいつ炭酸好きだからいいのよ。

え？一つ酒が混じってるって？いやいや、酒がトラウマなのに知ら  
ず知らずのうちに

酒を飲んでしまった紅がどうなるか楽しみだなんて思ってないよ。

ちなみに俺と蒼はというと・・・

「つぷはあ！もう一本持ってこいやあ！」

「良い飲みっぷりだ！俺も負けんぞ！」

酒飲み勝負に勤しんでおります。

すでに俺だけで一升瓶が二十本ほど消えている。

なのに俺の顔には赤みひとつさしていない。もともとの酒に強かつ  
た体質と、

俺の毒に対する本能的な能力が働いて、ほとんど酔わないのだ。

酒は飲みすぎると毒と言われるが、俺には関係なかったようだ。

PM 10:00 入浴

解散したら、家に戻って入浴の時間。

紫家の風呂は広く、露天風呂もある。ゆうに百人はいけるだろう。しかしいっぺんに入るとしても精々三人くらいだ。今日は二人だが。

「藍、湯船に浸かる前はきちんと体を洗ってから入らなきゃいけないぞ」

「は〜い！」

無論、俺と藍です。

先に言っておこう。俺は幼女性愛者ロリコンではない。だんじてない。だが可愛くて仕方がない。この感情こそが、父親が娘に抱く感情なのだろう。

ゆえに、俺は藍を一人前に育てる義務がある。

「藍、背中を洗ってあげるからおいで」

藍を座らせ、柔らかいタオルを泡だらけにし、優しく背中を洗ってやる。

この柔肌に傷でもついたら一大事だ。力加減に気をつけねばならない。

首、胸、腹、腰、足、指先にいたるまで丁寧に洗い、流す。

もう一度言っぞ！俺は！断じて！幼女性愛者ロリコンではない！

PM 11:00 就寝



よい子はとつくに寝る時間だ。

今日は宴会があつたので仕方なかったのだが、いつも藍は十時には寝かせている。

夜更かしは体に悪い。しかも朝は早いのだ。時間の流れを遅くし、子守歌を謡う。

その後は明日の準備をし、俺も寝る。

幻想郷に電気が通っているわけもないのだが、ここだけは別だ。

俺がここに住み始めてからすぐに取り付けた。コンセントも一緒に。しかしどっちにしる暇つぶしが出来るゲームはもうない（すでに完全クリアした）

なので結局は寝ることになるのだ。

「じゃ、俺は先に休ませてもらう。お休み、紅、紫」

俺は自分の部屋に戻り、倒れるようにして眠りについた。

藍が来てから（後書き）

不可思議、は数字の単位です。

別れっ**て**ほ**ど**でも**ない**

百年、俺達が紫に会ってから、ちょうど百年の月日が流れた。

毎日がとても楽しく、充実し、不満なんて何も無かった。

しかし、俺と紅は藍がここに来たときからすでに決めていた。

紫家を離れることを。

「さっき話したとおりだ、紫。俺達は明日、この家を出る」

居間での俺、紅、紫での会談。藍はすでに熟睡している。

夕飯の後、幽々子のところに行こうとしていた紫を、大事な話があるといっ**て**呼び止めたのだ。

「……この家の家事はどうするの？」

「俺達の家事の技術は、この八十年ですべて藍に受け継がせた」

「……考え直すことは？」

「無い。これは俺と零で何度も話し合っ**て**決めたことだ」

「後悔……しないわね？」

「「ああ」」

「・・・なら私から言うことは何も無いわ。勝手にして頂戴」

そういつて紫はスキマの中に消えていった。

残されたのは、正座した状態の俺と紅。

「・・・さて、続きをやるか」

「ああ、もう時間が無いしな」

翌朝

最後の朝飯を作り終え、いよいよこの時がやってきた。

「本日はお日柄もよく、最高の一日になりそうだ」

荷物も鞆に詰め、庭に出ている。やがて紫と藍がやってきた。

藍はすでに大泣きしている。紫もどこかさびしそうな顔つきだ。

「さて、俺達はもう行く。だがその前に・・・紅」

「応」

紅が空間から一本の日傘を取り出し、紫に渡す。

「・・・これは？」

「俺達が紫に会ってから今日でちょうど百年。その記念さ、大事にしてくれ」

「零が材料を創ってから、妖気をたっぷり込めて作った日傘だ。耐久性は抜群だぜ」

もともと、幽香の元祖マスパを連射されたら防ぎきれぬ自身は無いが。

「・・・ありがとう、大事にするわ」

「ああ、大事にしてくれなかったら泣く」

百年間紫と同じ家に住んでいて、ありがとうといわれたのは初めてではなかるうか？

「藍、お前泣き過ぎだって」

「だって、えぐっ、零兄しゃまと紅兄しゃまが・・・」

「二度と会えないわけじゃないんだから、な？家のことはお前に任

せたぞ

「・・・あい」

さて、そろそろ時間か・・・

「じゃあな、また。あ、あとこれも渡しておくぞ」

俺は二枚のカードを紫と藍に手渡す。

「これは何？」

「VIPカード。俺たちのここに来る時はそれを持っているといいことがある。じゃあな」

「ええ、また」

俺達は飛び立つ。北に向かって、振り返らずに飛び続ける。

「はい、着きましたね。どう見ても人里です、本当にありがとうございます」  
ぞいました

「お前今から電波発言禁止な」

「お前は俺に死ねというのか！」

「現在進行形でそう言ってるだろ」

今から約半年前、コツコツとためてきたお金で人里の余っている土地を買い取ったのだ。

そこに料亭を建てるために。

先ほどの会話で俺達が旅に出ると思った方へ。読みが甘かったようですね。

そんなことを考えているうちに、買い取った土地に着きました。

「よし、じゃ創りますか」

「y r」

俺が胸の前で手を合わせ、地面に手を置くだけで、前々から考えていた図面通りに

建築物が出来上がってくる。鋼の 金術師マジパネエっす。

「あつという間、あつという間、あつという間、げきじょ〜おお〜  
おお〜」

「ドンだけ懐かしいねん」

「いや、なんかふと頭に浮かんだ」

ひとまず、建物は完成。そして一番大事な工程が次！

「さて！料亭の名前を決めようか！」

「わいこうてい  
零紅亭」

「お前のネーミングセンスは皆無だな」

「だってめんどくさいんだもの」

「ちなみに俺が考えてたのは『Fantasy Village』  
だぜ！」

「ありきたり乙」

「お前絶対意味分かってねえだろ」

「馬鹿にすんな、『幻想郷』だろ？」

「・・・こいつなんでそんなこと知ってたんだ？」

「よし、じゃあ決定の方向で」

「いいよ、めんどくさいし」

こうして、俺達の人里生活が始まった。



別れってほどでもない（後書き）

・・・なにを書きたかったんだろう？

## 転生する者

「カツ丼三つ上がり！」

「レバニラ定食のお客様どちらですか？」

「お会計千二百円になります」

「ありがとうございます！」

料亭『Fantasy Village』は、開店してから連日繁盛していた。

料理の種類は約千種類。料理は頼んだ十秒後には出てきて、なおかつ熱々作りたて。

むっちゃ美味しいのにマジ安い。しかもご飯と味噌汁と漬物のおかわりは自由。

これで繁盛しないわけが無い。

ちなみに一々時間を止めて作っているわけではない。

ではどうやっているのか？それは・・・

頭装備：バンダナ（オートヘイスト×4）

胸装備：パーカー（オートヘイスト×4）

腕装備：中華包丁（オートヘイスト×4）

腰装備：エプロン（オートヘイスト×4）  
足装備：ジーンズ（オートヘイスト×4）

という装備を二人ともしているからだ。

腰には専用のベルトを装備し、おたま、ヘラ、菜箸などの料理の必須品を取り付けている。

無論すべてに（オートヘイスト×4）をつけている。

しかし一つ問題があつて、普通の火では俺達のスピードについていけないのだ。

なので魔力で炎を出し、それで焼いている。

紅も長年（といっても百年ほど）の修行で、とっくの昔に魔力を放出できる。

揚げ物は、油を使わずヘルシー、それでいて本来の味わいを失っていない。

まさに俺に不可能はない。最高の気分だ。

ちなみに開店時間は、AM 8:00 PM 9:00の、一時間休憩あり。ちょうど半日だ。

この時代（というか幻想郷）ではこれといった娯楽が無いため、住民はすぐに寝る。

なので十二時まで店を開いている必要は無いのだ。

大抵の人たちは、六時ごろには飯を食べ終わるので、七時くらいからは

客がほとんど来なく、いたとしても精々三人くらいだ。

しかし、俺達の料理を作る手が止まる事は無い。なぜかって？それは・・・

「零々おかわり」

「てめえ！いい加減にしるや！」

「幽々子にVIPカードを渡したのはあなた、自業自得よ」

「限度つてもんがあるだろが！」

ほぼ毎日幽々子と紫が来ているからだ。

VIPカードは特別な客の証。ここで食べる料理は全部無料になるのだ。

いままで会った原作のキャラ+風雲と蒼には渡してある。

しかし、幽々子に渡したのは間違いだったようだ。作った先から食  
い尽くされる。

おかげで商売上がったりだ。食材は創っているので材料費はゼロだ  
が。

(幽々子のせいで)そろそろ材料も切れるし、今日は閉店にしよう  
かと思ったそのとき、

木製の扉ががりりと開き、十数歳くらいの少女が現れた。

「いらっしやい、何にしますか？お品書きはそちらです」

「いえ、食事をするために来たのではありません。あなた達に会い  
に来たのです」

その少女はそういった。

「とりあえず、なんで？と聞いておこうか」

「私は稗田阿一、この幻想郷の歴史を書かせてもらってます」

「……で？」

「はい、それで新しく出来たこのお店と、あなたたちの事を聞いておこうかと思ひまして」

この辺で俺はやつと理解できた。

こいつは稗田阿求の先祖だと。

稗田阿求、『一度見た物を忘れない程度の能力』を持つ、

幻想郷最古の人間だ。幾度の転生を繰り返し、幻想郷の歴史を書き続けている。

たしか俺の前にいるのは阿礼の次だったはずだ。

「ふーん、けどおれたたちのこと聞いても何にもならないと思うけどね。」

新しく料亭を開いただけのただの人間だぜ？書くことなんてないつしよ」

「いえ、『妖怪の賢者』八雲紫と『幽冥楼閣の亡霊少女』西行寺幽々子と

親しげに話している人間を、ただの人間とは解釈できません」

「……反論できねえ」

そこに、阿一が来てから過ぎに厨房に入っていった紅が、鯖味噌定食を持ってやってきた。

「まあ、料亭に来て何も食べないというのもアレですから、お金はいいんで食べてください」

阿一は一瞬迷ったようなそぶりを見せたが、すぐに、お言葉に甘えます、と言って食べ始めた。

「・・・おいしい」

「それはどうも、うちは早い、安い、美味いがモットーですから。看板は見たでしょう?」

この料亭の表には看板が出ている。俺はそこにはこう書いた。

“料亭『Fantasy Village』は早い、安い、美味いをモットーとしています。

もし、料理に不満があるようでしたら、遠慮なくお申し付けください。

なお、食い逃げをした場合は、命の保障は出来ませんので、ご注意ください”

この看板を見て食い逃げした奴は、すでに妖怪の山奥に首だけ出して埋めておいた。

すでに妖怪の餌になってるかも知れんなあ。

その後、阿一とはすぐに打ち解け、いろんな話をした。

阿一はすでに紫と幽々子は知り合いのようで、普通に話していた。

紫は普通に俺達の秘密（紫の家で百年程家事をやっていたことや、天魔に勝った事）を

ばらした。おそらく俺達は（主に天魔のことで）幻想郷縁起に書かれるだろう。

ちなみに幻想郷縁起とは、妖怪百科事典のようなものだ。

「っと、話し込んでしまったな。もう十時じゃないか」

「あら、もうそんな時間でしたか。それでは、私はこれで失礼します」

阿一はぺこりと頭を下げて、夜の闇へと消えていった。

「あいよー、また来てねー。さて、お前らも帰れよ」

「わかったわ、また明日ね」

紫もスキマを開き、消えていった。しかし・・・

「幽々子、なぜ帰らない？」

幽々子は帰ってはいなかった。

「それがねー、こんな時間までおしゃべりしてたもんだから、帰ったら妖怪に

朝までお説教されちゃわ。そんなわけで、今晚泊めてくれないかしらっ？」

いきなりの爆弾発言に、俺ショート。数秒後、再起動。

男二人の家に泊めてっついていえるこいつの度胸が底知れねえ。

「・・・まあいいや、紅ー、今日幽々子泊まるって」

俺はすでに皿洗いを終了して、奥の俺達の家でまったりしている紅に告げる。

すると紅が出てきて、こういった。

「幽々子はさー、男二人いる家に泊まって、襲われるとか考えないの？」

「あら、そんなことを考えていたのかしら？」

うわ、これは厳しい反撃だ。

「いや、男二人の家に泊めてっぺいえるこいつの度胸が底知れねえって思ったただけだ」

「おお、俺と同じ思考回路してる。さすが心の友よ」

「・・・まあいいわ、泊めてくれるのよね？」

「「私は一向に構わんツ！」」

後日、冥界の方面から、女性の悲鳴が聞こえたそうなの。



## 人と鬼の戦争

定休日、それは定期的にある仕事を休める日のことを言う。

料亭『Fantasy Village』の場合、定休日というのは、本体が休める日を指す。

毎週水曜日、俺が二人分の分身を創り出し、それに料理をさせているのだ。

その日、本体は店の上にある家（6LDK）で、まったりと過ごすのだ。

いつも通り、今日もまったりと過ごす予定だった。しかし、それはスキマによって壊された。

昼寝でもしようかと、布団を用意した矢先、スキマ妖怪が目の前に上半身だけ現れた。

「何の用でしょうか？大妖怪八雲紫様。私めは今から昼寝をする予定なのですが」

「昼寝なんてしている暇ないわ、緊急事態よ」

「俺の眠気の方が緊急事態だ」

俺は布団にもぐりこむ。しかしすぐに出ることになった。

「鬼が攻めて来るわ」

「何い！」

さすがに飛び起きた。鬼が大勢で攻めて来たら、人間の村なんてひとたまりも無い。

ましてや、まだこの人里は平和で、そこまでの防衛設備は無い。

「いったいいつ攻めて来るんだ？それによって大分対策を練れるんだが……」

「見れば分かるわ」

そういつて紫は山側の窓を開ける。そこには……

「おいおいおいおい、洒落にならねえな。もう見えるところまで来てるじゃんか」

人間の視力では見えないだろうが、俺はすでに人類を超越している。窓から見えるのは、五百人はいるだろう鬼の大群だった。

「……時間にしてあと十分ってところか。ちよつと紅呼んで来るわ」

「いや、その必要は無い」

俺の部屋のドアの前には、すでに紅がいた。

「話は？」

「聞いた。しかしなぜいきなり鬼が攻めて来るんだ？」

「・・・噂によると、鬼子母神が幻想郷に入り込んだらしいわ」

「「うそーん」「」

鬼子母神、それは安産の神にして鬼の母である。

原作には出てこなかったので、強さはまったく分からないが、天魔クラスだという噂だ。

「俺この料亭壊されたら鬼皆殺しにするわ。言葉通りの意味で」

「あなたなら本当にやりそうで怖いわね。私としては、出来るだけ穏便に済ませたいのよ」

「けど、結局理由は分からないんだろ？」

「ええ、戦いは免れないと思うわ」

「なら、方法は一つしかないな。鬼が人里に入る前に食い止める。  
紅」

「ああ、もうやっている。紫も重ねろ」

人里に強固な結界を何重にもして張る。これにより、並大抵の鬼は入れなくなるだろう。

なにせ、境界を操る紫の結界と、空間と時間を操る紅の結界が合わさっているのだ。

「・・・・・・・・おし、組み終わった。じゃあ行くか」

「お、武器はあるか？」

「ん〜いらね。徒手空拳の方が慣れてるし」

「私は手伝ってくれそうな妖怪を呼んで来るわ」

外にはすでに、鬼が肉眼で見えるほどまで近くに迫ってきていた。ひい、ふう、みい、よお、・・・六百三十八人。いや、六百三十八鬼か。

「連れて来たわよ」

すぐに紫が幽々子と妖忌と天魔と幽香をつれて来た。

「よし、じゃあ極力殺さないように。特に幽香、殺戮禁止な」

「わかったわよ。よほどしつこい奴以外は殺さないわ」

「こっちは七人。一人頭九十人つてとこか。いけるな？」

鬼は妖怪の中でもトップクラスに入る。一人一人が強いのだ。正直、一人で九十人も倒せるか微妙だ。能力を使えば別だが。

「私はいけるわ」 紫

「わしも楽に行けるじゃろう」 妖忌

「我輩が負けることなど無い」 天魔

「お前俺に負け認めたじゃん」 俺

「死に誘うのは反則かしら？」 幽々子

「ひとまず殺さなければ何をしてもいいんでしょう？」 幽香

「……まあ頑張るさ」 紅

それぞれ微妙な反応。いざとなれば本当に存在を消すけどな。あーけど歴史変わるかもしれないな……まあ大丈夫か。

「さてさて、鬼さん到着した模様ですね？」

目の前には鬼の軍勢、全員角装備。

そこからは、想像のつくとおり、大乱戦の始まりだった。

少年ふるぼっこ中……

「……紅！聞こえたらこっち来い！」

俺はすでに能力抜きで五十人ほどのして、一塊にしておいてある。鬼さんは意外に弱かったのだ。それともこっちが強くなったのか？

「聞こえてる……よっと！」

紅も向かってきた一人を蹴り飛ばし、こちらに移動してきた。

まだまだぜんぜん余裕そうだ。この調子なら楽に終わるだろう。が・

・

「さっきから見てみると、鬼子母神と鬼の四天王がいない」

「そういえば・・・零！人里の反対側に何か向かってきている！」

「ああ！俺も感じ取った！あと頼んだぜ！」

俺は生命反応がある場所の座標を確認する。さすがにいくら修行したとしても、

鬼の四天王と鬼子母神を同時に相手するととなると、いささかきつそうだ。

場合によっては深手を負わせることになるかも・・・まあ治せるから良いか。

俺は飛び立ち、音速でその場をあとにした。

## 人と鬼の戦争（後書き）

鬼子母神のくだりも『幻想郷爆誕』から引いています。  
勿論許可は取っているので異論は（ry

## ロリっ子鬼娘

突如、陽動作戦の要である、鬼子母神と鬼の四天王の目の前に、魔法陣が現れた。

いきなり出てきた魔法陣に鬼は臨戦態勢を取った。どんな敵が現れるか分からない。

しかし、その魔法陣が光り輝き、中から現れたのはただの人間……

「どうもこんにちは、あんたらが四天王と鬼子母神か？」

だったら鬼も苦労しませんよね、はい。どう見ても俺様です、本当にアリアリアリ（ry  
え？飛んできた筈なのになんで魔法陣から出てくるんだって？そりゃあアレだよ。

そっちの方がカッコいいから（大真面目）途中で考え直したただけですよ。

「お主、何者じゃ？」

その時、おそらく鬼子母神であろうナイスボディな女性から声がかかった。

あの胸……紫と同等、いや、それ以上か？しかも着物を着てるのに、

裾から大胆に生足が出ている。さすが鬼子母神、美しさも半端無いぜ。

こんな美しい人もとい鬼にはアレだね、素直に……



「人に名を聞くときは、まず自分から名乗るのが礼儀つてえもんだろっ?」

挑発だね 若本規夫さんみたいな声で言い放つてやったよ。俺偉い?

「ふむ、それもそうじゃ。妾は鬼子母神の鬼姫おにひめ千百合ちひるひじゃ」

なんか普通に返された・・・よく考えたら鬼に若本規夫さんの声分かるはず無いか。

じゃあ子安武人さんの声ならわかってくれるかな? 憑依コンプライン!とかいつて。

「俺は人里で料亭を営んでいる八神零、以後おみきしり・・・おみきつ・・・あれ?」

「お見知りおきを、じゃ」

「そうそう、以後お見知りおきを」

「・・・」

いやあ、思いつきり噛んでもうた。呆れられてるよ。

「まあそれはいいとして、あんた達が人を襲いに来たのなら、さっさと帰って」

「帰る気などない、と言つたらどうするのじゃ?」

「無論力ずくでお帰り願う。さあ、誰から俺と闘ちりますか?」

鬼子母神、鬼姫千百合（以後百合ちゃん）の後ろに控えている四天王を指差して言う。

男性二人、女性二人の四天王。男の方は二人とも仮面をかぶっている。

俺の言葉に反応し、一番最初に名乗ったのは、ツルペタ幼女の・・・

「私は伊吹萃香<sup>いぶきすいか</sup>、萃香でいっよ。よろしく〜」

萃香さんです。ちなみに勿論酔っ払ってらっしゃいます。いつも通りです。

『密と疎を操る程度の能力』とかいう意外と使い勝手のよい能力を持っています。

能力で分裂したり大きくなったり出来るので、小さな百鬼夜行とか言われています。

あだ名はロリ鬼、またはツルペタ幼女です。どちらでも結構です。はい。

頭にはねじれた二本の角を持ち、腰につけている瓢箪から無限に出てくる酒を、

飲んで飲んで飲んで飲んで飲んでるので、いつも酔っ払っているイケナイ幼女です。

「おっけい、じゃあ始めようか。あ、俺が闘っている最中に里襲うとかマジやめてね」

「心配せずともよい。鬼は誇り高き種族、そのような卑怯な真似はせん」

鬼は嘘をつかない、だっただけか？つまり嘘発見器は必要ないわけですね、わかります。

さて、冗談はこれくらいにして、臨戦態勢にはいるうかい。

「先に言っておく！」

俺は鬼達に指を突きつけて、言い放った。

「ただの人間だと思ふなよ？」

瞬間、俺の体から、じわりじわりと、闘気が滲み出てくる。

まだ能力は使っていない。ただ肩を回して準備しただけだ。

百年間の極度の修行によって、知らず知らずのうちに闘気を出せるようになっていたのだよ！

「自信満々だね、じゃあいつくよ、えいつ！」

萃香が足元に落ちていた石ころを拾ってこちらに投げってきた。

多分速度的には亜音速くらいだと思うが・・・避けることなんてわからない。

ギリギリまで待ち、紙一重で横にかわして・・・

「あぢいいいいいいいい！！？」

熱い！熱い！え、何ナノこれ！顔むっちゃ熱いんですけど！火傷してんですけど！

つか避けたよね！俺きちんと避けたはずなのに火炎放射くらったよ  
うに熱いんですけど！

まあ火炎放射はくらったことなんて無いけど！

「おいおいおいおいおい！何をした？俺の凜々しい顔が火傷してしまったではないか！」

「何もしてないよ、ただ萃めただけさ」

「萃め・・・おいいいいいいい！危険すぎるだろそれ！人間にやる技じゃねえよ！」

「え、だってただの人間だと思うなって言ったのそっちじゃん」

「うっ！反論できない・・・」

物質というものは、極度に圧縮することによって、それだけで膨大な熱を発する。

つまり萃香は能力で石ころを凝縮させ、投げつけただけということ。

「まだまだいくよ、それっそれっそれっ！」

「ちょwおまw w w w w w w w 重符『相反する力』」

うん、さすがにこれは能力を使わざるを得ない。下手したら死ぬもの。

重符『相反する力』は簡単に言つと、石ころにかかる運動エネルギーをそのまま

こちらからもぶつけるという意味不明なスペカなので、結論だけ言つと、

俺と萃香の midpoint で石ころが止まって、重力にしたがって下に落ちるといふことですね。

「いやあ、マジ死ぬかと思った」

「やるね、じゃあ次は肉弾戦でいくよ？」

その言葉と同時に、懐に萃香が現れた。

そう、現れたのだ。懐に入るまでがまったく見えなかった。そりゃそうだ。能力を使って自身を霧にして、懐で再度元に戻ったのだから。

まあどつちにしる懐に入られたのは事実。ここは正々堂々と・・・を受けて立つ！

「そお・・・れっ！」

萃香の小さな拳が、俺の腹筋目掛けて飛んでくるのが見える。かわすことなんてしない。いなすこともない。ただこの肉体で受け止めてやるっ！

「ふんっ！』『ドゴン！』『ぐっ！？』

・・・痛い。

さすがに鬼の一撃を喰らうと痛い。ズキズキする。だがその程度だった。

百年間頑張った甲斐あって、確実に肉体は強化されていた。・・・さすがに顎にくらったら死ぬ自信があるな。

「へ、やるね、私のパンチをくらって倒れないなんて」

「まあ・・・これよりもっとヤバイパンチ打ってくる奴が近くにいるしな」

アルティメットサディスティッククリーチャーことゆうかりんという名の大妖怪がな！

あ、やべ、思い出したら頭痛くなってきた。

「さて、時間もないから終わらせてもらうぜ？言符『打ち破れぬ言葉の壁』」

このスペカは禁術『絶対領域』の劣化版のようなものだ。

俺の半径二十五メートル内にいる生物は、俺の言葉には絶対に逆らえない。

絶対領域と違うのは、何でも出来るわけじゃないところかな？

俺は萃香の耳元で囁く。

「『萃香、もうそろそろ眠れ』」

その言葉で、萃香は拳を突き出した状態のままこちらに倒れてくる。完全に眠りこけた萃香をひよいと持ち上げ、若干驚いた表情を見せる鬼子母神に渡す。

「さて、次は誰かな？」

## ロリっ子鬼娘（後書き）

この話を書くとき、風呂上りでトランス状態でした。

全部書き終わり、確認してなんだコリヤ？とか思いましたが、書き直すのも面倒くさいのでそのままボーンします。

## 強き者、弱き者

「ふおっふおっふおっ、萃香を倒すとは、お主中々やるのう」

仮面をかぶった一人が、前に出てきた。声的にはただのジジイだ。男はゆっくりと仮面をはずし、俺に素顔を見せた。

「今度はわしが相手になろう。よろしいかな？若いの」

仮面をはずしたその姿は、結局ただのジジイだった。違いは一本の角だけ。

しかし、服の上からでも分かる鍛え抜かれた肉体は、とてもジジイとは思えないほどの威圧感を持っていた。

これが俗に言う老人マツチヨか・・・いいな、カツコいい。

「良いですよ。戦闘中にポックリ死んでしまうことさえなければ」

「ふおっふおっふおっ、心配無用じゃ。少なくともあと千年は生きたいのでな」

「失礼ですが、何歳ですか？」

「わしに勝つたら教えてしんぜよう。わしの名は鬼道丸、いざ参る！」

老人マツチヨが突っ込んでくる、が、萃香よりは遅い。



簡単に避けて、カウンターを繰り出そうと右手を上げた瞬間、俺は宙に浮かんだ。

「!?!?・・・びっくりした」

どうやら俺は投げられたようだ。自分でも気がつかぬ間に。ジジイだと思って油断したらやられるな・・・まあそれも一興か。俺は空中で体勢を立て直し、三回転ひねりを決めながら着地。十点満点だ。

「ほほう、やはり出来るようじゃな」

「まあこれくらい出来ないと幻想郷で生きていけないからな」

今度はこっちの番だ。

思い切り地面を蹴り、相手との距離を一気に縮める。腹に一撃いれようと、右手を突き出したが、甘い考えだったようだ。老人マツチヨはいとも簡単に攻撃をいなし、あまつさえ俺の右手を折った。

「っ!?!」

「ほれほれ、油断大敵じゃぞ?」

痛みに耐えかねているところに連撃をくらう。

一撃一撃が、腹に響く。体の芯までダメージを蓄積される。この老人マツチヨ・・・強い!伊達に年食ってないな。

「あよいしょ!」

俺は一度バック転、前方倒立回転、バック宙のコンボで距離をとった。

さすがに片腕で闘うのは思い切り分が悪い。

反対側に曲がった腕を、無理やり元に戻す。気分はスークだ。

あ、勿論痛覚は消してやった。その後は能力で完全にくつつける。

ついでに治すのを忘れていた顔の火傷も治す。これで完全に元通りだ。

「少しばかり力を出させていただきますよ？」

「ほう、いままで力を出していなかったような言い草じゃの？」

「ええ、これから出すのは・・・ちょうど八十%というところでしょうか？」

超音速、それは俺と紅が出せる最大のスピード。

今までの俺の行動はすべて亜音速に抑えていた。だから次は音速だ。

「ヤガミ、いつきまゝす」

瞬間的に音の壁を突き破り、老人マツチヨの背後に回る。

狙うは首だ。手刀をある一定の角度で叩き込むことで意識を刈り取ることが出来る。

さすがに老人をボコボコにするのは気が引けるからな。

しかし、俺の手が首に届くことは無かった。

なぜなら、その手は老人マツチヨの手に掴まれていたから。

「おしかったのう」

(ろ、老人の握力じゃねえ)

メキメキと嫌な音を立てて、俺の手の形が変わっていく。咄嗟に痛覚を遮断していなかったら、想像を絶する痛みに襲われただろう。

あれか、こうなったら超音速しかないな。あの時使った必殺技を出すか。

「何時まで握つとんじゃ!」

老人マツチヨの手を振り払い、また距離をとる。手は元の形に戻した。

そして右手を後ろに構え、腰を落とし、足の親指の付け根に力を集中させる。

「鉄拳『問答無用の一撃』」

超音速、これが防がれたらさすがに勝てない。どうかこの一撃で気絶しますように。

「ぬおっ!?!」

かわされた・・・もう終わりだ。この老人マツチヨは強すぎる。

「今のは危なかったのう。さて、万策尽きたか?」

「はい、もう煙も出ません。ただし、能力を使わない場合ですが・・・ね?」

こんなジジイ相手に能力を使わなければいけないなんて、思ってもいなかった。

あんたが強すぎるのが悪いんだ。恨むなら自分の強さを恨みな！

「絶対『永遠に縮まぬ力の差』」

終わった・・・後は一方的に攻撃するだけだ。

「本当は痛い思いなんてさせたくなかったんだけど・・・仕方ないな」

「ここまでの力の差を見せ付けられて、まだそんなことを言うとはな」

「さっさと気絶シてくダさいネ？」

俺は鬼道丸に近づき、拳を突き出す。今度は避けられない。超音速の拳が、鬼道丸の腹筋に刺さり、激痛をもたらす。

「ぐおっ！」

せめて痛みがなくなるように、首に強烈なエルボーを叩き込み、沈める。

これで・・・気絶したか？

「ぬう・・・お主、何をした？」

まだ起きていたか・・・丈夫なジジイだ。

「何もしていない・・・ただ、あんたの攻撃が俺に当たることはな

い。

俺の攻撃が外れることもない。なぜかって？それは圧倒的な力の差があるからだ」

さて、そろそろ終わらせるか。

「もう眠ってくれ」

先ほどよりも拳を引き、腹にここ一番の正拳をぶち込む。しかし、その正拳は他の人物の手によって阻まれていた。

「これ以上やるなら、私が相手になろう」

もう一人の男が、俺の手を押さえ込んでいた。

不可解な。こいつは少なくとも五十メートルは離れたところにいたはずだ。

なぜ一瞬で止めにはいれた？

「俺はこの人がやめてくれれば特に文句はない。次はあんだだな？」

男は、そうか、と行って、ゆっくりと仮面をはずした。

その素顔は、何度も見たことのある、あの顔。

「蒼、お前も四天王の一人だったのか」

## 秒速300キロメートル

「そう、私は鬼の四天王の一人、“速度”の蒼だ」

速度、ねえ。紅から能力は聞いてるけど、そのまんまだな。

出来れば戦わないのが理想だけど・・・まあ、いくら速くても不可能にはかなわんべ。

「そうか、いくらお前でも人里を侵略しようと言うのなら、容赦は出来ないぞ」

「それはこちらとて同じことだ・・・だが、私は出来ればお前たちとは戦いたくない。

人里を落としても、お前達には手を出さないと誓おう。ここは引いてくれないか？」

アホか、客になる人がいなかったら商売が成り立たないじゃないか。

「ここですんなり引くくらいなら、最初から止めに来ねーだろが」

「・・・ならば見せてやろう、私の速さを」

その言葉を蒼が発したと同時に、俺は地面に倒れ付していた。

「!!!?・・・それがお前の速さか」

蒼が動いた様子は無い。つまり一瞬で俺に近づき、倒してから元の場所に戻ったと言うこと。

これは、このスピードは・・・下手をするとヤバイな。さっさとけりをつけるか。

「そうだ。これで力の差が分かっただろう。諦めてくれ」

「いやだね、人里の住人として、そう簡単に諦めるわけにもいかないんでね」

まあ、能力を使えば幻想郷そのものを壊すことだって出来る。やらないけど。

こっちが能力を発動させた瞬間、俺の勝利は確定する。

「残念だ、お前を殺したくは無かったのに・・・」

「殺されてたまるか！禁術『絶対領域』」

俺の半径二十五メートルに、俺が造りだしたフィールドが展開される。

この中で俺に逆らえることなど、出来はしない。

「もうお前がいる場所は俺の空間、逃れることは『不可能』だ」

「・・・だからどうした？」

俺の言葉に臆することも無く、蒼は言い放った。

「お前は俺の“速度”を舐めている・・・」

刹那、俺の体に蒼の拳が文字通り突き刺さった。

突つき刺さささったのだ。 比喻でもなんでもなく。

肝臓は完全につぶれ、胃は破裂。アバラは少なくとも五本は粉碎されている。

俺は地面に倒れる。痛みで能力を上手く使えない。意識があること事態奇跡だ。

迂闊だった。まさか言葉を発する前に攻撃されるなんて、考えもしなかった。

口から血がとめどなくあふれ続ける。血が詰まって、息することもままならない。

ちよつどわき腹が消え去ったような感覚。一撃でここまでポロポロにされたのだ。

俺の人生、これで終わりか。

もはや意識を保つことすら難しい。視界が少しずつ黒く塗りつぶされていく。

こんなに痛い思いをするのなら、さつさと死んでしまいたい。そう思った。

しかし、皮肉にも俺の本能が、ここで死ぬことを許さなかった。

少しずつ、少しずつ、感覚が戻ってくる。

力を振り絞り、仰向けになると、蒼い空がはっきりと見える。

聴覚も戻り、森のざわめきが聞こえてきた。



しかし、そこまでだった。

なんとか生きていられる状態まで回復はしたが、それ以上は無かった。

むしろ感覚が戻ってきたので、さっきより痛みは酷く、苦しさも倍増だ。

しかし、のた打ち回ることなんて出来ない。

「俺の声が聞こえるのなら、ただ一言、参ったと言え」

いつの間にか、目には俺を見下ろしている蒼が見えていた。

ここで参ったと言ってしまえば、治療してもらえるだろうか？  
そんな考えが、ふと頭をよぎった。

俺は最後の力を振り絞り、のどからあふれる血に咽ながら、その問いに答えた。

「ごぼつ、誰、が、降参、する、か」

どっちにしろ、俺がここで殺されても、生かされても、人里が落ちることに変わりはない。

ならば、せめて最初の信念だけは、貫き通してやろつ。そう思った。

「そうか・・・それがお前の答えなのだな」

蒼は拳を上げた。それが下ろされた瞬間、俺の人生は幕を閉じるだろつ。

目のはつきり見える分、俺にはその様子がくつきりと見えた。



だが、断罪の時間は来なかった。

「こっ酷くやられてんな、零」

時は、止まっていた。

秒速300メートル(後書き)

少し短かったかな？

## 体操着万歳

「う、が・・・ぎ」

「喋るな、今治すからじっとしてろ。」  
『時間逆流』《Backfl  
ow at time》『」

紅がそう言つと、俺の傷が見る見るうちに塞がっていく、いや、戻  
っていく。

蒼と戦う前の状態、絶好調状態でもないまで体の時間が戻っていく。

「ふう、下手したら死ぬとこだったぜ」

「おお、成功した」

成功したってなんだ成功したって。上手くいくかどうかわからな  
かつたんかい。

まあそれは置いといて、俺は立ち上がり、いまだに止まっている蒼  
を見る。

「この状態で刺したら終了じゃね？」

．  
．  
手の上に一本の鋭利なナイフを創る。心臓の辺りをサクッとやれば

「無理無理、時間が止まってるってことは全く動かないってことだ  
ろ？」

ダイヤのナイフで刺しても刃毀れして使い物にならなくなるぞ？」

「ふっ、お前は俺の能力を忘れたのか？いや、まあどっちにしろそんなことしないけど」

そういつてナイフを消す。

「さて、俺が萃香ともう一人の四天王倒したから、あとは勇儀の姐さんと蒼だけだ。

鬼子母神は俺がやるとして、お前はどっちと戦いたい？」

「蒼の方向でy」

やはりか。

「負けたままではいられないってか？」

「・・・まあそんな感じだ。いいか？」

「いいかも何も、俺的には最初から勇儀の姐さんと遊びたい（戦闘的な意味で）と思ってた。

それに俺の場合はやるうと思えば一瞬で終わらせられるし、わざわざ勝とうとも思わない」

「おk、じゃあ身体能力上げとけ、動かすから」

今度はやられないように、『俺に危害を加えることは不可能』になるように能力を使う。

攻撃をしようとしても、俺に当たる寸前で弾かれるって寸法よ！

「ほいっ」と

その言葉と同時に蒼の拳が地面にめり込んだ。

「……お前の能力か」

「そゆこと、今からお前の相手は俺だ」

その言葉で、紅と蒼は消えた。否、消えたように見えた。よく目を凝らしてみると、二人の残像がかすかに見える……ような気がする。

数秒後、服の一部が破けている紅と、頬からかすかに血が垂れている蒼が現れた。

「零、ここじゃ色々邪魔だろうから移動するわ」

「いつてらっさい、勝てとは言わんが少なくとも死ぬなよ」

「さっきまで死に掛けだった奴がなにいつてんだ。お前のように油断はしない」

「油断しなくとも、負ける可能性はある。最初から殺すつもりでないかと逆に死ぬぞ」

「はいはい、その言葉、しっかりと心に留めておくよ。じゃ」

「ああ、逝ってこい」

「ちょ！字が違うー！」

そう言い残して、紅はこの世を去った。間違えた。この場を去った、

だ。

それと同時に蒼もいなくなる。妖怪の山でも行ったのか？

「さうて、俺の相手はあなたですか？体操着のお姐さん」

俺は鬼子母神の横にいる、体操着を着たグラマーな女性に言った。

「そのようだね、私は星熊勇儀ほしくまゆうぎ、鬼の四天王の一人、力の勇儀さ」

「俺は八神零。人里で料亭を経営させてもらってる」

そうかい、と行って勇儀は体をほぐし始めた。動くたびにその胸が揺れる。

頭にそびえるは一本の角、それに加えて、嘘をつかない鬼らしい性格。

身長も高く、顔は言わずもがな、体操着というマニアックな姿はぬいても……

「美しい……」

思わず声が出てしまった。それほどなんか心にぐつとくる美しさなのだ。

あれだ、女性としての綺麗さで言えば紫とかもすごいが、なにか違うところがある。

特に恋愛関係になろうとは考えてもいないが、アレはもはや一つの芸術品のようだ。

「助けてくれ！とかは言われたことがあるけど、人間に美しいって言われたのは初めてだね」



「あ、聞こえてた？」

やべ、ちょっと恥ずかしい。

そのまま一分ほど待つと、勇儀が体操を終わらせた。

「よし！じゃあ始めましょうか！」

俺がそう叫ぶと、勇儀が走ってきて、俺の顔に右のパンチを繰り出す。

走ってきて、といっても常人にとつたらまずよけられないスピードだったかな！

それを受け止めようと、左手を前に出すが、それは囷だったようだ。出した右手を地につけ、足に右蹴りを放ってきた。俺はそれをひよいとジャンプして避ける。

それが間違이었다。

右のあとに左も来たのだ。ちょうど空中にいる俺のわき腹目掛けて。勇儀の能力は『怪力乱神を持つ程度の能力』つまり力が半端無く強いのだ。

これをくらったら間違いなくアバラの二・三本は持っていていられるだろう。

さっきの能力はとっくの昔に解除したので、相手の攻撃は俺に当たる。

さっきの蹴り、受け止めてればよかったと思いつつ、両手をクツシヨンにして蹴りを喰らう。

衝撃は吸収しきれず、アバラは守れたものの、右手の小指が折れた。地面に着地したら、すぐに能力を使い、治す。これで元通りだ。

「いやあ、力のというだけあって、すごい力だな」

「それが取り柄だからね。ほら、ぼっとしてる暇なんか無いよ!」

一撃食らうだけで致命傷になりうる攻撃は、受け止めるのは厳しい。受け流そうとしても、強引に振りぬかれてダメージを受ける。

どうやら最初の一撃は力試してみたいなもんだったようだ。マジ勘弁してくれ。

ふと鬼子母神のほうを見ると、ニヤニヤとこちらを見ている。マジ色っp

「そろそろそろあー!よそ見してる暇なんか無いよ!」

「ちょ!少しは手加減しろって!」

強烈な貫手が耳たぶをかする。

「鬼が手加減なんて器用な真似できると思っのかい!」

「出来るやつがいても不思議じゃなツツ!?!」

引いた右手で襟首をつかまれ、受身をする隙もなく地面にたたきつけられた。

「ガッツ……!!」

地面に特大のクレーターができ、肺の中の空気が強制的に外に出される。

体が碎けなかったのを喜ぶべきか。意識が飛びかけたが、すぐに持

ち直す。

しかし体は動かない。酸素不足による行動の停止。そのコマ数秒が命取りになる。

「そつらっ！」

体重を乗せた膝が俺の腹に振ってくる。

（なめ、るな！）

間一髪、どうにか動いた右手で地面を殴り左方向に転がる。

勇儀の膝がまともに地面に激突し、震度5強の揺れとともに地面に輝が入る。

（あつぶねえな！？あんなの直撃したらバラバラになるぞ！）

なにはともあれ、次の攻撃が来る前に肺に酸素を取り込む。

重かった体が一気に軽くなると同時に、背中痛みが増してきた。

すぐさま能力で痛みを消して、また突っ込んでくる勇儀に相對する

……

……

…

「解せないねえ、どうして攻撃してこない？」

アレからどれだけ時間が経ったか知らんが、すでに俺は何度か死に掛けている。

そのたびギリギリで回復しているが、少なくとも相当の疲労がたまっているのは間違いない。

何度か絶対領域で眠らせようと試みたが、勘がいいのか効果範囲から逃げられる。

正直、疲労困憊の状態の俺にわざわざ止まって話しかけてくれるのはありがたい。

「女子供に暴力を振るうのは俺の流儀に反するんだよ」

勇儀の問いに、俺は正直に答えた。言葉巧みに相手を翻弄させるなんて俺にはできないしな。

「・・・たとえそれで死ぬことになっても？」

「たとえそれで死ぬことになっても、だ。何があるうと手は出さん」

勇儀はその言葉で、臨戦態勢を解いた。

「ちえ、こりやいい男前もいたもんだ。私の負けだよ」

「え！なんで？」

負けを認められるとはさすがに考えてもいなかった。

いやまあ戦闘が終わったのは嬉しいんだが……なあ？俺の頭は現在進行形で混乱中だ。

「別に・・・ただ、もうあんたと闘おうという気がなくなったのさ。

戦意喪失させられたら、それはこっちの負けになる。今度は酒飲みで勝負しようよ」

そういつて、勇儀は鬼子母神の横に戻っていった。  
なんか納得いかないけど、まあ・・・結果オーライ？

## 体操着万歳（後書き）

個人的に勇儀が好きです。いい交友関係を築いてほしかった。幽香との戦闘の理由はのちのち。

## 幻想郷の最高神

最初に“技”次に“経験”その次は“速度”次は“力”  
他の鬼とは抜きん出て違うところがある四天王、能力がなかったら負けていただろう。

蒼には負けたが・・・まあそれはいいでしょう。消そうと思えば存在ごと抹消できたし。

今から闘う相手は、その四天王のさらに上に君臨する鬼の神、鬼子母神。

個々の能力でいえば、四天王の方が強いかもしれない。  
しかし、弱い鬼が頂点に立ってるわけがない。確実に四天王より強いだろう。

どこまで粘れるものか・・・

「まさか妾までたどり着けるとは思ってもいなかったぞ」

「負けるわけにはいかなかったからな。できれば、この辺で引いてくれるとありがたい」

「妾は一度決めたことは曲げぬ。言うことを聞かせたければ、力で打ち負かして見せよ」

「じゃあそつさせてもらうかな？」

そうはいつでも、俺の疲労はすでにピークに足している。

疲労やダメージは、一時的に無くすることはできても、完全になくなるものではない。

ここで無理をすれば、蓄積された疲労は一気に爆発する。確実に死に至るだろう。

能力で無くそうとしても、俺の能力は数百年で完全に把握できるほど甘くはない。

細かい作業をしてミスでもしたら、それこそ映姫にお世話になることになる。

絶対領域で一瞬でかたをつけるか？いや、それも無理だ。

俺の技はすでに見られている。その他に考えた技も倒すことは不可能なものばかり。

しかも相手は鬼子母神、すぐに攻略され、逆に危険に陥るだろう。それにあの七枚のスペルカードは、絶対に使うわけにはいかない。

そもそも女性は殴れない。眠らせる、又は激しい閃光や爆音で気絶させるか……

あゝ、考えれば考えるほどやる気が無くなる。いつそ殺してしまおうか？

おっと、やばいやばい、紳士らしからぬ考えを持ってしまった、冷静に、冷静に。

とりあえず、今考えられる最善の策は、紫たちの救援を待つことだろう。

あのくらいの実力の鬼が相手なら、回復の時間も考えて三十分もあれば終わるだろう。

すでにこっちにきてから二十分は経っている。あと十分粘ればあるいは……

使える技の中で時間を稼げる奴をうまく使って、なんとか逃れよう。



「来ぬのなら・・・こちらからゆくぞ！」

「!!!?あぶねっ!」

ちよつと油断していたところに正拳が鼻先を掠めた。少し焦げた。速い事には速い、のだが、蒼とはまた違う。鬼道丸とも違う。洗練された動きなのだ。

予備動作も無く、最短距離で懐に入ってくる。そして死角からの攻撃。

「ほう、さすがじゃの。ならこれはどうじゃ?」

すべての攻撃が、確実に急所を狙ってくる。クリーンヒットしたら死ぬかもしれない。

四天王の長所をすべてあわせたらこんな感じになるだろう。

「偽符『水面に写る己の姿』」

ここでスペルカード発動。

「ほう・・・面白い」

鬼子母神が出した左拳には、俺の右拳がまるで鏡のように合わされる。

俺は鏡のように、鬼子母神の動きを真似ているだけ、ただそれだけだ。

こちらから同じ力で、同じ角度で、同じ速度で、エネルギーを相殺するスペルだ。

しかしこのスペルカードの欠点は、相手と全く同じ動きを強制するのは、

人体に意外と負担がかかる。つまるところ、長続きはしないのだ。

「なんじゃ？もう終わりか？」

「いや、まだ終わりはしない」

鬼子母神の攻撃を完全にいなせるまで身体強化をしたとしたら、大  
体五分が限度か。

五分間粘って誰も来なかったら、さすがにチェックメイトだ。  
人生最大の修羅場って奴か・・・願わくばぐり抜けたいものだ。

「嫌だなあ、死ぬのは」

俺は最後の身体強化をかける。疲労を無視し、体が軽くなる。

「やるしか、ないか」

突っ込んでくる鬼子母神を目にして、俺はゆっくりと構えた。

「時間切れだ」

俺は大の字に倒れた。もはや指一本動かすことすらままならない。結局は、救援は現れなかった、か。残念だ。だが清々しい。

鬼子母神は俺に近寄り、俺の顔を眺めていた。

「妾に汗をかかせた人間はおぬしが初めてじゃ、楽しかったぞ」

「そりゃどうも」

悔いはない、といたら嘘になるが、少なくとも後悔はしていない。やることはやった。自分の信念も貫き通した。それで結果がこれなら、仕方がない。

霊夢と魔理沙に会いたかったが、今となってはどうでもいい問題だ。

せめて紫たちが人里を守ってくれますように

「俺はもう疲れた。鬼子母神、鬼姫千百合。そろそろ引導を渡してくれ」

「・・・よかるう、妾の渾身の一撃により、天に還るがよい」

『いいえ、その必要はありません』

どこからともなく、声が響いた。まるで脳に直接響いてくるような声。

その声は、慈愛に満ちていて、疲れきった俺の体を癒してくれた。命の危険が迫っているはずなのに、俺の体を癒してくれた。幼い頃、母に抱かれて眠った記憶。それに似た感じだった。そのまま俺の目蓋は重くなり、段々と閉じてきた。

『この闘いはもう終わりです。引きなさい、鬼姫千百合』

「鬼の神である妾に命令するとは、何者じゃ」

『私の名は』

俺の目が完全に閉じる瞬間、龍のような影が見えた気がした。

## その存在

「・・・いつもの天井だ」

俺は気がついたときにはいつもの自分の部屋にいた。

俺がここにいるということは、人里はおそらく守られたのであろう。とりあえず一安心だ。

「ようやく起きたのね」

ふと俺の横から声が聞こえた。首を動かして横を見るとそこには・

「なぜお前が俺の聖域に入っている？」

「温かそうだったから」

紫が俺の横にいた。顔と顔の距離およそ三十センチメートル。

大人二人が同じ布団に入ったらさすがに狭いだろう。ダブルベッドじゃあるまいし。

まったく、俺の聖域（布団の中）にもぐりこむとは・・・つか何でもぐりこんだし。

「まあいろいろと聞きたいことがあるが、とりあえず出る」

「嫌よ。この布団に入っているととっても気持ちいいのよ」

そりゃそうだ。この布団は普通の布団ではない。この布団で寝るだけで  
疲れは取れ、霊力、魔力は回復し、さらに安眠効果もついている。  
気持ちがよくなるのもうなづける。なんたって俺が効果をつけたの  
だから。

「・・・俺どのくらい寝てた？」

「三日と二時間ってところかしら？」

「そんなに寝てたか、紅はどうした？」

「数時間前に起きたけど、まだ起き上がれる体じゃないのに店に行  
くってうるさいから、ね？」

「・・・無理やり寝かせたというわけか。まあ無事でよかった」

俺は布団の効果でもう全快してるし、後で治しに行くか。

しかし三日も店を休んでしまったわけか・・・客減ってないかな？

「大丈夫よ、あなた達は人間にとってヒーローなんだから。逆に増  
えるわよ」

「人の思考を読むな。そしてヒーローとはどういう意味だ？」

「あれほどの事件を隠し通せると思う？」

「・・・把握」

俺達はさしずめ人里を救った救世主メシアというところか。

しかし・・・いったいあの後「いったいあの後どうなったか、知りたい？」

「・・・知りたい」

あの龍の影の正体はなんなのか？俺はなぜ助かったのか？不可解なことばかりだ。

「鬼を片付けた後、私が隙間を通過して駆けつけたときにはすでに鬼子母神はいなかったわ

私が見たのは倒れていたあなたと、雲の上に見えた大きな龍の影だけ」

「それだ。俺はその龍の正体を知りたい。俺はおそらくそいつのおかげで今生きている」

「憶測でしか語れないけど・・・あれはおそらく“龍神”だと思うわ」

「龍神・・・だと？」

龍神といえば、人間、妖怪共に、生ける物全てが崇拜する神だ。

普段は海か天か雨の中に棲み、外の世界、冥界、天界、地獄など自由に体を移動できるという。

聲は天を割り、地上に雷雨をもたらす。体をうねらすと山が崩れ地震が起きる。

破壊と同時に幻想郷の創造神であり、雨も河も豊かな緑も全て龍神のおかげだという。

「まあ予想の範囲内だ」

お茶を創造して、ずずずと啜る。冷たさが全身に伝わり、潤っている。

「私も噂でしか聞いたことはなかったんだけど・・・まああくまで憶測よ」

「いや、あつてるだろう。鬼姫千百合は一度決めたことは曲げないって言うてたし、

鬼子母神を説得もしくは納得させられるとしたら、龍神くらいしかいないだろう」

しかし龍神ねえ・・・一度きちんと会ってみたいものだ。

「さて、あなたも起きたことだし、私はもう帰って寝るわ」

「あー、藍によろしく」

「わかったわ」

紫は無数の目玉が蠢くスキマを開き、中に入っていた。

・・・もう一眠りしようかな。

「しかし・・・負けてもうたなあ・・・」

鬼の四天王といえど、たった四人と闘っただけであそこまで疲労するとは・・・

あんな醜態は、もう晒したくない。もう、二度と負けたくはない。

力が・・・欲しい。



誰にも負けない力が、すべてを超越する力が、大事なものを・・・  
守るための力が。

「強く、ならなきゃな」

そう決意して、俺はもう一度、深い深い眠りについた。

その存在（後書き）

テラ厨二病

## 赤と青の服

鬼子母神事件の後、予想以上に精神力を消耗した。

村を歩けば人に取り囲まれ、料理を作ればジロジロ見られ、はつきり言っつてうざかった。

特にやばかったのが阿一の取材？と映姫の説教だった。

アレだけで俺の323846264338327950ある精神力の90%は削られた。

そして数カ月後、ようやくそれもおさまってきたある日、村長に呼び出された。

分身に店を任せ、俺達は村長の家へ向かった。

「何のようだと思う？紅」

「妖怪退治に一票」

「やっぱりそうかなあ・・・」

これまでも度々村長に呼び出され、妖怪を退治しろと言われる。いい加減面倒くさくて、断ろうかと思ったことは何回もあるが、結局断れないのだ。

少年移動中・・・

「で、用件は何ですか？」

「うむ、最近いたずら鬼のせいで怪我をする人が増えているのじゃ。退治してはくれんかのう」

またか・・・俺達は料亭だけで忙しいというのに、そんなに大事じゃない用事で

呼び出されるのだ。マジ勘弁して欲しい。俺達だって人間ですよ？

「嫌ならやめてもいいんじゃないよ？」

だがこの言葉で結局俺達は行くことになるのだ。村長のあの顔でこの台詞を言われると、  
断ったら負けた気がするのだ。なんでなんだろう？まあそういうことで・・・

「わかりましたよ、行けばいいんでしょう？」

え？村長の名前？たしか・・・マー・・・マー・・・なんだったっけ？

少年移動中・・・

俺達は今迷いの竹林というところにいる。名前の通り、迷いやすい竹林だ。

つか普通の人があんなところ歩いてたら、迷って餓死するか妖怪に食われるかだ。

まあ俺達は餓死しないし妖怪に食われるほどやわじやないから大丈夫だが。

「いたずら兎ねえ・・・思い当たる節はアイツだな」

「けどこの時代にアレはいないだろう」

「わかんね、最近内容忘れてきた。だって悠久の時を生きてるんだもん」

「まあ死なないからなあ。あ、兎見つけ」

紅の指差した方向を見ると、一匹の兎が逃げていくところだった。そういえば兎を飼ってる先生が中学校にいたなあ。どうでもいいけど。

「追っぞ」

「いや、今の一瞬で尻尾にナノサイズの発信機つけといたから追わないでいい」

俺の手元にあるモニター（今創った）を見ると、光が北東の方向に動いているのが分かる。

修行で筋肉痛なのに走るとかマジないわ。超回復できなくなるじゃん。

「よし、歩こうか」

「そだな」

少年移動中・・・

「え、発信機によると兎はこの中にいます」

「いや、まあ、うん、そうだろうな」

「言いたいことはわかる。何時の間に入ったんだろうな」

「これどっから見ても・・・」

「「永遠亭だよな」」

俺達の目の前にある建物、今いったとおり、永遠亭だ。だって看板に達筆で『永遠亭』って書かれてるもの。どっちが書いたのか知らんけど。

「まあとりあえず入ろうぜ」

「待て、顔を知られていないお前が入ったら不審者だと思われて串刺しにされるぞ」

「よし、じゃあお前が行け」

「任せろ」

俺は意気込んで扉に手をかけて開き「ビュッ」「うおっ!?!」「ぬあっ!?!?」

あぶねえ・・・咄嗟にマトリクスしてなかったら確実に心臓に突き刺さってた。

矢を避けたから後ろにいる紅に当たりかけたし。

「待て、俺だ永琳、撃つのをやめるんだ。さもなければ死人が出るぞ」

「へえ、誰が死ぬのかしら？」

「私だ」

「お前かよ！」

ちよっとした漫才をやっている間に、永琳が扉から出てきた。相変わらずの赤と青の服だ。

「久しぶりだな、八意永琳」

「お久しぶりね。そちらの方は？」

「どうも、那香川紅と申します。以後お見知りおきを」

「ご丁寧にどうも、私は八意永琳、よろしくね？」

「NEE・・・輝夜は？」

「姫様は部屋で寝ているわ」

「そうか、じゃあ・・・」

少女少女（といっても数億歳の永琳）雑談中・・・

気がついたら日は沈みかけていた。おそらく三時間ほど雑談していただろう。

まったく、どこぞのおばちゃんじゃあるまいし、もう少し早く帰る予定だったのに。

「まあいいや、じゃあ兎が悪さしないように言っておいてくれよ」

「わかったわ」

「じゃあな、たまには飯食いに来いよ」

そういつて俺達はスキマの中に消えた。そしたら・・・

「あら、どうしたの？」

同じタイミングで紫がスキマの中に入ってきた。

こんな偶然があっという間いいものか。つか俺が開いているスキマって紫と同じ奴だったのか。

「ちょっとクエスト成功させてきた」

「まああながち間違っではないが・・・」

「?どうでもいいけど、ちょうどあなた達のところに行こうと思っ  
ていたところなのよ」

「飯?」



「それもあるけど、漬物を分けてもらおうかと思って」

「だってさ、紅」

「全然いいよー。じゃあとりあえず家に戻ろうぜ」

この後、紫が欲を出して漬物を全部持つていこうとしたが、その前に紅が時間を止めて

糠の中に砂糖をぶちまけてすっかりかき混ぜてから持つて行かせたのは一生の思い出である。

赤と青の服（後書き）

とりま蓬萊コンビ幻想入り。  
次回はあの三人組だよー。

## ヴァイオリン

鬼子母神事件から、約百年の月日が流れた。時が経つのは本当に早い。

悠久の時を生きる俺たちにとって、一年なんかはまさに一瞬なのだ。常連だった客はとつくとくに死に、今ではその孫が常連になっている。この百年でお金もたまった。このまえ通帳を見たら9桁か10桁くらいあった。

人里に住んでいる人たちは俺たちが能力持ちだということはどうに知っている。

だからこそ俺達は百年もの間ずっと料亭を続けていられるのだ。百年間もの間で、人里も随分大きくなった。鬼子母神事件以来防衛設備も

整えるようになったし、今ではすでに町と化している。

「散歩してくる」

「t r」

昼も過ぎ、今まで満員だった店も少しずつ席が開いてきた。

紅はすでに午前中に休憩を挟んでいるので、次は俺の休憩時間だ。いつもは休憩時間は昼飯を食べたり、能力の練習をしたりして過ごすのだが、

今日は真夏にしては過ごしやすい気温なので、外に出かけることにしたのだ。

「あゝ、気持ちいい」

外に出ると、厨房とは比べ物にならない澄んだ空気が肺に入ってくる。

定期的に（お菓子を買いに）行く外の世界の空気は濁っている。長年幻想郷で暮らしていると、その違いがよりよく分かる。

「さて、どこに行こうか？」

出かけるといっても、行く場所を決めているわけではない。ただ単に外に出て美味しい空気を吸いたかっただけなのだ。

「・・・幽香のどこに行くか」

この時期はゆうかりんランドにはたくさん向日葵が咲き乱れているはずだ。

手土産に珍しい花の種でも持っていけば、幽香も喜ぶだろう。

なんだかんだいっても、自分が育てた花を褒められるのはうれしいようだしな。

俺は人里の端まで歩いてくると、スツと飛び上がる。頬を撫でる風が妙に心地よい。

自転車くらのスピードを保ちながら、俺は向日葵畑に向かう・・・予定だったが、

妖忌から俺特製の味噌を持ってきてくれと頼まれていたのを思い出した。

俺は能力で紅に連絡を入れる。

『紅、俺のところに特製味噌一壺送って』

『あいよ。行くぞー。3、2、1、ほい』

俺の目の前に味噌がたっぷり入った壺が送られてきた。重力により地面に落ちていく壺をキャッチして、中身を確認する。品質にも問題ないようだ。これを妖忌に届けてから向日葵畑に行くとしよう。

俺は自転車くらいのスピードを保ちながら、白玉楼に向かった。

少年飛行中・・・

「うむ、確かに受け賜った、いつもすまんの」

「いいよいよ、どうせ大量に創ってあるし、お安い御用だ。」

「孫がこの味噌で作った味噌汁が好きでのお」

「妖夢だったか？今度会わせてくれよ」

妖忌の孫である妖夢が生まれたのは、今から約三十年前。

しかしその朗報を俺や妖忌が知ったのは二年前。ちよつとしたお茶会の最中だった。

紫が突然そのことを伝えたのだ。三十年前から知っていたのだが、忘れていたそうなの。

それを聞いた妖忌は一度故郷の村に戻り、孫を見てきたらしい。以後、妖忌はたまに里帰りし、孫を愛でているのだ。

「ほいだら、俺はそろそろ行くわ、幽々子によろしく」

「また来るがよい」

俺は再び飛んで、冥界の入り口まで降りていく。この時代、まだ幽明結界なんてない。普通に冥界と現世がつながっているのだ。

わざわざ上を飛び越える必要も無く、大変便利なのだが幽霊が現世に続出する。

そのうち紫が結界を張るだろう。

冥界から現世に戻り、向日葵畑に向かおうとしたとき、下のほうから音が聞こえた。

ヴァイオリンの音だ。聞いていくうちに、それが『幽霊楽団 Phantom Ensemble』  
だということがわかった。かろうじてだが。

なにせ演奏が下手なのだ。ところどころ音が途切れるし、外すし、リズムも違う。

その酷い音色に耐え切れなくなって、俺は地面に降り立った。

そこにいたのは黒い服に身を包んだ少女、帽子の上には月の形をしたアクセサリが着いている。

後姿を見ただけで分かる。この少女は、“ルナサ・プリズムリバー”、

プリズムリバー三兄弟の長女で、『手足を使わずに楽器を演奏する程度の能力』と、

『鬱の音を演奏する程度の能力』を持っている。性格はちょっと暗い。

「うう、何回やっても上手くできないよお」

ルナサはヴァイオリンを目の前に浮かせて演奏の練習をしているよ

うなのだが、  
どうも上手くいつてないらしい。おそらく始めたばかりなのだろう。  
原作より千年も前のことだし、まだヴァイオリンが下手でもおかしくはない。

結構な距離まで近づいているが、練習に集中しているのか、気がつきもしない。

そのうち俺は下手糞な演奏にイライラして、つい口を挟んでしまった。

「おい」

「ひゃあっ!!!?!」

・・・予想以上に驚かれた。お兄さんべつにコワイヒトじゃないヨ？  
ルナサはビクビクしながらこちらを見ている。その姿にちょっと可愛いと思ったのはry

「失礼、驚かせてしまったな。俺の名前は八神零、人里で料亭を経営している。君は？」

「えっ！あつ、る、ルナサ・プリズムリバーです・・・」

ルナサこんなキャラだったっけか？すごく恥ずかしがりやっぽいんだが。

まあいまそれはいいとして・・・

「じゃあルナサ、さっきの曲もう一度演奏してみてくださいるか？」

「えっ、でも・・・」

「いいから」

ルナサはちよつと恥ずかしそうに、ヴァイオリンを構える。そして演奏するのだが・・・やはり下手だ。

「ふむ・・・ちよつとヴァイオリンを貸してくれるか？」

ルナサはちよつと躊躇ったが、普通に貸してくれた。いい子だが騙されやすそうだな。

俺はルナサのヴァイオリンを構え、どこでどの音がなるか覚えた後、優雅に弾く。

「・・・すごい」

楽器なんてメロディさえ覚えてしまえば、あとはその通り弾くだけだ。

この曲は幸い何百回と聴いた音楽なので、ヴァイオリンの音さえ調節すれば簡単に弾ける。

「楽器つてのは、それを弾く人によって印象が大分変わるもんだ。上手くなれば感情を

入れて弾くこともできるが、まずはメロディどおり弾くことが一番大事。」

とりあえず、最初は手で引けるようになるまで練習して、なれたら浮かせてやるといい」



その後も少し指導してやると、ルナサはあっという間に上手くなってきた。  
結果として俺も楽しかったのだが、幽香のところにいけなかった上に、  
時間を三時間ほど過ぎてしまったので、紅に起こられ、残りの時間を一人でやらされた。

## ヴァイオリン（後書き）

この小説のレビューを募集しています。

もし書いてくださる方がいれば、メッセージをください。

これからも張り切って書いていきますので、よろしくお願いします。

## 番外編 異次元の幻想郷（前書き）

今回は黒羽さんとのクロス作品となっております。

無論許可は取ってますので通報はしないでください。

なお、本編には一切関わらない作品ですので、勘違いなさらぬよう。

## 番外編 異次元の幻想郷

「魔理沙に会いたい」

「いきなり何言ってるんだ」

今日は店の定休日、なので俺達は家でゴロゴロしている。

「だってよう、あと千年近く経たないと主人公生まれないんだぜ？  
待ちきれん」

「まあその気持ちは分かるが・・・仕方ないことだろう」

そんなことわかってる。俺たちがたとえ未来に行ったとしても、同じ次元に

同一人物は存在できない。とたんに時空に乱れが生じ、最悪世界は壊れる。

さすがにそんなことにはしたくないが・・・会いたいなあ、主人公達に。

俺の一番好きなキャラは魔理沙だ。その下にフランとか色々が続くが、  
勤勉家で努力家、せっかく憶えた魔法のせいで家から追い出され、  
天才として生まれてきた霊夢には追いつけず、なんとも悲しいことか。

無論霊夢も好きだが、やはり俺の中で魔理沙が一番なのだ。

しかし千年も待たないと会えない。こんな悲しいことが許されるだろうか？

けど同じ次元に同一人物は・・・ん？次元？

「紅、出かける用意だ」

「何だいきなり。幽香のところなら御免だぞ」

「未来に飛ぶ」

「はあ？お前も分かってるだろ。同じ次元に同一人物は・・・OK、行こう」

どうやら察してくれたようだ。以心伝心とはこのことか。

俺はいつものものの着物に着替え、すぐにでも出れる用意をする。

「準備完了だ、いつでもいけるぞ」

横を見ると、いつの間にか着替え終わった紅が立っている。

わざわざ着替えることだけに時間を止めたのだろう。そんなに急がなくてもいいのに。

「じゃあちよつと待ってる」

俺たちが思いついたこと、それは違う次元に行くことだ。

正確には俺たちがいない次元だ。それで居て歴史がほぼ完全に再現されている次元。

未来は無数に存在する。ならば一つくらいはそんな次元があっても不思議ではない。

いくら俺が不可能を可能にできるからって、何億とある針の山から、数少ない正解の針を見つけるのは多少時間がかかる、が

「……見つけた！」

その次元は意外と楽に見つかった。

これも日々の行いの賜物だろう。善行を積み重ねてきたおかげだ（笑）

「詳細は？」

「簡単に言うと、俺たちが鬼に負けた世界の一つ。その後は紫たちが何とか鬼を

撃退した世界だな。時代的には風神録の後ってところか。他に聞きたいことは？」

「ない」

「じゃあ移動するが、その前にっつと」

俺は自分と紅に特殊な結界を張る。

「何をした？」

「認識障害の結界を張った。千年前に死んだ事を知っている者に会ったら

色々と面倒くさいからな。まあどうせばらす事にはなると思っけど。

ちなみに紫クラスでも見破ることは『不可能』にしてあるから安心しろ」

「なるへそ」

「後この結界は俺たちの事を知っている奴に対してしか発動しないから」

「了解」

「よし、じゃあ行くぞ。『次元固定、時代固定、座標固定、時間固定、転移』」

次の瞬間景色がねじれ、俺達はその次元から消え去った。

「着いた」

俺達が現れたのは魔法の森の奥地、再思の道の近くだ。ちなみに再思の道を抜けると無縁塚となっている。いわゆる三途の川だ。

「うーん、特に変わったとかわからないな」

「紅、飛べば分かる」

すっと飛び立ってみれば、人里は見違えるほどに大きくなっていた。千年前とは比べ物にならない。おそらく二倍以上になっているだろう。

「おお、でかくなったな」

「まあ俺たちの料亭はもうないと思うがな」

まあこの次元に俺達はいないわけだし。千年も残っているはずがない。

ふと考えてみると紫とかにとっては千年前に死んだ者がなぜか現代にいるってわけか・・・中々面白そうだな。

「どうするんだ。博麗神社に行くのか？」

「いや、お楽しみは最後に取っておこう。まずは香霖堂か紅魔館か・

・・・」

「俺としては紅魔館のルートを所望する」

「おk、じゃあ行こうか」

少年移動中・・・

紅魔館は霧の湖のど真ん中に位置している。といっても一応陸は続いている。

言うなれば桜島ってところだ。あれ？桜島って離れてたっけ？まあいいや。

「にしても・・・」



「ああ、すごく・・・」

「「紅いな」」

紅魔館というだけあって、まっかつかだ。多分中も紅いのだろう。さすがにセンスを疑う。吸血鬼つてのは全員紅が好きなのか？

門番の美鈴も紅い・・・

「寝てるな」

「ああ、いつもどおりだな」

俺達は紅魔館の門の前まで来たわけだが、門番は見事に寝ている。しかも立ったまま眼を開けて寝ているのだ。どんな神経をしているのだろう。

このまま素通りして行くべきか、それとも起こしてきちんと通してもらうべきか。

「面倒くさい、素通りに一票」

「同じく。行くぞ」

俺達は門番を素通りして紅魔館に入る。

勝手に入る俺達が悪いんじゃない。サボってる門番が悪いんだ。どうせ後でメイド長に針山にされるだろう。哀れな門番乙。

中に入ってみると、まあなんとという紅色。眼がチカチカしてくる。

紅は名前の通り紅色は好きだが、さすがにここまで紅いと厳しいよ。うだ。

だって壁からシャンデリアに至るまで全部紅なんだもん。さすが紅魔館。

「つか何の目的で紅魔館に来たんだ？」

「愚問だな、妹様を愛でるために決まっているだろう」

「……つくづく変態だな」

「変態は……褒め言葉だ」

そんな会話をしながら歩いているわけだが、見事に誰も居ない。時刻はまだ昼だし、おぜうさまがまだ寝ているのは分かるが、せめて妖精メイドくらいいてもいいだろう。

「紅……呼ぶか」

俺の言葉の意味を一瞬で理解し、紅が慌てる。

「待て！先にリレイズかけてくれ」

「大丈夫だ、なんとかなる」

「馬鹿！やめろ！」

紅の制止を無視して、俺は空気を肺にためる。そして限界までたまった空気を、喉を通して一気に発散させる。

「PAD長~~~~~!!!」

刹那、俺たちの後ろに一人のメイドが現れ、そのメイドによって放たれた

ナイフが、俺たちの心臓に正確に突き刺さった。

「あぶね〜、死ぬところだったわ」

「だからやめろって言ったんだ」

「!?!?」

ハズだった。

咲夜さん程度の能力で俺の時間を止められるわけがない。

紅も同様、いわゆる年季が違うのだ。能力の使い方はこっちの方が何枚も上手。

つまり逆に俺達が咲夜さんの時間を止めて後ろに移動したというわけだ。

ナイフはそのうち勢いを失って、床に落ちた。

「あなた達、何者かしら？」

「とりあえず敵意はない。その物騒なものをしまってもらいたい」

いつの間にか咲夜さんの手には四本のナイフが握られている。

「悪いけど、勝手に屋敷に入ってくるものを信用する気はないわ」

「勝手につつつか門番が寝てたから勝手に入る以外の方法が無かったんだが」

そういつと咲夜さんの動きがピタリと止まった。その口から

「また中国は…あとでお仕置が必要ね」と聞こえたのは気のせいだと思いたい。

とりあえずこちらの用件を言おうとしたその時だった。

「何事だ、咲夜」

いつの間にか俺達の首にナイフがあてられた。金属の冷たさが肌に伝わり、

ちよつと肌寒くなったが、別に我慢できないわけではない。

「ほう・・・気取られずに俺達の後ろを取るとは、たいしたものだ」

「それはどうも」

実際のところ、別に気がついていなかったわけではない。

ただ後ろの人間との距離があまりにも遠かったから警戒しなかっただけだ。

「零、この状況は面倒くさいんだが」

紅がのんきにあくびをかましている。全くピンチという気がしてないようだ。

まあ確かにどうとでもなるが・・・それでも少しは警戒しろよ。

「咲夜、こいつらは何者だ？」

「侵入者よ」

「進入したくてしたんじゃない。進入してしまうものがナイト」

このままふざけていたら殺されてしまうことは確定的に明らか。  
しかも首筋にあてられているナイフのせいで俺の寿命がストレスで  
マツハなんだが・・・

つか俺の後ろにいるこいつは誰だ？紅魔館に男キャラがいるなんて  
聞いたことがない。

よくある二次創作的な設定で紅魔館の執事になったキャラか？おk  
把握。

「この状況でよくふざけられるな」

俺の後ろにいる男が怖そうな声で言う。

「殺気を発していない奴にどうやって怯えろというんだ」

俺の後ろの男は首にナイフを当てているものの、殺気は微塵にも発  
していない。

まあ少しでも殺気があつたらキュツとしてボーンしていたが。

「とりあえず敵意はない。そのナイフを放してくれるか？」

そういうと少し迷った拳銃ナイフを放してくれた。

人間話せば分かってくれるもんだね。分からなかったら実力行使し  
てたけど。

「何の用でここに来た」

後ろを振り返ると、黒い燕尾服に身を包んだ男イケメンが立っていた。

身長はさすがに俺よりは低いが、結構高い方だ。

黒髪黒目でいかにもセバス ヤンっぱいが、残念、顔はそこまで似ていない。

「我が名は八神零、紅魔館の主に会うべく参上さんじょうかまつした」

俺は紅にアイコンタクトを送る。紅はこくりと頷いた。

「我が名は那香川紅、同じく紅魔館の主に会うべく参上した」

異なる次元に来ることについて深くは考えてなかったが、何か楽しいことが起こりそうだ。

番外編 異次元の幻想郷（後書き）

後何話か続きます、多分。

## 番外編 執事とメイドとおぜうさま

紅魔館、謁見の間しやくけんま

いわずと知れたカリスマおぜうさまが、今俺の前に鎮座している。大き目の椅子に座って足を組み、手の甲で頬杖をついている姿はまさにレミリア！

この姿が一変して、うー 状態になったらもう死んでもいいね、うん。

「お嬢様、客人をお連れしました」

「下がっていいわ」

俺と紅は同時に前に出て、レミリアをじっと見た。口元から覗く吸血鬼の八重歯が、妙に可愛らしい。

「紅魔館の主、レミリア・スカーレットか・・・意外に幼いな」

とりあえず、見たまんまのことを言った。ご機嫌麗しゅうとか言っても少しでも印象を良くすることも考えたが、こっちの方が面白くなりそうだった。

「失礼な人間ね、今ここで殺してもいいのよ？」

その言葉と同時に膨大な殺気が俺達にぶち当てられる。

幼女からとてつもない威圧感が出てくるのは、とてもシリアスだった。



「すまんすまん、怒らせるつもりは無かったんだ、許せ」

まあ格上の相手と戦い続けてきた俺達にとっては全く効果をなさな  
いわけで、

俺は笑ってレミリアに言葉を返した。

「紅魔館に用があつてね、すぐにでも終わらせなくちゃいけない用  
事だから、

手っ取り早く紅魔館の主に言おうと思ったわけ、で、いいかな？」

俺達が微動だにしないことに一瞬驚いたような表情を見せたレミリ  
アだが、

すぐに獲物を狩る目つきに戻り、殺気もおさめた。

「言ってみなさい」

「では失礼して、俺達の用事は・・・」

俺は紅と精神を同化させ、俺の思考を紅に伝える。

(紅、ちょっと危ないことするから死なないようにしておけ)

(お前はいつも俺を命の危険に晒すよな、で、何をするつもりなん  
だ?)

(まあ見てれば分かる。じゃあ警戒しておけよ)

そこで同化を解除し、肺に空気をためて扉の外にいる咲夜さんと男  
にも

聞こえるような大きな声で叫んだ。

「貴様の命を貰い受けることだア！」

その瞬間俺の首が宙を舞い、万有引力の法則にしたがって床に転がった。

首からは血がどくどくと出て、紅い床をさらに紅く染め上げる。

「ちょっとストップ、俺はそんなつもりないから殺すのは勘弁して

紅の声が聞こえたから、あいつは生きているのだろう。

やべ、段々と意識が・・・遠・・・の・・・く・・・

いや、こんなところで死ぬわけないだろう、普通に考えて。

「普通首切るか、俺じゃなかったら確実に死んでるだろこれ」

首がない体で起き上がり、顔を持ち上げて切り株みたいになってる首の上に置く。

痛覚を消してなかったら発狂してるなと思いつつ能力でくつつけて血を止めたら元通り。

「阿呆が、お前が油断したのが悪い」

「油断はしてねえよ。ただこの展開にしたかったからかわさなかつただけだ」

「余計にアホだな。殺されたいとかどんなマゾヒストだよ」

普通に会話している俺達を見て、咲夜さん呆然。男も呆然。  
おぜうさまはカリスマブレイク。ぽかーんと口をあけた姿が俺の心をくすぐる（笑）  
わざわざ首を切られた甲斐があったZ E

「あー、さっきの言葉は冗談だからもう首を切るのはやめてね、マジで。」

何度もやられるとそのうち貧血で倒れるから。あと俺は普通の人間だぞ」

「どこに首を切って死なない普通の人間がいるのよ・・・」

俺の言葉で一番最初に我に返った咲夜さんが肩を落として言った。  
だから俺はこう言っちゃった。

「ここにいるだろう。学習能力のないやつめ」

シュカツ！という音がした次の瞬間、俺の頭には一本のナイフ刺さって・・・

「だから死なないって言ってるやんけ」

ナイフを抜いて再度血を止める。これで二回は死んでしまったわけだ。

某錬漫画で「く……っつそがあ！！三回死んだぞ！！」とか言ってる

嫉妬とかいう名前の奴の奴の気持ちがあった気がした。  
エンライナー

少年少女落ち着き中・・・

「もう話していいか？」

「次冗談を言ったら細切れになるまで刻むからな」

男がナイフを構えて言う。さすがに刻まれたら地の補充はしなきゃな。

「あー、冗談みたいな話になるが、俺達は違う次元の幻想郷を住んだ」

次の瞬間俺の首にはナイフが当てられ・・・

「もういいっちゅうねん！冗談じゃないって言ってるだろ！」

男は仕方ないという風な表情をしてナイフを放した。

こいつ後でゴキブリホイホイ（人間用）に嵌めてやるうか？

「まあいい、話の続きをするぞ」

少年説明中・・・

「つまりあなた達は違う時限の幻想郷、それも千年前から来たって訳ね」

俺が説明したことを咲夜さんが要約して反復した。最初は信じてく

れなかったが、  
俺の能力を説明すると疑問がなくなったようだ。分かってくれたよ  
かったなあ。

「そゆこと、この次元では俺達は死んでいるからな。都合がよかつた」

「で、何の用事でわざわざ別次元に来たんだ？」

「暇つぶし」

「俺は付き添いだ」

「」「」……「」「」

俺の言葉に紅魔館組沈黙。本当のことなただけどなあ。

「で、ちょっとここに滞在しようかと思ってるんだけど、泊めてくれない？」

俺のベリーグットな考えに紅が批判の声を上げる。

「おい、日帰りじゃなかったのか？」

「いいじゃん、どうせ同じ時間に戻るんだし」

それにここに泊まったら面白いことが起きる気がするって俺の本能が言ってるし。

なにより妹様にまだ会ってないし、この男の正体も気になるしな。

「……どうしますかお嬢様？」

「……どうするんだレミリア？」

男と咲夜さんがレミリアに視線を集中させる。

レミリアはじっと目を瞑っていたが、やがて言葉を発した。

「いいわ、泊めてあげましょう」

「おー、話が分かるね。それじゃあ自己紹介といこうか。俺は八神零。

料亭を営んでるから、料理は上手いぜ。ここにいる間は手伝おう。  
次」

「俺是那香川紅。以下同文。次」

「俺は黒羽刀弥、刀弥でいい。紅魔館の執事長をやっている」

ほう、この二次創作キャラクターは刀弥というのか……  
つかこいつが二次創作キャラなら俺たちも二次創作だよな……  
なんか嫌だな。

「私は十六夜咲夜と申します。紅魔館のメイド長をやらせてもらっています」

メイド長？PAD長の間違いだろう（笑）

「私はレミリア・スカーレット。紅魔館の主よ」

あゝ、そこは、れみりあうゝとか言うべきだろ。

「じゃあ挨拶のついでに乾杯と行きますか」

俺の能力で全員の手飲み物を出す。創造って本当に便利。金を創造すれば働かなくてもいいしね、そんなことしないけど。

「おい零」

「なんだ？」

「何で俺だけこれなんだ？」

俺と刀弥と咲夜には紅茶、レミリアにはB型の栄養満点血液。

紅の手には北海道限定販売のペプシAZ KIがペットボトルごと握られている。

「何か問題でも？」

「・・・いや、もういいや」

この後頭にペプシAZ KIをかけられて紅魔館を半壊させる大乱闘が起きたのはいい思い出である。ちなみに勝者は俺だよ。

俺たち男グループは、シヨウルームに向かっている。

やはり執事なら燕尾服でしょう！ということでも貸してもらおうのだ。だってセバスチャ カッコいいじゃん。あの台詞とか超痺れる。創れば一発だけど、細部の構造を知らないとうまく創れないしね。

「零、どれくらい滞在するつもりなんだ？」

俺の横で歩いている男、紅が聞いてきた。

「まだ決めてない。長くても一ヶ月、まあ精々一週間だと考えてるが。」

紅が望むなら一年くらい滞在しても一向に構わないが？」

「・・・ずいぶんチートな能力だな」

俺たちの会話を聞いて、刀弥が突っ込みを入れた。

まあ確かに俺の能力は半端ないが、実際あんまし使っていないけどな。

「まあな、そういうお前はどんな能力を持っているんだ？」

「『過程と結果を操る程度の能力』と『過程をすっ飛ばして結果を得る程度の能力』だ」

「お、十分チートだ」



過程と結果を操る・・・天魔に似ているな。まああつちはほとんど能力を使わないけど。使ってたら俺は今頃裏世界でひっそり幕を閉じているだろう。

「まあ紅魔館で働くならそれくらいはないと駄目だろうな」

「ああ、最初に来たときはフランに殺されかけたが・・・逆に殺しそうになった」

「吸血鬼とはいえ幼女に手をあげるとか・・・お前の血は何色だ？」

「赤だ」

「うん、知ってる」

そんな会話をしているうちにシヨウルームに入った。中に入ると、所狭しと箆笥や服が並べられている。その中に猫耳とか尻尾とかが混ざっていた気がするが、気のせいだろう。気のせいだと思いたい。

「これだ」

刀弥が指差す先には夢にまで見た燕尾服が数着並んでいる。

「ところで刀弥、俺達はどんな仕事をすればいい？」

「基本的に掃除だ。紅魔館は広いからな。それより早く着ろ」

「そうか、じゃあ振り向いてみる」

刀弥が振り返ると、そこには燕尾服を着た俺と紅が立っていた。なんのことはない。ただ時間を止めて服を着ただけだ。その証拠に燕尾服が二着ほど消えている。

「・・・そんなことに能力を使うとは」

「俺は基本的にこういうことにしか能力を使わないぞ？ 精々食材を創ったりとか、

素の力じゃ絶対に勝てない敵が現れたときくらいだな」

まあ素の力で勝てない敵なんてほとんどいないけど。

精々幽香とか幽香とかドメスティックアルティメットクリーチャーとか。

「素の力で妖怪に勝てるのか？」

「みくびるな、俺たちの本気の攻撃を喰らったら文字通り消し飛ばすぞ。

長年の、つっても二百年くらいだが、修行の成果だな。今では音より早く動ける」

「人外ここに極まり、だな」

「一応体も心も人だよ。まあ身体能力は人間を超えているがな」

だって超音速とかソニックブームがやばいからね。能力で押さえる以外に方法ないもん。

「まあいい、着替えたのなら直ちに掃除に取り掛かってくれ」

「了解」

刀弥は扉を開けて去っていった。あいつも掃除をしにいったのだろう。

何で幻想郷にきたのか聞いておけばよかったかな？興味がある。

「さて・・・どうしようか？」

「どうするもなにも、掃除するしかないんじゃないか？」

「そうだな・・・じゃあ俺は左から行く。紅は右から行ってくれ」

「把握した。じゃあな」

俺達は部屋を出て分かれる。一緒にいても特に意味はないし、別行動の方が効率がいいからな。一人の方が動きやすいし。

「さあ、チャツチャとやっていきますか」

「ハイ終了、次の部屋」

俺は一つの部屋の掃除に五秒もかけずに終わらせていく。

まず能力でごみを集めて、外に転移させる。その後洗浄効果のある水で

隅々まで洗い流し、乾燥させるといった手順だ。

「はい次」

そんな感じでどんどん掃除していくと、前方から何かが走ってくるのが見えた。

あの独特の紅い服に七色に輝く奇妙な羽、あれは……間違いない！

「刀弥——！」

「うわっち」

いわずと知れた最終鬼畜妹様だった。ものすごいスピードで俺の胸に飛び込んできたわけだが、叫んでいたのは違う名前。おそらく俺と刀弥を

見間違えたのだろう。しかしアイツはいつもこんなタックルを受けているのだろうか？

普通の人間が耐えられるタックルではない。少なくとも数十分は悶絶するだろう。

まあ俺の鍛え抜かれた腹筋を貫けるものではなかった。ちよつと仰け反ったけど。

「お嬢様、私は執事長ではございませんよ」

その言葉に反応してフランことフランドールは顔を上げた。

その穢れを知らない純粹無垢な瞳に俺はちよつと浄化されそうになった。

紫家に来たばかりの藍のようだ……超癒される。

「あなたは……誰？」

予想以上に可愛い声に鼻から忠誠心が出てくるところだったがあぐつと堪える。

俺はとびつきりの営業スマイルでフランに話しかけた。

「今日付けで紅魔館の執事になりました、八神零と申します」

そういつて俺は膝をつき、頭を垂れる。気分はまさに黒執事である。そのまま顔を上げるとフランはにっこり笑って・・・

カプツ

俺の首に噛み付いた。

チューチューと俺の血がドンドン吸われ、貧血になっていく。しかもこれ結構痛い。注射器で血を取られるより数倍痛い。まあ修行でこれよりもずっと痛い事は経験しているので我慢できないわけではないが。

「おいひい」

それはいいことだが、しかしこの状況、どうしたものか。

フランを無下に突き放すことなんてできないし、このまま吸われるのもアレだし。

まあ腹が減ってるのなら仕方がない。とりあえず血を補充しながらじっとしている。

すると前から刀弥が走ってくるのが見えた。

天の助けかと思いながら、早く外してくれとジェスチャーする。

「フラン、その辺でやめておけ」

「んむ？ほうあ？（刀弥？）」

「そうだ、早くやめないと」

ぞ  
」

刀弥がフランの耳元で何かを囁いた瞬間、俺の首が解放された。そして俺は刀弥の胸倉を掴んで持ち上げた。

「貴様……今の言葉はどういうことだ！」

いくら囁いたとはいえ、聴覚すら人間を超えている俺が聞こえない道理はない。

こいつは確かに「夜の相手はしない」と言った。

「言葉通りの意味だ」

その言葉で俺は泣き崩れた。

「嗚呼、俺の妹様が、幼女が、まさか、いやああああ！！」「うるさい」「ぐべっ！！」

まさかここまで歴史が崩されるとは……東方好きな俺にとってこれは

さすがに許しがたい事態だ。俺達が死んだ結果がこれだよ？

「・・・まあ俺たちの次元じゃないだけいいか」

しかしこんな時でもネガ発言をしないのが俺クオリティ。  
どうせ俺たちには関係ないからいいじゃないかと思ったりする。

「ときにロリコン、レミアアの許しは取れているのか？」

「誰がロリコンだ。ちなみにレミアアも婚約者だ」

「・・・マジで俺の次元じゃなくてよかった（汗）」

「ちなみに咲夜と紫も婚約者だ」

「紫まで・・・」

あの紫が婚約者とはな・・・友人としてうれしいことではあるが、  
やはりさびしくもあるな。しかし結婚・・・考えられないな。

「そだ、紫で思い出したけど、紫その他昔からいたやつらには俺たち  
ちのこと

認識できないようになってるからそこんとこ話し合わせるように  
しておいてくれ。

まあいずれ何らかの形でばらす予定だけど」

「なら最初からそんなことしなければいい」

「甘いな刀弥、蜂蜜一瓶に温めた牛乳を一滴入れたホットミルクよ  
り甘いぞ。」

そうしたほうが面白いことになる気がするからに決まっているだ  
ろっつっ。」

「それはホットミルクじゃなくてほとんど蜂蜜だと思つのは俺だけか？」

「見事な突っ込みだと関心はするがどこもおかしくはない」

「・・・お前と話しているとペースが狂う」

「よく言われる」

実際俺についてこれる奴なんて紅の他いないからな。

あんなに俺のボケに的確に突っ込んでくれる奴なんてほかにいない。だからアイツは俺の親友なんだ。

「・・・そろそろ夕食の時間だ、料理を作りに行ってくれ」

「了解した執事長。だがその前にやることがある」

「なんだ？」

俺は刀弥の前に立ち、意表をついておいて横にいるフランを抱きしめた。

しかし次の瞬間には刀弥の蹴りが腹に決まり、俺は吹き飛んだ。

「おおひでえ、いきなり蹴り飛ばすことはないじゃない」

何事もなかったかのように立ち上がる。普通の人間よりは力強かったが、

やはり人間の域を超えていないけりなどおれには効かなかった。



「俺の婚約者に手を出すな、死ぬぞ」

「馬鹿野郎！ 幼女を抱いて殺されるなら本望だッ！」

「言っても分からない奴は逝け、近代兵器『M134ミニガン』毎分4000発の鉄の雨」

どこからか刀弥の手に見たこともない銃が現れ、俺に向かって発射された。

その量、まさに弾幕。普通なら避けられない。普通なら。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

俺に当たると思われる弾丸をすべて掴み、捨てる。

俺の足元にはドンドン弾丸がつみあがっていき、俺の足首まで埋まった。

そこら辺で俺の指が攣りかけてきた。ついでに痙攣してきた。

完全に動かなくなる前に俺もスperlカードを発動させた。

「主盾『謙虚なナイト』」

突如俺の前に白い鎧を装備し、凸凹したソードを持ったナイトが現れ、打ち出された弾幕を完璧に防ぎきった後、とんずらを使って帰っていった。

「・・・やはりナイトは格が違った」

「これでも死なないか、なら次はこれだ『次元の刃』」

キン！と甲高い音が響き、俺の体に一本の線が入った。  
キキン！と音がしてさらに二本の線が入った。

音が鳴るたびに俺の体には線が入り、やがて体は線で埋め尽くされた。

このスペルカードのえごい効果を瞬時に理解した俺は、咄嗟に能力を使う。

俺の体に入った線は一本ずつ消えていき、やがて元の体に戻った。

「……これ絶対イビルメタル二次元の刃のパクリだろ、汚いなさすが執事長汚い」

「……なにをした」

「これってアレだべ？切った結果のみを作り出すとかいうえごいやつだろ？」

俺は逆に切れてないという結果を作り出して相殺しただけだ。テラチートW」

その後刀弥が霊力切れで倒れそうになってそこにレミアとか咲夜さんとか来て

なんか大変なことになりかけたが、それは別の話である。

番外編 白黒魔法少女

俺と紅＋紅魔館メンバー（中国を除く）は今刀弥の部屋にいる。

『次元の刃』とかいう俺以外にやったら確実に死ぬ技を使ったせいで、

霊力切れを起こして倒れたので俺がここに連れてきたって訳だ。

まあ紅魔館メンバーはここにいるというより……

「……なんでこんなことになってるんだ？」

「そりゃあれだろ、皆お前を愛してくれてるんだろう」

刀弥にくっついてるだけなんだけどな。

レミリアが右腕、フランが左腕にくっついて寝ていて、  
咲夜さんは膝枕したまま舟を漕いでいる。

……妬ましい

「ちなみにもう朝だからな？」

俺が椅子に腰掛けながら言う。

「そんなに寝ていたのか……」

「いや……一回起きたことには起きたんだが……寝起きで覚醒

していない

状態で、両隣から血を吸われて再び永い眠りについた」

「アレはやばかった。どっちかという吸われる量よりこぼれる量の方が

多いもんだから真つ白なシートがどんどん紅く染まっていった。

「感謝しろよ、俺がいなかったら血がなくなってたところだ」

「むしろお前が原因だろう」「」

前にいる刀弥と後ろにいる紅からの確なツツコミが入られる。

「そんなことより次元切り裂いただけで眠るとかお前の能力燃費悪すぎだろ」

「逃げたな」

「ああ、話をそらしたな」

ぐっ！可愛げのない奴らめ。

「まあいい、そんなお前のためにいい物をやろう」

俺は懐から試験管のような物に入った液体を一本出す。

「なんだそれは？」

「簡単に言くと俺の霊力を凝縮し液体化させた物だ。三滴も飲めば全回復する。」



ろだ。

ゾンビになった刀弥を想像して一人気持ち悪くなっていると、

ドゴォーン！

という音がどこからか聞こえてきた。

「！何事？」

あまりの轟音にレミリア達も起きたようだ。

フランはまだ目を擦って眠たそうにしているが・・・癒されるなあ。

「おそらく、魔理沙だろう」

ようやく解放された刀弥が肩を回して言った。

「マジで！？よっしゃ！大チャンス！行くぞ紅」

「慌てるな、すでに結界は張った」

「いい判断だ！待ってる白黒魔法使い！いいやつっっっほう！」

俺と紅は亜音速で部屋を飛び出す。

目指すは魔理沙が襲撃してきた場所、大図書館。

そこには『動かない大図書館』ことパチュリー・ノーレッジがいる。いや普通図書館は動かないだろ、とか思った奴、廊下に立つとれ。

少年移動中・・・

「もってかないでー」

「持っていくぜ！」

おお、現在進行形でモロ交戦中。パチエが何とか粘っちゃいるけど時間の問題だな。マスパでも撃たれたら一巻の終わりだな。

「そろそろ終わりにするぜ！恋符『マスタースパーク』」

思ったそばからこれだよ（笑）

「紅」

「ああ」

パチエの前に紅が結界を張ると同時にマスパがぶち当たった。それにしても中々の攻撃力。咄嗟に張った物とはいえ、紅の結界にヒビを入れるとは・・・ファイナルスパークだったら破られるんじゃないか？

「ようパチユリー、危ないところだったな」

「ええ、コホツコホツ、ありがとう」

パチユリーとは昨日の夕食のときに一度会っている。

はじめて見たときは本当に紫もやしかと思った。（リアル話）

「ちょっと待っててくれ、懲らしめてくるから」

さて、どう可愛がってやるのか？

・・・とりあえず驚かす方向でいこう。

「ここでそんな大技使われると、本が燃えるんでやめてくれ」

俺は一瞬で魔理沙の背後に回って、耳元で囁く。

「なっ、誰なんだぜ？」

ほう、反応はいいようだ。すぐに距離をとってミニ八卦炉を構えた。その目には明らかに警戒心が宿っている。

「臨時執事の八神零だ、以後よろしく！そして本は盗ませねえぞ！」

「一生借りていただけだぜ！」

うーん、発言一つ一つが超可愛いなあ。背も小さいし・・・  
こんな妹がいたら俺は死んでもいいな。

「お前の選択肢は二つある。一つ目、おとなしく本を置いて帰る。  
二つ目、戦闘した拳句捕まってあんなことやこんなことされる、  
さあどっち!？」

俺としては二つ目を熱烈に所望する。まあ魔理沙の性格上・・・

「無理やり持っていくぜ！恋符『マスタースパーク』」

こうなることは分かりきっていたがな！（確信犯）



「おk、二つ目を所望だな、大宇宙『ブラックホール』」

俺が前に突き出した手の平から黒い球体が現れ、  
魔理沙のマスクをことごとく飲み込んでいく。

「んなっ！」

「知っているか？ブラックホールは光すら飲み込んでしまうそうだし」

この技は文字通りブラックホールを生み出す技だが、ミソなのは  
吸い込む距離、方向、強さなどを自由に調節できることだ。

「さあ、はじめをつけてもらおうか、禁術『絶対領域』」

さて、この空間はすでに俺のものだ。

もう一度ミニ八卦炉を構えている魔理沙に羞恥を味あわせてやろう。

「そんなもの構えてどうするつもりだ？『魔法なんて使えない』の  
に」

「何おかしなこといつてるんだぜ！喰らえ！魔砲『ファイナルスパ  
ーク』」

そして静寂が訪れた。

「な、なんで魔法がつかえないんだ！？お前何をした！？」

「よくそんな威勢良くいられるな。『もうお前は動けない』っての  
に」

今度は魔理沙の動きが完全に止まる。

「お前が悪いよな、おとなしく本を返せば何もしなかったのに・・・」

俺は微笑を浮かべながらゆっくりと魔理沙に近づく。

「ひっ！私をどうするつもりなんだぜ！？」

「そりゃあきまってるじゃあないか」

俺がパキンと指を鳴らすと、目の前から魔理沙が消えた。

正確には視界から消えただけなんだが・・・

下を見るとさっきの背よりずっとちっちゃい魔理沙がそこにいた。服は小さくしていないので今にもずり落ちそうに肩に引っかかっている。

「な、なんなんだこれほー！！？」

「あっはっはっは！超可愛い〜」

身長百センチほどの小さな魔理沙を抱きかかえ、パチエの元に連れて行く。

こ、こら、放すんだぜ！とか喚いていたが、この高さから落ちたら痛いぞ？

というと黙ってくれた。さっきの数倍癒されるわ〜。

思わず抱きしめたら顔を真っ赤にして猫のようにおとなしくなった。

「ふふっ、随分と可愛い姿になったものね」

「お前も能力の使い方がえごいな」

「それは褒め言葉として受け取っていいのか？」

「うう、まさかこんなことになるなんて思ってもいなかったんだぜ」

俺の腕の中で魔理沙がぼやく。

「よし、じゃあ魔理沙の晴れ姿を皆にも見せに行こうか」

「それはいいわね」

「よくないんだぜ！誰か、ああ、お前助けてくれ！」

自分の運命に逆らい必死に俺の腕の中から逃げようとし、横にいる  
紅に

助けを求めるが、まあ結果は分かりきっていること・・・

「何いきなり話しかけてきてるわけ？」

一蹴されて落ち込む幼女約一名。

「転移ー」

少年幼女移動中・・・

「ただいまっ！」

「・・・なんだその腕に抱えているものは」

さっきの部屋に戻ると、早速刀弥が突っ込みを入れてきた。

ふむ・・・こいつの突っ込みスキルはA+といったところか。

「魔理沙だ」

そう堂々と答えて刀弥に渡す。

「じゃあ刀弥、魔理沙を頼んだ。俺と紅は用事があるので出かける」

「執事が仕事をサボっていいと思っているのか？」

「大丈夫だ、分身を残しておくから」

俺が指を鳴らすと俺と紅の分身が現れた。

「まあそれならいいか。どこに行くつもりだ？」

「そりゃあお前、決まっている」

俺は紅の肩に手を乗せ、

「古き友人のところに・・・遊びに行くのさ」

転移した。

## 番外編 三途の川の死神と閻魔

「さあ！最初はどこに行こうか？」

気ままに空を取りながら隣を飛ぶ紅と話す。

「まずお前はどこに行く予定なんだ？」

「そうだな・・・白玉楼、三途の川、八雲家、博麗神社、妖怪の山、太陽の畑と・・・あとは精々地底とか、まあ多分行かないと思うけど」

地底つつつても知ってるキャラは勇儀しかないしね。どうせロリ鬼は神社にいるだろうし。

「・・・決めた！映姫たちに会いに行こう！」

「つか零よ、俺思ったんだが、刀弥と分かされると番外編の意味が・・・」

「おい！メタ発言はやめるといっているサル！」

「す、すいまえんでした・・・」

この辺のノリに紅のキャラリアを感じる。

まあ二百年ほど一緒に過ごしているわけだし、どこで突っ込むかと

か、  
どこでノルかは完璧に理解してくれている。さすがだなと関心が鬼  
なった。

「まあただ行くだけじゃ面白くない、ということだな」

俺は紅に耳打ちする。

「……まあ面白そうだな」

「ま、やってみようぜ」

少年移動中……

紅魔館に戻って参りました。

ちよつと用事があったね、置いてかなくちゃいけないもんがあった  
のよ。

門番は寝ていたからさっさと入って刀弥の部屋まで行ってノックを・  
・

「刀y」（紅魔館の主の自主規制喘ぎ声）「……お楽しみ中によ  
うだ」

「……（超憂いた顔）」

「……なあ紅、禁断の技で滅ぼしても良いかな？」

「……（一筋の涙が頬を伝う）」

「・・・待つしかないか、ハア」

二時間後・・・

「長いわ!」

とりあえず出てきた刀弥に突っ込んだ。

延々と自主規制声を聞かされてる俺たちの気持ちにもなってみろってんだ!

「なんだいきなり」

「なんだいきなり、じゃねえよ!二時間以上も(自主規制)してんじゃねえ!」

いや、別にひがんでるわけじゃないよ?それでもイラつくね、リア充は。

二百年間生きてきてファーストキスすらしてない俺たちってどうよ?

「零、当初の目的を忘れるな」

「だってよう!なんでカリスマがこんな酷いやつを好きになったかわかんねえよう」

「別によくな?」

「俺なんか違う次元でこいつに何回か切り刻まれてるんだぞ!」

「とりあえず落ち着け」

固めた空間で思い切り殴られる。普通に痛い。

「ああ、すまん。イラつきすぎてなんか電波を受信してたようだ」

「よし、落ち着いたところで当初の目的を話せ」

「ああ。刀Y・・・いないんだが？」

話している最中に消えるとか・・・あいつ絶対忍者だろ・・・

「じゃあもうレミリアでいいや、おーいおぜうさまー」

部屋に入ると、カリスマがブレイクされたおぜうさまが立っていた。

「あら、なにかしら？（ニコニコ）」

なんか・・・艶々してるんですけど。

「あの、ちょっとの間俺たちの肉体をおいてくから管理よろしく。

あと別に血を吸ってもかまわないけど、死なない程度にしてくれ」

「わかったわ」

「じゃあよろしくー」

少年移動中・・・



「と、いうことで、準備は完了したわけだ」

俺達は霊体になって、三途の川にいる。

まあ簡単に言うと死んだ人間だと思わせておいて実は俺たちだった  
みたいなの

驚きを味わって欲しいわけだ。なんとシンプル。

「ところで零、何で俺たちの体がつながっているんだ？」

今の俺と紅は、俺の右手と紅の左手が同化している。

「ああ、それは俺達と一緒に渡し舟に乗るための策略だ。

同体なら一緒に連れて行くしかないだろう？」

「なるほど・・・」

今の俺は能力は使えても、闘気も魔力も出せず、ただの霊でしかない。  
い。

だからばれる心配もないって寸法よ！あ、もうあの二人には認識で  
きるよ。

「しまった・・・重大なことを忘れていた」

「どっつした？」

俺は無言で川原まで歩く。紅もついてくる。

そこには鎌を枕代わりにして、グースカと寝る死神がいた。

「小町がサボってるから・・・多分映姫が来る。・・・つなく意味がなかったな」

能力で俺と紅を切り離す。

「・・・どうするんだ？」

「映姫が来るまで待つか・・・」

「それしかないようだな」

五分経過・・・

意外と早く霧の向こうに人影が見えた。

そこから現れるは威厳たつぷり（に見えなくもない）閻m・・・山田！

言い直したのはご愛嬌だ。

「小町、あなたという人は何度言ったらわかるのですか（怒」

「ひえっ？え、映姫様、寝てませんよ？」

急に飛び上がる小町に容赦なく十王裁判をぶつける映姫。  
マジで震えてきやがった・・・怖いです；；；

「さて、私もここに来たことですし、あなた方の判決はここで決め



「クケケケケケ！知りたかったらここに来ることだ！」

俺は映姫に一枚の手紙を投げ渡す。

「じゃあな！また会う事を祈ってるぜ！」

そっぴい残して俺と紅は飛び立つ。

次に目指すは・・・白玉楼だ！

番外編 白玉楼の庭師と主（前書き）

更新、だいぶ遅くなりました、すいません。

けど今テスト期間の真っ最中なのでしかたないのです。

ゆるしてくださいあ……

番外編 白玉楼の庭師と主

無縁塚から約十秒誰にも見えない速度で飛ぶと、冥界への階段につきました。

結界？普通に跳び越えた。飛び越えたじゃないところがポイントね。まあそれにしても・・・

「いつ見てもこの階段は長いな。何キロあるんだ？」

「13kmや」

「・・・まあマジでそんなくらいあるかもな」

雑談しながら俺達は登りだす。飛んで行かないのは面白（ry）ちなみにまだ幽々子の認識障害は解除していない。白玉楼についてから解除した方が（ry）

「あ、肉体戻すの忘れてた」

「そついやそつだな」

さすがにこのままじゃあ妖夢に斬られてお陀仏・・・それはないな。まず実力が段違いだし。霊力すらなくても勝てる。まあとりあえず肉体を持ってこねば。

「ほいつと『パキン』」

指パツチンで肉体をここまで持つてくる。わざわざ紅魔館まで戻るのがつたるいし。  
幸いながら血を吸われてはいないようだ。傷も……ないよな？

「よつと」

紅が自分の体にダイブする。今の俺たちの状態は幽体離脱みたいな物なので、

肉体にある程度近づけば勝手に戻る。死んだわけじゃないしね。

俺も続いて自分の肉体にダイブ。これで魔力も元通りだ。

「ほいじゃあ進みますか」

少年（肉体年齢は青年、心は少年）移動中……

「あー、もう歩きたくない」

すでに何キロか登っているはずだが、白玉楼は見えない。

つか千年前より長くなってるね？気のせいかな？

やっぱり転移しようかと思ったその時、猛スピードで前から誰かが飛んでくる。

俺の首を一刀両断しようとして迫ってきた短刀をイナバウアーで優雅に避ける。

避けなくても迷いを断ち切る白楼剣だったので死ぬことはなかっただろうが。

「・・・避けられたか」

一度地面に降り立ち、こちらを見据えてきたのは白玉楼の庭師、魂魄妖夢。

御存知妖忌の孫だ。それと同時に妖忌の弟子でもある。つまり・・・

「幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』」

魂魄流剣術の使い手でもあるということだ。

青色の鱗弾幕がくるっと回ってから放たれる。しかし・・・

「懐かしいなあ、この弾幕」

「最後に見たのは二百年以上前だからな」

Lunaticですらクリアできる俺たちに当たるはずもなく、制限時間が終了する。

さすがにこの弾幕を避けられるとは思っていなかったようで、妖夢の顔に若干焦りが生じる。話し合いに持ち込めるか？

「まあ待て、俺達は白玉楼の主に会いたただけだ。戦闘の意思はない」

「・・・それを証明できるものは？」

「・・・だが逆に俺達が嘘を言っている証拠もないだろう」

場は一瞬の緊張が走る。だがすぐに妖夢は楼観剣を構えた。



「真実は斬って知るものだ、お師匠様に教えられてきた。だから、全ては斬らなければ始まらない。怪しい奴は・・・斬る！」

・  
そういつて突っ込んでくる辻斬りみよん。妖忌め、余計なことを・

「やるしかないか・・・」

そういつて前にでようとした俺を紅が制す。

「俺がやるっ」

「ほう・・・珍しいな。面倒くさがり屋のお前が自ら出るとは」

「たまには体を動かしたいときもあんだよ」

ゆらり、と紅の体から鬨気が滲み出る。ある程度はやる気なようだ。まあ確かにこっちに来てからあんまり動いてないしな。当然っちゃ当然か。

「武器は？」

「剣でy r」

「おk、把握」

業物の日本刀を造りだし、紅に投げ渡す。それと同時に妖夢は攻撃を仕掛けてきた。

「人符！『現世斬！』」

妖夢の放った複数の靈気の刃と楼観劍の刃が紅に当たる寸前に、俺の投げた刀を紅が受け取った。

「人鬼『未来永劫斬』」

その言葉を紅が発した瞬間、妖夢は崩れ落ち、放った刃も塵と化した。

俺はひよいと妖夢を持ち上げ、紅の刀を消し去った。

「お前いつの間に魂魄流劍術覚えたし」

「いや、あの技だけだ。前に妖忌と手合わせした時に覚えた。俺式未来永劫斬だ」

「なるへそ」

そんな俺式ファイナルヘヴン見たいに言われても困るが、紅の放った斬撃は

その他の刃を相殺しただけで、妖夢に当てたのは件の峰から放った闘気だけだ。

つまり意識だけ刈り取っただけなので、妖夢の体には傷一つない。峰打ちだったら下手したら大変なことになるし。

「妖夢が来たということは、もう少しで白玉楼に着くだろう」

「そうだな。じゃあ歩きますかい！」

また二分ほど登ると、目の前にはすでに八部咲きまでいった桜の木

々。

白玉楼はすでに桜見シーズンのようだ。まあほとんどの奴らは花より団子だが。

紫から聞いた話なので本当かどうか確証はないが、

幽々子は間違いなくこの時間は昼寝をしているらしい。

幽霊は太らないからって気を抜きすぎじゃなかるうか？

「つと、ここだっけか？」

「ああ、昔と同じならな」

考えているうちに、幽々子の部屋の前に到着。認識障害を解除する。今回は『寝ている幽々子、朝起きたら死んだはずの旧友と対面』作戦で行きます！

音で起きないように、すつと襖を開け、一呼吸おいてすつと閉める。

「おいイ……」

ちよつと予想外のアクシデント発生。これでは入るには入れない。

「零、なぜ入らない？」

俺の背中の中が見えなかったであろう紅が聞いてくる。

「……開けてみる」

こくりと頷いて紅が襖をすつと開け、ぴしゃりと閉める。

「……………」

「な？」

さて、なぜ入れないか。それは幽々子の布団がはだけているから。これだけなら、何の躊躇もなく部屋に入って起きるのを待つだろう。しかしこのときの幽々子は、普段からなのか暑かったからなのかわからないが、生まれたままの姿、つまり素っ裸で寝ていたのである。

昔、まだ小さい頃の藍とお風呂に入り、背中を流してやっていたとき、まだ小さい頃の藍とお風呂に入り、背中を流してやっていたときに紫がバスタオルも巻かずにいきなり入ってきた時くらい今は焦った。まあその時は俺の抗議も空しく三人で風呂に入る羽目になったわけだが。

「……よし、こういうときのための能力だ」

「ああ、その通りだ」

俺が念じるだけであら不思議！幽々子に服が着せられ、布団がかけられた！

これほどこの能力に感謝したことはないぜ……

再び襖を開けて、今度はちゃんと中に入る。幽々子の枕の両隣に腰を下ろし、能力発動。これで十分後に目覚める。

十分後・・・

まだ眠そうにうぐんと伸びをして起き上がる幽々子。

ふと左を見たときに据わっている俺と目が合う。振り返り、紅の姿も確認する。

「・・・貴方達の夢を見るのも久しぶりね」

どうやら夢だと思われているらしい。まあそれもそうか。千年前に  
(ry

まあこれはこれで面白いかな。

「そう、これは夢かもしれない。しかし現実の可能性だってある」

「貴方達は・・・千年前に死んだのよ？私達が・・・弔ったんだか  
ら」

「そうか・・・そうだな。これが夢であるならば、お前はもう一度  
寝ると良い。

そうすれば元の世界に・・・現実に戻ることができるはずだ」

「そうね、そうさせてもらおうわ」

そういつて幽々子は再び布団にもぐる。

「寝る前に一つ、枕元に手紙をおいておく。もしまた起きたときに  
枕元に

この手紙があったとしたら、手紙の指示に従ってみると良い」

幽々子の頭に手をかざし、眠れと一声かける。

しだいに幽々子から規則的な寝息が聞こえてきた。完全に寝入ったようだ。

俺達は静かに外に出る。

「さて・・・次は太陽の畑かな」

## 番外編 月の頭脳とUSSC

「うむ、この辺の筈は質がいいな・・・取っていいんか」

「零、元の次元に戻ってからにしておけ」

俺達は今迷いの竹林の中を歩いている。太陽の畑に行く予定だったが、

永遠亭にも顔を出しておいた方がよくな？という紅の発言により、急遽永遠亭に行くことになった。まあ太陽の畑からそう離れていないので、

パツと挨拶して向こうに行くつもりだ。あの時点ではそこまで親しくなっていないし。

「お、ついたついた」

「千年経つのにまったく変わってないな・・・さすが永遠を生きるやつらだ」

「紅、それは関係ないと思うぞ？」

全く外見の変わっていない永遠亭だが、住んでいる奴らはふたつ・・・二匹ほど

増えているだろう。鈴仙・優曇華院・イナバことうどんげと、

もう一匹はいたずら兔の因幡てゐ。こいつは俺とは気が合いそうだな。

とりあえず永琳を呼ぼうと、玄関の前に移動したのだが、その玄関の前に  
大きな落とし穴が一つ。すでに開いているので、誰かがはまったよ  
うだ。

作ったのはてゑとして、永琳はこんな見え見えの罠にかかるほど馬  
鹿じゃないし、

輝夜はめったに外に出ないし・・・まあウドンゲしかないな。

穴を覗いてみると、気絶したブレザーウサ耳少女が気絶していた。

・・・とりあえず助けてやるか。面倒くさいけど。

「・・・穴深えな、五メートルはあるぞ」

「マジで？妖怪じゃなかったらケガじゃすまないぞ？」

「いや、俺に言われても困るし」

ひとまず引き上げると、ウドンゲはなんか体中ドロドロだった。

まったく、女の子の綺麗な肌が汚れるのはなんか嫌な気分になるね。

「どうしよう紅、全裸にして体を綺麗に拭いてやるべク『バキッ』」

なんでこいつは冗談言うだけで空間を固めて殴るの？馬鹿なの？死  
ぬの？

とか思いながらウドンゲの体を能力で綺麗にし、ひょいと担いで運  
ぶ。

「お、インターホンついてるじゃん」



永遠亭には千年の間にインターホンがついたようだ。

これで扉を開けた瞬間矢を放たれる心配とかはなくなったわけだ。

インターホンを押すと、ギシギシと歩く音が聞こえ、扉が開かれた。そこにいたのは・・・え？誰この人間？覚えがないんだけど・・・刀弥関係か？まあそれしかないか。

「まあいいや、永琳いる？」

「なにがまあいいのかわからないですけど、永琳さんならいませんでしたけど」

「マジ？まあ輝夜ならいるっしょ」

「今の時間は妹紅さんとドンパチやってます」

「把握」

こんなときに限って誰もいないのか・・・てゐは俺たちを知らないしなあ。

ましてや見ず知らずの外来人に渡しておいてくれと頼むのもアレだし・・・

帰ってくるまで中で待ちますか。

「とりあえず自己紹介しておこうか。俺は八神零、蓬萊コンビの古い友人だ」

「俺是那香川紅、あとは右に同じ」

「俺は藤原っつていいます」

藤原・・・藤原か・・・妹紅にも会いたいなあ。

「とりあえず、中に上がって待たせ」その必要はないわ」帰ってきたか・・・」

後ろを振り向くと、相変わらず見事なツートンカラーの銀髪女性。赤と青の服は目に毒です。紅魔館ほどじゃないけど。

「そつちの貴方は薬ね？はいこれ」

永琳が懐から瓶に入った錠剤を瓶ごと藤原に渡した。何の薬だ？ラベルを見てみると、妖怪化などの進行を止める薬、と書かれている。

「え？藤原っつて半人半妖なの？」

「いえ、半人半々妖半々神です」

「これまたどうやってたらそんなキチガイな組み合わせになるんだ・・・」

さすがに俺もこれは初めて聞いた。半人半妖でも十分珍しいのに、なんだよ半人半々妖半々神っつて!?

「いろいろあつたんです・・・」

察してくれよ、みたいな顔をしてきたので、察してやった。

「じゃ、俺はこれで」

そういつて人外のスピードで去っていく藤原の背中には、哀愁が漂っていた。

・・・あ、刀夜との関係聞くの忘れてた。しかも下の名前も聞いてないし。

「貴方たちは・・・どこかしてみたことあるような気がするわね」

藤原を見送り、俺たちのほうを見た永琳は、真顔でこんなことを言いやがった。

千年程度で忘れ去られるとは・・・俺たちの存在ってちっちゃかったのかなあ？

「これを読んだら思い出すさ。じゃあな」

まあ別に忘れ去られていようが関係ないので、手紙だけ渡してさっさと逃げる。

ここで正体ばらしても別に驚きそうにないし。付き合い浅いし。

「あ、ちよっ」「転移！」

はい、向日葵の畑に到着・・・してませんよー、近くまで来ただけ

ですよー。

そのまま行ったら絶対怪しまれるからね。やりたいこともあるし。

「紅、ちょっと今回は俺だけで行きたいから妖怪の山のふもとで待ってて」

「自分勝手な・・・まあ今更か」

紅はため息一つついて消えた。これで邪魔者は消えたか・・・  
大き目のローブを創り、上から着て顔を完全に隠す。

これで俺とは気づかないだろう。千年前なら一瞬で分かるだろうが。

「さて、行くか」

青年（にレベルアップした！）移動中・・・

向日葵の畑は千年の月日を感じさせず、過去と全く同じ姿で佇んでいた。

そしてまた幽香も、千年前とほとんど変わらず、向日葵の世話をしている。

やはり花に囲まれた幽香は絵になる。千年前と変わらず美しい。

あ、こっち向いた。あ、黒い微笑を浮かべた。あ、こっちに歩いてきた。

落ち着くんだ俺、どうにか怪しまれずに話を進めるんだ。そうすれば・・・

「綺麗な向日葵ですね。貴方が育てているんですか？」

ちよつとだけ声色を変えて、先に話しかける。

「ええ、ここにある花はみんな私が育てているわ」

「これだけの量を一人で・・・すごいですね」

「あら、ありがとう」

やはり花系のことで褒めると幽香は本当の笑みを浮かべる。

けど黒い微笑みはやめてください。マジで震えてきやがった・・・怖いです……

「けど、この辺は危ない妖怪が出るらしいから、早く帰ったほうがいいわよ」

来た！フラグ来た！これで勝つる！

「妖怪のあなたがそれを言いますか・・・」

「あら、わかってたの？」

黒い微笑がさらに強くなる。マジで震え（ry

「分かっていたも何も、僕は最初から貴方に会いに来たのですから」

「へえ、そう・・・ならば少しは楽しませてくれるのよね？」

その瞬間、幽香の姿が視界から消え、いきなり目の前に現れる。

さすがに前よりは速くなっている様だ。まあ負けることはないだろうが。

幽香の腰の入った拳を、真正面から受け止め、衝撃を和らげる。  
・・・力は速さと比べ物にならないほど進化しているな。

まさか人間ごときに受け止められるとは思っていなかっただろう。  
そのシヨックで硬直した刹那の間を、俺は見逃さなかった。

青い布を懐から取り出し、我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）と唱える。

「ちょ！なによこれ！」

幽香はなす術もなく蠢く布に絡まり、身動きが取れなくなる。

俺が使ったのはあの有名なマダラの聖骸布の女バージョンだ。

男性に対して圧倒的な拘束力を持つこの布を、女性用に改造しただけ。

縛ったものの魔力や妖気も封じる素敵グッズだ。

「油断大敵って奴だな、人間なんかに負けるわけないと思ったか？」

「くっ！」

悔しそうにしている幽香を見ていると言葉攻めでもしてみようかと思っただが、

時間もないのでやめておいた。できれば一時間ほど闘っていたかったんだけどね。

「ま、殺すつもりなんてないから安心しな。お前の力を今一度試したかっただけだ」

そう言ってマダラの聖骸布を解き、懐に戻す。

拘束が解けた幽香は、ある疑問を口にした。

「あなた“今一度試したかった”って言ったわよね。どういう意味かしら？」

「そのままの意味だよ、風見幽香」

俺は手紙を投げ渡し、飛び上がる。

「では、また会おう。千年振りの・・・友よ」

俺はローブを脱ぎ捨て、紅の所へ転移した。

## 番外編 妖怪の山の主

妖怪の山のふもとに転移すると、紅が鍋を作って食っていた。空間を固めて鍋の形を作っているの、食材が鍋の形になって浮いている姿は、

なんとも不気味だ。急に顔面めがけて飛んでくる気がしてならない。真夏に鍋はどうかと思うが、それ以上に材料をどうやって集めたし。

「山菜と猪の肉だ」

「調味料は？」

「紅魔館から」

いつの間にか調味料が減つてるときがいたらPAD長どんな顔するだろうか？

いや、そのまえにそう簡単に気がつくわけがないか。

「食つか？」

「いただく」

取れたて新鮮な野菜と、狩りたて新鮮な猪の肉。それを長年の修行による熟練の技でその味を最高まで引き上げられた鍋はまさに至高の一品といえるだろう。

旨みが凝縮されたスープの香りが胃を刺激し、急激に腹がすいてく



る。

「（モグモグ）で、次は何をする予定なんだ？」

「（ガツガツ）妖怪の山に襲撃を仕掛ける」

「（ゴクゴク）・・・まあ暇つぶしにはなるか」

「（かゆうま）まあ用は天魔に会いに行くだけだしな」

きつちりとスープまで飲み干された鍋は空中に霧散する。

真夏に鍋も、意外といい物だったな。むっちゃ汗かいたけど。

「ご馳走様。じゃあ行くか？」

「ご馳走様。ああ、行こう」

よっと立ち上がるうとしたその時、目の前に天狗が降り立った。

白狼天狗だろうか？小さな体から大きな耳と長い尻尾が出ている。

紅葉マークの盾に背中の大剣、犬走杖か。ちょうどいい。

「人間が妖怪の山に何の用だ」

背負っていた大剣を構え、とてもかわいらしい声で凄む。

この辺で剣に脅えるか、姿と声に癒されるかが大物の分かれ道だな。つかこんな鈍剣で切られてもねえ、ほとんどダメーじないし。

「知りたいのならば・・・力づくで聞いてみるよ」

そういつて軽く弾幕を展開する。もちろん玉の威力は極限まで弱くし、密度も結構薄くしてある。対して椀は弾幕を出してきたのを見て敵と認識。

あの有名な“の”の字弾幕繰り出してくる。最初のころはこれ苦労したなあ。

「ゲームと違って俺たちの当たり判定でかいけど、何とかなるもんだよな」

「まああれだけよけ続けてたんだ。当たるほうがおかしい」

無論一発もあたるはずもなく、ある程度よけたところで俺がスペカを発動する。

「禁術『絶対領域』これでお前は『弾幕を出せない』」

急に椀の弾幕がぴたりと止まる。

頑張っても弾幕が出せない椀は、仕方ないとばかりに切りかかってきた。

振り下ろされた大剣を、俺は人差し指と中指の間で挟み止める。

椀がいくら力を入れてもピクリとも動かない剣を、俺がくるりとまわすと、

重い剣につられて椀がバランスを崩す。そのタイミングで俺は剣を弾く。

剣を手放した椀を押さえつけ、両手を押さえる。これでもう動けないだろう。

・・・これ傍から見たら襲ってるようにしか見えないんじゃないか？

「くっ、放せ！」

「はい」

椀の上からどけて、着物の裾についた土を払う。

せっかく放してやったのに椀は倒れたままポカンとしている。

「ッッ！！何のつもりだ！」

と思ったら急に跳ねるように飛び起きて、怒ってきた。

「なに、お前には伝達役をしてもらおうかと思ってな」

懐から手紙を取り出し、椀に投げ渡す。

「俺たちは妖怪の山を襲撃する。開始時間は十分後だ。

詳しいことはそれに書いてあるから、天魔に渡してくれ」

その言葉を聞いた椀は一目散に妖怪の山の頂へと飛んでいった。さて、どれだけの戦力が用意されるかな？

妖怪の山の頂にある天狗の総本山、樹齡一万年といわれる杉の大木。天魔はその中で仕事をしていた。天魔の仕事は、基本的に書類仕事だけである。

新聞発行の承認、鼻高天狗のまとめた書類に目を通し、判子を押す。最近では黒羽刀弥の結婚式についての書類も大量にある。

天魔は誰が見ても戦闘タイプだ。はっきりいって書類仕事など向いていない。

それでもやらなければいけないのが天魔の責務である。本人はこんな仕事など

ほっばらかして暴りたい気持ちがあるのだが、部下の手前そんなことをする

わけにも行かない。なので今日も淡々と書類をまとめているときであった。

「天魔王様！緊急事態です！」

一人の白狼天狗が天魔の執務室に飛び込んできた。傍に控えている大天狗が身構える。

「よい、何事だ？」

「はい！人間が二人、十分後に襲撃を仕掛けてきます！」

なんだ、と天魔は思った。天狗にとって、人間は脆弱な存在である。たかが二人の人間が攻めてこようと、天狗にとってはちっとも痛手にならない。

そんなことで時間を潰されては、一向に仕事が進まない。

「人間二人程度、伝える暇があったら殺せばよからう」

天魔は不機嫌そうに言ったが、予想外の返答が帰ってきた。

「それが・・・その人間は以上に強く、軽くあしらわれてしまいました」

この言葉が天魔の興味を引いた。どんな武術の達人であろうと、所詮は人間、強さには限界がある。種族の格が違う天狗相手にはま  
ず勝てない。

それが軽くあしらわれた、との報告。興味を引かぬはずがない。

「その人間が、これを天魔様に渡せと」

「よこせ」

太い無骨な指で手紙を開き、内容を見る。

“ よう天魔。俺たちはこれからこの山に襲撃を仕掛けようかと思う。  
別に乗っ取るうってわけじゃないから安心していい。しかし、  
総戦力で向かってこないと、勝てる確立はまず無い。さあ、楽し  
もうぜ。”

八神零&

那香川紅”

「!!!?」

天魔は驚いた。自分の目に間違いが無ければ、今から攻めてくるのは  
千年前、鬼子母神と激闘を繰り広げ殺されたかつての戦友とも。  
これが本当ならば、天狗が軽くあしらわれるのも頷ける。

「時雨、雪丸、今すぐすべての天狗を集合させよ」

「「御意に」」

命令を受けた大天狗の時雨と雪丸が、椀の数倍のスピードですつ飛んでいく。

椀もそれに続き、天狗に緊急事態を伝えにいった。

「フハハハハ！久方ぶりに血が滾るわ！」

「さて、十分経った。ルールは女は気絶させるのみ。殺しは無しだ。行くぞ」

「おう」

すつと飛び立つと、妖怪の山から黒い粒がどんどん近づいてくる。やがてそれは幾千もの天狗に変わった。マジで総戦力を投入したよっだ。

あるものは弾幕を放ち、あるものは手に持った武器で突っ込んでくる。

「LET、S GO!!!」

隙間が見えないほどの弾幕を二人の弾幕だけで相殺し、向かってくる天狗を

吹き飛ばしながら一直線に飛んでいく。大量の天狗はどんどん撃墜され、

ひゆるひゆると下へ落ちていく。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア

！」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア

！」

時々弾幕にあたるが、服を焼く程度で肉体になんら影響は無い。

鍛え抜かれた肉体はどんな武器よりも強いものなのだ。

天狗の攻撃は俺たちの行進を止めることはできず、ついに俺たちは杉の木までたどり着いた。所有時間は約五分。まあまあタイムだ。

「邪魔するぞ」

杉の木に取り付けられた門を開け、中に入るといたのはわずか三人。側近の大天狗二人に、天狗の長であり妖怪の山の主、鞍馬風雲。

「お前にとっては千年振りか。若干老けたな、天魔」

「ふん、月日の流れには逆らえぬ。自然の摂理よ」

「違うない」

俺たちは天魔の前に座った。

「いろいろと話すことがある。まずは聞いてくれ」

「よかるう」

「フハハハハ！相変わらずお主は自由奔放だな！」

「それが俺の生き方だ。何事にも縛られたくないんだよ」

天魔にここにいる理由を話し終わるころには、紅が天狗を全員治し、この場所につれてきた。そのため雰囲気は若干ピリピリしている。妖怪の山を襲撃してきた輩が自分たちの長と親しげに話しているのだ。

それも当然のことだろう。

「それでだ！明日の夜紅魔館で宴会を開く！それを広めてほしいんだ」



俺は本題を言う。実はというと、今まであつてきたやつらに渡したのも

明日の夜宴会を開くという告知の手紙だ。理由はそこで話す。

「よかろう！鴉天狗の総力を持って挑もう！無論天狗も参加させてもらうぞ？」

「勿論だ。ぜひ楽しんでいってくれ」

鴉天狗たちは天魔の命を受け、幻想郷中に広めるために四方八方に飛び立っていった。これで準備はオツケーかな？

「じゃあ俺たちは帰ろう。邪魔したな」

「宴会は上物の酒を用意しておけ。飲み交わそうではないか」

「了解した」

これでほとんどの工程は終了。あとは紫だけだな・・・

番外編 宴会の準備とハッキング(前書き)

次で最後です

## 番外編 宴会の準備とハツキング

「ただいまー」

「帰ってきたか・・・」

俺たちにも思いつきり聞こえるほど大きくため息をつく刀弥。  
のそばに控えて箸を持っている俺たちの分身。

「そいつらは役に立ったかい？」

「ああ、よく働かし口答えもしないし多少の激務でも顔色ひとつ変えずに働く」

「激務は多少と言わないと思った リアル話」

分身を消して使われた霊力を回収する。

日も暮れたし、もうそろそろ夕食を作れ 命令形 とのことなので、  
本日のメニューはみんな大好きカレーを作ろうということになった。  
俺的には辛いカレーを作りたいかったのだが、咲夜さんの命令で残念  
ながら

甘口に変えた。理由？そりゃもちろんおぜ（ry

幼若男女食事中・・・

「さて、飯も食い終わったことだし、伝えなければいけないことがある」

みんなが立ち上がったとどっかに行く前に呼び止め、話を聞かせる。

「明日ここで宴会を開きます！」

「まだ言っ てなかつ たんかい！抹消『無の領域』」

紅の鋭すぎる突込みにより上半身が完全に抹消される。

こいつはホント俺専用突っ込みスペルカードを作りすぎだと思う。

俺じゃなかったら絶対死ぬよ！？何が起こったかもわからないうちに死に至るよ？

「お前にしかやらないから大丈夫だ」

「俺が大丈夫じゃないっての」

消えたところからよきによきと上半身が生えてきて、やがて元に戻った。

今は慣れたから瞬間的に再生できるが、以前は一回死に掛けたこともある。

こいつが俺の腹に尖らせた空間ぶち込んで出血多量でガチで死にかけた。

あの時はさすがに誤ってきたけどね。無論やり返した。

「で、どういふことかしら？」

咲夜さんに紅茶のお代わりをついでもらいながら、レミリアが言う。

「いやあ、明後日に俺達帰るから、その前にパツと宴会でも開きたいと思っただけな」

「それを了承すると思っただけ？」

レミリアに近づき、即座に作った強力精力剤と媚薬をこっそり握らせる。

「いいでしょう。宴会を開くことを許可するわ」

「わあ、ありがとっれみりあ 棒読み」

「おいレミリア、今零に何か渡されたと思うのは俺の気のせいかな？」

「きつ、気のせいよ」

若干カリスマブレイクするレミリアに和みながらも、明日のスケジュールを考える。

まあメイド長と執事長を懐柔する手もあったが、それも面倒くさいし、

紅魔館の主であるレミリア・スカーレットに命とあれば拒否もできないしね。

すべては俺の計画通りってやつ？

「あ、手伝いとかはいらないから。全部二人だけで事足りるし」

「場所はホールでいいのね？」

「うん。じゃあ俺たちは明日に備えて寝る。あと刀弥、ちょっといいか？」

話も終わったし仕事に戻ろうとどこかに行こうとする刀弥の肩をつかみ止める。

「なんだ？」

「明日紫を宴会の前に呼び出してくれるか？」

「？ まあいいが・・・何をするかによっては拒否させてもらう」

「何もしない。ただお前と旧友の婚約を・・・祝ってやりたいだけだ」

正直、あいつが誰かと結婚するなんて思ってもいなかった。

悠久の時を生きる大妖怪にとって、結婚できる相手なんて限られている。

同じ悠久のときを生きる者が、永遠の命を持つ者か。

だがまさか人間と結婚することになってるとはな・・・

「・・・わかった」

「じゃ、よろしくな」

話を終えた俺は部屋に戻り、休養をとった。

天狗や幽香と闘ったことで多少なりとも霊力や魔力を失った。

明日は大仕事があるし、しっかり寝て回復させないとな・・・

あくる日の晴れた夏空の下、俺達はホールの二階の手擦りの上で、執事服に着替え、四角めの眼鏡をかけ、二人タップダンスを踊っていた。

カカカカツカカツカカツカカカカツカカカカカカカカカカカカカツと小気味いいステップがホールに響く。

「……いいぞ！」

かけている眼鏡を空中に放り投げ、ホールの中心にあるシャンデリアに飛び移る。

そのまま反動をつけ、紅い絨毯の端まで飛び、腕で着地。その状態から前に

半回転し、絨毯を持ち上げる。バサア、と絨毯が飛び上がり、また下に落ちるまでの

数秒の間に俺達は壁を走り回る。俺はテーブルを、紅は椅子を所定の位置に

投げ飛ばし、料理の置かれる空間を作る。紅いホールを一步進むたびに、

金色の装飾が取り付けられ、絨毯と同時に投げ飛ばしたものが見事に置かれ、

それと同時に俺達も着地。そこで上を向いたところで眼鏡が自分の

顔にかかる。

「「昼を夜に、砂糖を塩に、生者を骸に、そして濃紺を金色に染め上げる……」」

そして眼鏡を中指でクイツと上げて……

「「これぞスカーレット家の執事」」

見事……クードと違い、最後まで決めることができた。  
我が生涯いつぺんの悔い無し！とまでは言い切れないがな。

「いやー、さっぱりと決まったね！」

「しかし零、このネタわかる読者が何人いると思う？」

「……五人くらい？」

「じゃあその他の人は意味不明ということだ」

「………知りたい方は黒 事？の第一話を見るべし！」

「宣伝乙」

宴会の準備が終わった俺達は執事服からいつもの着物に着替え、刀  
弥を探しに行く。

スグに見つかると思ったんだが、屋敷中走り回ってもどこにもいな  
い。

咲夜さんに聞いても知らないという。これはいったいどういっ



ちや。

仕方が無いので能力で探したんだが・・・どうも上手くいかない。つぎ込む靈力を二十倍にしてぼんやりと場所が浮かんだのだが・・・壁の中？

さらに靈力を上げ、中を見るが、いろんな機械が所狭しと並んでいる。

どうやら刀弥の研究所のようだ。

「どゆこと？」

「おそらく、隠し部屋だろう」

コンコンと壁を叩いてみても、違う音なんてしなかった。

渾身の力でぶん殴ってみたが、余裕で音を置き去りにする正拳でも傷一つつかない。

これはまた随分と嚴重なプロテクトだな。能力による完全な認識の拒絶。

不可能を操る俺の能力すら拒絶するとは、入るのも面倒くさそうだ。

「仕方ない・・・ハッキングするか」

目の前にスパコンを創造する。どこにも繋がなくても普通に使える特殊なやつだ。

「できるのか？」

「9分でいい」

推測だが、俺と刀弥の能力の格はほぼ同じ。能力VS能力では引き分けだが、

圧倒的な霊力や魔力による力技により何とか拒絶を回避することができる。

ちよつと疲れるが拒絶をさらに拒絶することに徹底すれば・・・

「キタ！ハッキング成功だ！これで勝つる！」

その後も霊力を開放したまま情報を引き出す。

「どうやら、この扉は音声認識によるパスワードと電子キーによるロックのようだ」

「調べられるか？」

「やってみるしかないだろ」

パスワードと電子キーの情報は必ず入っているはず。そうでなければそれで扉が開くはずが無い。あ、くそう。偽装データだった。

二分後・・・

「見つけた！電子キーの情報だ！」

そのままそっくり情報をコピーし、その情報を元に創造。本物の鍵とまったく同じ電子キーが俺の手に現れる。

「ちよつと持ってる」

「あいよ」

続けてパスコードだ。くさそうなファイルを一つ一つ調べていき、その言葉を捜す。これは違う。これも違う。これも違・・・う？

「・・・消していいな？」

「ああ、すぐ消そう今消そう、むしろあいつの存在を消そう」

婚約者とのお楽しみ動画が大量に発見されたので、迷わず消した。普通こんなの取っておくか！？おかしいだろ！恥ずかしがるよりイラついたわ！

腹いせになんかの研究データを開いた瞬間精神的ブラクラ起こるようになっておいた。

どういうものかって？簡単に言えばネガティブホウが出てくる。

「・・・・・・あつた！やっと見つけた！」

「八分が、意外と長くかかったな」

「しょうがないだろ。壁を破壊してはいるのは可哀想だし」

すっかり熱を持ってしまったスパコンを消して電子キーをかざす。

「Offences Schilo? 《開錠》」

そう言ったとたん、壁が一気にSFチックな扉に変わり、プシューと音を立てて開いた。

中にいたのは驚いた顔をしてこちらを見ている刀弥。

「・・・どうやって入ってきた」

「頑張った」

ああ、俺は間違っていない。間違っていないのに刀弥はこの答えがお気に召さなかったようで、俺にナイフを突きつけてくるんだ！

「能力による拒絶を俺の能力と膨大な霊力で止めてハッキングした」

「そうか。焼死、凍死、轢死、圧死、さあ好きなのを選べ」

「よし、俺が手伝ってやろう」

「裏切ったな紅！俺はまだ死にたくなぎゃあああああああああ  
あ！！」

結局、フルコースをくらわせられてマジで死に掛けた。あいつ絶対  
ドSだろ……

## 番外編 新たな決意

宴会が始まる三十分前、紅魔館のホールにはすでに大量の妖怪と少数の人間

その他諸々がうじゃうじゃといた。うん、上から見るとまさにうじゃうじゃなんだ。

二階の出っ張ったところから見ると、けっこう気持ち悪い。

正装の人間ならまだしも毛むくじゃらのやつとかいるからね。

「千年の間に幻想郷も平和になつたな・・・昔は三日に一度はいざこざが

起きたものだ。人間と妖怪なんて会った瞬間戦いしか起こらなかつた」

「紫が変えたのよ」

「「!!!?!?」「」

いきなり聞こえた声に驚き、後ろを振り向くと赤と青のツートンカラーの

八意永琳。その右手には俺の渡した手紙が握られている。

「やっと思い出したわ。私たちが幻想郷こゝろに来た理由そのものじゃない。

鬼子母神との戦いで死んだと聞いていたのだけれど、生きてたなんてね」

「いや、俺たちはあの時確かに死んだよ。この次元ではな」

手に赤ワインを創り出し、くいつと飲む。

「どういうこと？」

「未来はけしてひとつではない。俺たち殺されたという未来があれば、

殺されなかったという未来は必ずある。俺たちはそこから来た異次元の住人だ」

紅がビール（に見せかけたジンジャエール）を飲みながら答える。

「ま、来た理由は最初は単なる暇つぶしが主だったんだけどな」

と、本音をぶつちやけた瞬間、背後から膨大な殺気が俺を圧迫する。その濃さは鬼子母神をはるかに凌駕し、手に持ったワインのピンは割れ、

紅と永琳はそそくさとその場を逃げ出す。そんな人知を超えた殺気がすべて俺に集中している。

ギギギ、と首を何とか後ろに回すと、手紙を渡した皆様が勢ぞろいしていた。

みなさん・・・その笑顔がとても怖いです・・・

「・・・いつから、そこに？」

喉の奥から声を搾り出す。

「やっと思い出したな〜のあたりからかしら？」

と幽々子

「おとなしく理由を聞いていたけど・・・まさか暇つぶしだったなんて、ねえ？」

と幽香

「私たちの心を踏みにじった罪・・・万死に値します」

と映姫

「ま、マテ、話せばわか」「死になさい」「ぎゃあああああああああああー!!」

「また会えて嬉しいわ、零」

「そ、それ散々痛めつけた後に言うことか？」

殴られ、焼かれ、魂引きずり出され、浄化され、危うく本当に死ぬところまで

痛めつけられた俺であったが、そこはなんとか雰囲気的に耐えた。

「別次元から来たなんて信じられないけど・・・あなたならできるわよね」

日傘をくるくると回しながら、ため息交じりに幽香が言う。

「お前らもうちょっと親友との再会を喜んでくれてもいいじゃないか・・・」

「お前がいらんことを言ったのが悪かったんだろっが」

紅の辛口の突っ込みが心に突き刺さる。

「ふふっ、変わってないわね貴方達は」

袖で口元を隠しながら、幽々子がクスクスと笑う。

「そりゃそっだ。次元は違えど千年前から来たんだしな」

原型を留めていない着物を能力で直し、焼けた髪を戻す。

まあ再開を祝して乾杯でもしようかと日本酒でも創ろうとした時に、ちよつと刀弥が現れた。

「紫が来たぞ。客室に待たせてある」

「お、やっと来たか」



時計を見てみると、もうすでに宴会の始まる十分前だった。宴会の前としか言っていないが、ここまでぎりぎりに来るとはね。

「待ちなさい」

客室へと歩き出した俺と紅を、幽々子が止める。

「紫に会うのは、やめておいたほうがいいわ」

「なんでさ」

いつに無く真剣な顔をした幽々子に、俺は疑問をぶつけた。

「意味が無いのよ。紫はもうあなたたちのことを覚えていない」

「はあ!?!」

俺たちと一番親しい位置にいた紫が俺たちのことを覚えていない？あの紫がだぞ？百年を同じ屋根で過ごしたのにもかかわらず？

「ありえない。俺たちと紫は千年やそこから忘れられるほどの浅い仲ではなかった」

「そうよ、だからその分、あなたたちが死んだときの悲しみは誰よりも深かった」

「……ッッ！」

「紫はあなたたちが死んだ後、悲しみに押しつぶされ、心が壊れてしまっ前に

記憶の境界を操って、あなたたちのことを完全に心の奥にしまいこんだのよ

だから会っても意味は無いわ。もう何も・・・覚えてはいないわ」

その言葉で、俺の中で、淀み渦巻き闘ぎあっていた感情の本流が、抑えていたものをぶち壊し、大粒の涙となって目から零れ落ちた。

「ハ、ハハ、ハハハハハハ」

俺は始めて自分の過ちに気がついた。置いていかれたものの気持ちも考えずに、

ただ遊び半分で、利己的な理由のためだけにこの次元に来たことを。

この次元は、安易に来ていい次元ではなかった

もし紫に会っていたとしたら、何かの拍子にふと思い出してしまったとしたら、

俺はもつと自分を責めることになっていただろう。

「人の死は、残された者にとってその絆が強ければ強いほど、

残された者が弱ければ弱いほど、痛いほどに心を縛りつけるもの

・・・か」

涙を拭くこともせず、俺は呟いた。

「紅、帰るぞ」

「応」

元の次元に戻るその前に、俺は刀弥に向き直った。

「・・・短い間だったが、世話になったな」

「ああ」

「あいつを・・・紫を、幸せにしてやってくれ」

「勿論だ」

力強く頷いた刀弥に願いを託し、俺は紅のそばに戻った。  
元の次元に戻る道を繋げ、座標と時間を固定する。

「刀弥・・・お前も、絶対幸せになれよ」

俺たちは、次元を移動した。

気がつけば、もう見慣れた自分の部屋の中だった。  
定休日のはずなのだが、居間のほうから物音がする。

「あら、おかえりなさい。誰もいなかったから勝手に上がらせてもらってるわ」

そこには、座布団に座りお茶を啜っている紫がいた。

「まったくお前は・・・人の家に勝手に入るなって何度言えばわかるんだ？」

「いいじゃない、減るものじゃないんだし」

いつも通りの会話、いつも通りの日常。

多少の刺激は必要だろう。しかし、毎日同じように過ごしていたら、人は生きる価値を失ってしまう。けれども、この日常こそが、

何にも変えることのできない、一番大切なものだ、気がついた。

それと同時に、強くなろうと思った。

自分の身を守るために

誰も傷つけないために

大切な人を・・・失わないために

俺は、強くなる

番外編 新たな決意（後書き）

シリーズとか柄じゃない・・・

## 妖怪の少女

ある晴れた日、今日も俺たちは訓練という名の殺し合いを続けていた。

場所と時間を考えてやらないと大変な近所迷惑になるものだが、まあ結界を張っているので

中庭でやるうと迷惑はかからない。まあせまくて訓練なんてできないけど。

二時間後、今日の分の訓練を終えた俺たちはかいた汗を拭き、着替える。

「さて、今日もやるか」

「だな」

能力で、居間から時限の狭間へと続く道を作り、移動する。

次元の狭間とは、なににも侵されず、時間すらも流れない不可解な場所である。

もし何かのはずみでここに来てしまった者は、世界が終わるまで、というか

すべてが無に返る時まで永遠に限りなく近い時間を何もできずに過ごす事になる。

なにせ何にも侵されない次元の狭間なのだから、当然中で動くことなんてできない。

そう、不可能なのだ。だからこそ俺はそれを可能にできる。

つまり俺の能力がないと入れないし出れもしないのだ。

俺だけに許された存在しないはずの空間。それが次元の狭間だ。まあ能力で紅も動けるようにしたから正式には俺だけに許された空間ではないけど。

とにかく、この空間は特別なのだ。百年前、鬼子母神に敗れたときから俺と紅は

里全体を囲んだ害のある妖怪だけに反応する特殊な結界を設置すると同時に、

この空間でひたすら修練を重ねてきた。幻想郷でやる全力の訓練ではなく、相手の力を受け流し、どちらも傷つかぬよう、いわゆる“武術”の訓練だ。

それと同時に霊力と魔力、体力の強化も行った。どれだけ闘っても呼吸が乱れぬよう、

どれだけ膨大な力を使っても底が見えないよう、魔力と霊力を練り合わせたものを

常時身に纏いながら修練を続けた。これにより多大な魔力と霊力を消費し、ギリギリまで続ける

ことで魔力量と霊力量が跳ね上がる。それに本来結びつくはずの無いものを練り合わせることで、

膨大な力とともに緻密なコントロール力も身につく。まさに一石三鳥だ。

最初は時間にして半日ほど闘っただけで死にかけていたものの、今では全力の状態を

二週間はキープできる。八割の力なら一ヶ月間位なら何とかいけるだろう。

このような努力の結果生み出されたのが『八神流戦闘術』だ。剣に、槍に、銃に、斧に、ガトリングガンに、徒手空拳に、すべての攻撃を想定し、それに対する対処法を完全に技として昇華した史上最強の戦闘術である。

覚えるのには、まあ千年くらいの月日が必要だろう。修行を開始した当時から超音速を素で出していた俺たちですら幻想郷で約百年間、次元の狭間で約三百年間の月日を費やし、ついに生み出したものなのだ。逆に覚えるというほうが無理だ。

ちなみに『八神流戦闘術』か『那香川流戦闘術』かで二年ほどもめたが、『那香川流戦闘術』は語呂が悪いとみんなに言われ、渋々紅が降りた。ざまあw

「死ねッ！」

「あぶねッ！」

放たれた掌底をスウエーバツクでかわす。

「お前今殺す気でやったる！」

「いや、なんか急にイラついたから」

自分から攻撃してきた紅だが、これも八神流戦闘術の一種だ。八神流の型は四つあり、『攻』『守』『変』『殺』それぞれ動きが



まったく違う。

『攻』は自分から攻撃する型だ。顎や首筋、横隔膜など、人体の弱点を的確に突き、戦闘不能にさせる技だ。さっきの紅の攻撃も一応、一応これだ。

『守』は相手の攻撃を受け流す技だ。八神流の戦闘ではこれが基本となる。

まあ柔術みたいなものなので、大体の想像はつくだろう。

『変』は半分ネタとして考えたものだ。これは型であり型ではない。到底予測できないような理解不能の動きで攻撃、又は守備を行う。

『殺』は文字通り、相手を完膚なきまでに殺すために編み出されたものだ。

一撃必殺、急所を打ち抜き、相手の息の根を止める。使うことなんてめったに無いだろう。

そして四つの型にはそれぞれ零々攻までの段階があり、表すときには「八神流『攻』の型“参式”」のようになる。

一応亜光速くらいまでなら対処できる自信があるが、光速ともなると質量的に

能力を使わないと無理。無限大の質量なんて受け流せるか馬鹿野郎。

(次元の狭間の中で)二週間後・・・

「も、戻るぞ」

「さ、さっさと戻せ」

幻想郷に戻る分だけの霊力以外すべて使い切り、すでに起き上がる  
ことすらできない。

すぐに自分の店に戻り、死ぬ寸前の体を引きずり、箆笥の中に入っ  
ているボトルを取り出し、  
中に入った液体を飲み干す。すると切れかけだった霊力と魔力はあ  
る程度回復し、  
戻った霊力による自己回復により悲鳴を上げていた体も徐々に治っ  
ていく。

今飲んだボトルに入っていたのは、前々から溜めていた俺たちの霊  
力と魔力。

これを飲むことによって仕事に差し支えない程度に回復するのだ。  
完全にすべてが回復するのは、一週間は待つ必要がある。だから次  
元の狭間の中での  
修行は一週間に一回が最高なのだ。勿論いつもの修行は毎日やる。  
実際殺し合<sup>アレ</sup>いなんてほとんど霊力とか使わないし。せいぜい浮かん  
でる分だけ。

「おし、じゃあ朝の仕込み始めるか」

「あいよ」

この日もいつも通り店を開き、料理を作り、閉店間際にやってくる  
紫と話す。

一転の曇りもない夜空に、満月が輝く。そんな晩だった。  
里に張った結界に、妖怪が侵入したのを感じた。

(・・・五時の方向、まっすぐこっちに向かってきてるな)

「紅！」

「ああ！こっちも感じた！」

すぐさま暖簾をしまい、五時の方向に飛ぶ。

俺たちが張った結界は、結界内部の動きを捉えるもの。どこにいるかは感覚的にわかる。

「まったく、最近俺たちに恐れをなして出てこなかったのに・・・」

「戦闘狂のお前がそんなことを言うとは・・・」

「だれが戦闘狂だ！俺は殺しが嫌いだから強くなるうとしてるだけだぞ！」

「冗談だ」

殺しが嫌いだから強くなる。聞くと矛盾しているように思えるが、これであっている。

つまりは誰にでも余裕で勝てるようになれば間違っただけ殺しちゃったりもしないということだ。

まあ自分を食おうとするような妖怪は普通に抹殺しているが。

森の中を走っていたのは、人間型の女の妖怪だった。年は十五歳ほどか？

青のメツシユの入った銀髪に、二本の角が生えている。

とりあえず止めようと前に出ると、いきなり飛び掛ってきた。目が逝ってるので、自我がないようだ。何のフェイントもなくそのままパンチを繰り出してくる。

単調な動きゆえに読みやすく、突き出してきた拳を左手で払い、体制を崩す。

その状態から後ろに回り込み、手刀を首にあて眠らせる。傷つけずに戦いを終わらせる常套手段だ。

「・・・どうしようか」

倒れた少女を抱きかかえ、状態を調べる。怪我は・・・ないようだな。

というかまず、体の中を流れる妖気がおかしい。紫や幽香のように純粹ではないのだ。

半人半妖か？どうりで自我が保てないわけだ。満月の夜には妖怪の血が昂ぶる　って幽香が言ってた

まあそれは置いて、この少女、怪我は無くとも肌に生氣はないし、やせ細っている。

栄養失調だろう。ついでに体温も低い。いずれにせよこのままだと危険だな。

「零、とりあえず連れて帰って手当てだ」

「そうだな」

少女を抱きかかえたまま能力を発動。家の居間まで転移する。

とりあえず俺の布団に寝かせ、体を温めながら、点滴で少しでも栄養を補給させる。

このままにしておけばいつか目覚めるだろう。妖怪の回復力はすさまじいのだ。

後は目を覚ました時になにかお粥的なものを食べさせればよい。

「じゃあ俺は寝る」

「おやすみ」

欠伸をしながら自分の部屋に去っていった紅を見送り、俺はPSPの電源を入れた。

紅が絶対量をいじったので、おれたちのメモリーカードの容量は4ペタバイトという

ふざけた容量になっている。ギガバイトにすると1048576ギガバイトくらいか？

現代科学じゃあこんな小さなメモリーカードにこれだけの容量を作るのはまだ不可能だろうな。

さて、『はっ い にゅう じゃあ』でも聴きながら起きるのを待つとしまじょうか。

草木も眠る丑三つ時、PSPの充電が切れた。そういや充電するの忘れてたなと思い、ACあたふた・・・じゃないACアダプタを創り、コンセントにさして充電を開始した。電気が通っているのは俺の能力ゆえにだ。

さて、音楽を聴くのも飽きたし、小説でも読むかと思ったその時、少女が目を開けた。状況が理解できなかったのかしばし呆けていたが、

隣にいる俺を見るなり、瞳には恐怖が宿り、ガタガタと震えだした。

「・・・大丈夫か？」

声をかけると、ビクツと震え、後ずさり壁を背にして俺を睨んだ。オニサンコワイヒトジャナイヨ

「こないでッ！」

逆に俺がビクツとした。頼むからいきなり大声出さないでくれ、まだ夜も明けてないんだから。

なんだこの状況、俺がこの少女を襲っているみたいじゃないか・・・それもいいな。おい

「待て待て落ち着け。別に何もしないから」

俺が言葉を発するたびにビクビクする少女、どうしようかと頭を掻いたとき、

少女が部屋の開いている窓から飛び降りようと、窓に向かって走った。

「それはさすがにやめとけ」

まあそんな危ない真似をさせるわけもなく、俺は少女の腕を掴みそれを阻止した。

「放してッッ！」

必死に俺の腕を振り払おうとするが、いくら妖怪の血が半分混ざってしようと

俺の力に勝てるわけもない。腕を殴って放させようとするが、逆に少女の手がダメージを受けていく始末。それでも少女はやめようとしな

どというわけか、俺に対して、というか人に対して何かしらの恐怖を抱いている。

無理やり寝かせても、起きたときにまた暴れ、同じような展開になるだろう。

かといって心を操るなんて非人道的なことなんてしたくない。

迷った拳句、俺がとった行動は少女を抱きしめることだった。

「ッッ・・・放せ！」

人は温もりを求める。いや、人に限らず動物は本能的に温もりを求めるものだ。

そうすることで安心するようになってきているのだ。

「大丈夫、怖くないから」

できる限り優しく、できる限り温かく、できる限り強く抱きしめてやる。

最初は暴れていた少女だったが、耳元で囁きながらずっと抱きしめてやることにより、  
しだいに抗う力は薄れ、ひっくひっくと、押し殺した泣き声が聞こえてきた。

「何があったかは俺にはわからないけど・・・今は泣いてもいいんだぞ？」

その言葉で自分を押さえつけていた何かが外れたのだろうか、少女は俺の胸に顔を押し付け、  
大声を上げて泣いた。家に防音の結界を張り、声はあたりに漏れないようにした。

少女が泣きつかれ眠ってしまうまで、俺は少女の頭を撫で続けた。



妖怪の少女（後書き）

こつこつ場面って書くの得意じゃない・・・

マジかよ・・・(前書き)

すいませんでしたツツ！OTL(土下座)

学力テストとか期末テストとか学校祭準備とかで忙しかったんです！  
久しぶりなのに出来が悪くてすいません！

マジかよ・・・

時刻は五時過ぎ、俺たちが二度寝しようか迷いながら起きてくる時間帯だ。

俺たち起きる時間はとても早い。そうでもしないと時間が足りないのだ。

起きて、顔洗って、飯食って、訓練を二時間ほどして、シャワー浴びて、店の準備。

とまあここまでの作業をするために早起しななければならないというわけだ。

それなのに九時に店を閉めた後も、紫 超頻繁 や幽々子 二日に一回ほど や、

稀に幽香や永琳が来たりして、長々と世間話をしていたりするので、寝るのが遅い。

平均睡眠時間は四時間というところか？あの布団じゃないととっくに死んでるな。

話が逸れた

俺たちは顔を洗った後に、居間でテーブルを挟み、これからあの半妖の少女を

どうするかという話をしていた。

「ま、話す必要も無いけどな」

「だな」

俺たちの考えはすでにこの家に住まわせてやるということまで一致している。

元いた森にほっぽり出すなんて論外だし、一人暮らしをさせるのも心苦しい。

まあ一番の理由は、俺がここに住まわせたいだけなんだが。美少女だし。おい

「紅、そろそろ飯。あの娘この分もな」

「っと、今日の当番は俺だっけか」

手元のお茶を飲み干し、紅が厨房に朝食を作りに行く。

ヘイスト×20状態じゃなくとも、二分くらいでできるだろう。

そういえば、この家に住まわせるのならあの娘用の服を用意してやらなくてはいけない。

どれ、どんなのがいいかと頭の中で思い描いているときに、居間の襖がほんの少し開いた。

「起きたか」

「……」

襖が少しずつ開いて、少女の姿が現れる。心なしか、昨晚より少しは顔色がいいようだ。

「おいで、もうすぐご飯ができるから」

そう言って笑いかけると、少女は少し迷ったような素振りを見せた

が、  
トコトコと歩いてテーブルの前に座った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……空気が重いんですがねえ？」

どちらかというとしゃべるのが大好きな俺にとってはこの空気はつらい。

何か、何か話題は無いか！？

「あ、あのっ！」

表情を変えずに悶々としているところに、少女が意を決したように話しかけてきた。

「なんだ「飯できたよ」。あ、起きたのか」……」

おいしいおいしいイイイイイイ！なんだこの「AKY」《あからさまに空気読まない野郎》は！

タイミング悪すぎだろ！狙ってたのか！？狙ってたんだろ！？ああん！？

「……まあとりあえず食べてからにしよう。おなか減ってるだろっ」

さすがにこの少女をビビらすわけにも行かないので、表面上は笑顔な俺だが、人を殺せるまでの殺気を紅にぶつけている。

(・・・なんかまずかったか?)

(タイミングがこれ異常ないというぐらい最悪だった)

(そういうこともある)

(じゃあうっかりお前を殺してしまうことがあってもいいな?)

(あつてたまるか!)

と心の中で会話をしながら料理をテーブルの上においていく。

あつという間にテーブルは料理で埋め尽くされた。今日は和食を作ったようだ。

まあおそらくはこの娘にとって久しぶりの食事で中華とか作ってきたら刺してたがな。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

食べる前に糧となってくれた食材に感謝の意味を込めて、手を合わせる。

これは料理人として、食う側の者としてやらなければいけないことだ。

俺たちとはもかく、人間も妖怪も食わなかったら死ぬからな。大事

なことだ。  
料亭でもこのことは紙に書いて壁に貼ってある。まあ強制はしていないけどな。

茶碗と箸を持ち、まずは鮭の骨でも抜こうかと箸をのばしたとき、少女が美味そつな料理を前に迷っている姿が見えた。まだ警戒しているのか？と思ったその時

グウ

と少女のお腹が鳴った。

「!?!?」

みるみる少女の顔が真っ赤に染まっていく。なんとも微笑ましいことか。

思わずクスクスと笑ってしまった。紅は口に含んでいたお茶を噴出さぬよう必死にこらえている。

「毒なんか入ってねえから、食っていいんだぞ」

証拠を見せるために、少女の鮭を少しとって、口の中に放り込む。  
・・・うむ、脂がのっついて美味い。いつでも旬の素材を食べる俺たちは本当に勝ち組だな。

俺の行動を見て少女は大丈夫だと判断したのか、恐る恐る鮭の身を取り、口に入れた。

「・・・美味しい」

「だろ？量はあるからよく噛んで食べるよ」

それから少女はいろんな料理に少しずつ箸をのばしていった。あまり表情を変えないまま黙々と料理を食べていた少女だったが、炊き立てのご飯を少しずつ噛みながら、ポロポロと涙を流し始めた。

「ど、どうした！？どっか痛いのか！？」

さすがにいきなり泣かれると、いくら俺でもものすごく焦る。

なんというか、女の涙を見るとなぜか罪悪感に包まれる。くそうおれがなにしたっていうんだ。

「えぐつ、いえ・・・また、ごんな<sup>ん</sup>ふうに、あつたかい、ぐずつ、ものが、食べら、れる、なんて・・・思つて、も、いながつたから・・・」

少女は途切れ途切れに言葉を発しながら弱々しく咽び泣いた。

・・・いつたい今までどれだけひどい生活してきたのだろう？

栄養失調寸前だったのだから、そうとうひどいものだったのだろう。俺にとつておいしいものが食べないつてのは拷問だな。

状況次第では一瞬たりとも迷うことなく死を選ぶだろうな。まあ創ればいいんだが。

温かい味噌汁が冷める頃に、少女は泣き止んだ。

真っ赤に泣き腫らした目には、先ほどのような弱さはすでになかった。

「・・・私が昔住んでいて「言わんでいい」!？」



自分の昔の話をしようとした少女の言葉を途中で遮る。

「君が話したところで俺たちにその辛さを無くすことなんてできない。」

ただ単に苦しかったころのことを鮮明に思い出してしまうだけだろっ?」

冷たくなった茶を一口啜り、言葉を続けた。

「それを言うのは君がその過去を思い出として話せるようになった時でいい。」

今君が言わなきゃいけないのは、この家に住むかどうかってことだ」

一瞬言葉の意味を理解できなかったようだが、すぐに悲しそうな顔に変わる。

「でも・・・私、人間じゃないのに・・・これ以上迷惑になるわけには・・・」

おいおい、どれだけ優しい娘何だいったい?この期に及んで人の心配するとはな。

どっかのスキマや亡霊少女やUSCに聞かせてやりたいね。紅なんか感動して涙流してるぞ?

「じゃあ言い方を変えようか」

俺は言葉を区切り、立ち上がって頭を下げた。

「君さえ良ければ、この家に住んではくれないかな？」

そう言っつてニッコリと笑いかける。

「君がどうしてもイヤだつて言っんなら無理強いはしないけど・・・  
答えは？」

つかの間の静寂が部屋を支配する。

数秒後、返事の変わりに鼻をすすする音が耳に入ってきた。

ああ、まったく泣き虫な娘だ

胸に飛び込んでくる少女を、腕を広げて受け入れる。

プラチナのような銀色のサラサラした髪の毛を撫でると、背中に戻された腕の力が強まった。

肉に食い込む爪が痛い、そのくらいは我慢しよう。

「そういえば、君の名前をまだ聞いてなかったな」

俺の胸にぐりぐりと顔を押し付けていた少女は顔を上げ、一度鼻をすすって言った。

「上白沢慧音です。よろしくおねがいます」

この瞬間、少女は初めての笑顔を見せた。

その代わりに、俺と紅の顔はムンクの叫びを超えた顔に変化していただろう。

## 半人半妖

慧音の自己紹介という名の衝撃的告白により一時的に思考停止状態に陥っていた俺たちだが、

ものの数秒で復活した。そしてすぐさま慧音の数秒の記憶を消し去った。

いやぁ・・・あの顔は下手したらトラウマになる顔だったと思うからな。

次の修行から精神と表情の訓練も追加しないといかんな。

「俺は八神零。で、こつちの漢「字がちげえぞ」チツ・・・男が那香川紅だ。好きに呼んでくれ」

発した言葉から字の違いを感じ取るとか何者だよ。

あれか？数百年も一緒に住んでるうちに心が読めるようになったか？

「で、今後この家に住むにあたっていくつか注意点があるからよく聞いてくれ」

「はいっ」

ピシッと正座をして真剣に聞く体勢に入る慧音。そこまでもいいわ。

「まず一つ目、さっきまで慧音が寝ていた部屋、まあ俺の部屋なんだが、その壁に

番号書かれた紙が張ってあったと思うけど、それには触るな。下

手すると危険だから」

「もし触ったら・・・まあ触るだけなら大丈夫だが、下手すると命の保障はできない」

俺の説明に付け加えられた紅の言葉に慧音が息を呑む。

まあ確かに危険っちゃ危険だが・・・命がなくなる・・・まあ下手すればなくなるか。

「まあこれはもう少しこの家に慣れたら説明するから。で、二つ目。夜に外には出るな」

慧音が少しだけ悲しい顔をしながら首を縦に振った。

「分かっているとは思うが、慧音には妖怪の血も流れている。妖怪の力をコントロール

できていない慧音にとって夜は自我を失う可能性が非常に高い。

この家の中にいれば

自我を失うことなんてないから安心しろ。窓から月を見ようがぜんぜん平気だ」

力の弱い妖怪は自分の力をコントロールできないから、理性を失ってしまう。

意思の疎通もできなくなり、本能に従うようになる。これが人間を襲う妖怪。

ある程度の知能を持つやつらは人間を殺したら俺たちにぬっころされることを知っているから

めったなことがない限り人間を襲ったりなんかしない。

半人半妖も同じように、昼間がいいが妖怪の血が濃くなる夜になる

と、徐々に興奮し、  
やがて本能が完全に理性を破ったとき、この前の慧音みたいなことになる。

このときに出てくる本能は、食欲や性欲、殺害欲その他などでれが出てくるかは分からない。

「だから今日の夜から妖怪の力を完璧にコントロールできるように訓練をするから。」

これができるようになれば丑三つ時に出歩いてても昼間となんら変わらなくなる。

むしろ体が楽になるだろうな。妖怪の血の恩恵で筋力その他が跳ね上がるから」

・・・多分。原作の慧音もそんな感じだった気がするし、まあ間違っ  
つてはいないだろう。

「そんなことできるんですか!？」

「慧音のやる気しだいってところだ。やろうと思えばできないこと  
なんてない」

かっこいいセリフを言う紅に、じゃあ酒飲んでみるや。と思った瞬間に  
息を吸うことができなくなった。すぐに能力で息を吸えるようになる。

この野郎肺の中の空気を固めやがった・・・なんつうえぐい使い方  
だよ。

つかこいつはマジで俺の心が読めるのか？実は妖怪だったりするの  
か？

「・・・次のが一番重要だ。守れなかった場合平穩に暮らせなくなると思え」

慧音の見えないところで能力のみの殺し合いが行われているが、それをおくびにも出さず

淡々と説明を続ける俺。この間にも紅の血管を詰まらせたりしている。

「ところで話は変わるが、慧音は俺たちのことをなんて呼ぶつもりでいる？」

慧音は少し迷った素振りを見せた後、答えた。

「え、えと¥¥¥お、お兄様と呼ばせていただきたいです・・・」

あー・・・俺今幸せを感じちゃってる。口元が自分の意思とは関係なく緩むのが分かる。

今すぐにでも抱きしめてほお擦りしたい感情に駆られるが、ここはぐっと我慢する。

「うん、家の中ならそれでもいいんだが、外にいる間は零様、紅様で固定してもらいたい」

そんなことをする意味がわからない、という顔でこっちを見てくる慧音。

頼むからそついう性癖があるとか思わないでくれよな。

「あー、説明するより直接見せたほうが早いかな」

ちらりと紅を見ると、小さく頷いて了承の意を示した。

「よし、ちょっと外に出るからついてきてくれ」

俺と紅が玄関に向かうと、慌てて慧音も立ち上がり俺たちの後ろについてくる。

その姿が小動物ぼくってキュンと来たのは秘密だ。

そうそう、言い忘れていたが今日は定休日なので、すでに分身が店で働いている。

今回のような、時間がほしいときにちょうど定休日が来るのは、物語によくある、

あの有名なご都合主義というものだ。深くは考えないほうがいい。

玄関の扉を開けて外に出ると、近くを歩いていた里人たちが一斉に振り返る。

『おはようございます神様！』

その場にいた全員が頭を下げて挨拶をしてくる。この光景にも慣れたものだ。

「ああ、おはよう」

「おはよう」

軽く手を振って挨拶を返すと、頭を下げた里人の中から一人、五十過ぎほどの男性が

近づいてきた。厳格そうな親父顔ながらもどこか若々しさを感じさせるその男は、

数年前に就任した、この里を取り仕切る里長である。

「先日は孫が大変お世話になりました」

男性はそう言っただけで頭を下げた。

「ハハツ、膝を擦りむいたところに絆創膏を張ってあげただけだろう。大げさな」

「それでも、神様に助けていただいたことにはお変わりありませんから」

そう言っただけで男性は何度も感謝の言葉を述べた。

そう、大体鬼子母神を退けて？から数ヶ月経ったところから、俺たちは里人から

親しみと敬意を込めて神様と呼ばれるようになった。それもそのはず、

稗田阿一が幻想郷縁起に俺たちと鬼たちの戦いを書くと同時に、俺たちの二つ名も書いたのだ。

そのひほとんどが神関係だったことから、神様と呼ばれるようになったのだ。

俺たちを便利屋と思っていたような里長は老衰で死んでしまったので、里人からの

信仰は勢いを落とすことはなく、むしろ加速していると言ってもいい。

そのせいで一時期は、神様の料理を食べるなんて恐れ多い、とかなんとかで

客がまったく来なくなったことがあったが、書くとても長くなるので割合する。



「慧音、こちら里長の藤見さんだ。挨拶しなさい」

俺の後ろに隠れている慧音を前に出し、挨拶をさせる。

「ふえ！？え、えと！上白沢慧音でひゅ！」

いきなり目の前に突き出されたのと持ち前の性格があいまってか、慧音は見事に自己紹介を噛んだ。

そしてまたすぐに俺の後ろに隠れる慧音。そんな慧音に苦笑しながら、藤見も挨拶を返した。

「私は藤見ふじみさんという。君のような半人半妖は何かと辛い事があるかもしれないが、

困ったことがあったら何でも言いたまえ。できるかぎり力になる  
う」

「ま、俺たちがいる限りは困ることなんて特にないと思うけどな」  
まったくその通りですな、と藤見は笑った。

なんか笑い方が俺の父さんに似てる気がするな〜とか思いながら、俺も微笑を浮かべた。

「これ以上の立ち話もなんだし、暇なら茶でも飲んでくか？」

そう言っつて後ろの家を指差す。

「いえ結構、これから仕事がありますので。今度暇ができたときに  
頂きましょう」

「そかそか、がんばれよ」

最後にもう一度頭を下げて、藤見は去っていった。  
里長の仕事って大変なのかねえ？今度出前でも持って行ってやるかな。

「あの・・・」

そうするとやはりカツ丼、この季節だと冷やし中華とかもいいな、などと考えていると、

いまだに俺の後ろにいる慧音が俺を見上げているのに気がついた。

「どうした？」

「あの人・・・どうして私が半人半妖だってわかったんでしょう？」

「そりゃあいつも半人半妖だからだろ」

慧音の質問に単純かつ明快に答える。

数秒の思考停止のあと、慧音は『へ？』と間抜けな声を上げた。

「ちなみにこの里にあと二人ほど半人半妖がいるぞ」

この追い討ちに、慧音は完全に混乱したようだ。

半人半妖が平々凡々と人間と仲良く暮らしている姿が想像できないんだろっ。

そりゃまあ半人半妖が三人も里にいるのに平然としている里なんて他にないわな。

「ひ、人里のみなさんは「うん、みんな当然知ってる」・・・」

もう言葉すら出ないようだ。いつぺんに話しすぎたかな？

「この里のみんなは藤見が半人半妖だつてことを十分に理解して、それでも里長に選んだんだ。」

まあ反対するやつがいなかったわけではないんだけどな。そいつはなんでも金で解決する様な

下衆だったから里から結局は追放された。運がよければ他の人里にでもいるんじゃないか？」

ちなみにこれほんとの話。自分を里長にしてくれないかと賄賂を持つてきたりしたが、

その額が俺たちの一日の収入より少なかったというミラクルな大馬鹿鹿野郎だ。

「・・・この里は非常識なんですね」

我に帰った慧音は、悟ってしまったような表情で言った。

「ん？常識的な里のほうがよかったか？」

慧音は無言で首を横に振った。

「そうか」

いつまでも家の前で突っ立っていても仕方がないので、とりあえず家に入る。

(夜まで暇だな・・・)

しまっておいた饅頭でも食ってゆっくりするかと思い、居間へ上がると、  
テーブルには饅頭の包み紙と『おいしかったわ』と書かれた一枚のメモ用紙。

どうやら暇を潰す理由ができたようだ。

半人半妖（後書き）

テストオワタ＼（＾o＾）ノ

また二ヶ月もあいてしまってますいません。

そのうえ出来が悪い・・・鬱ダ死ノウ

## 妖怪化（前書き）

お久しぶりです。本当にお久しぶりです。

長らくお待たせしてしまい、本当に申し訳ありません。

受験終わりましたんで、早速投稿しました。

久しぶりなのに低クオリティですいません・・・

## 妖怪化

俺の部屋の壁には、？から？の数が書かれた紙が張ってある。

はたから見るとぶんには何の変哲もない普通の紙だが、もちろんそんなわけではない。

名前をつけたわけではないが、あえて言うならば『転移方陣』と言ったところか？

その紙自体が膨大な構築式を含んでおり、ある条件を満たすことによつて、対になる

紙が張つてあるところに移動することが出来る。そのある条件はもちろん一枚一枚違い、

日常でありそうな行動から絶対にありえない行動まで幅広く設定してある上に、

ある規則性に則つた上で毎日ランダムのように変わるので、完全な解読はまず不可能だろう。

しかもこの紙は燃えず、濡れず、汚れず、破れず、切れず、朽ちず、折り目すらつかない。

頑丈に作りすぎてしまったのか、油断しているとたまたま指を切ったりする。痛い。

？の紙は、薬や毒、その他医療に関係する物の研究をする場所だ。

？の紙は、ナノマシンから兵器にいたるまで、機械に関する物の研究をする場所だ。

「……の紙は、能力の把握や作った物の実験に使う空間に繋がっている。」

「の紙は……まだ秘密にしておこう。説明するにはまだ早い。」

さて、ここまで説明すればもうわかっているとは思いますが、俺たちは今からこの紙を使って

移動することになる。まあ簡単に言えば、夜になると起こる慧音の妖怪化を何とかするため

どこか開けた場所に移動しなければいけないというわけだ。普通に妖怪の山とかに移動しても

別に良いっちゃ良いんだよ、俺と紅は。けど慧音が全力で嫌がったから紙を使うことにした。

「さて、説明も終わったことだし早速移動するぞ」

「はいっ！」

ただいまの時刻は七時半を少し過ぎたところだ。半人半妖の妖怪化は夜八時ごろから始まる

(って藤見が教えてくれた)ので、ゆっくりしている暇はない。家の中で自我を失くされると

面倒くさいことになる。主に置いてある者が壊される又は慧音が硬いもの殴って自爆するとか。

ちなみに硬いものの中に私たちも含まれております。

今回使う紙は？の紙だ。これが繋がっているところは妖怪の山の上空にある。

上空500メートル付近に作った、高さ10メートル弱、縦横200メートルほどの空間は

妖怪化を抑える訓練をするにあたっては十分すぎる広さだろう。



妖怪の山にも一つ戦闘できる空間は作ってあるのだが、あそこだと色々不都合がある。

地下深くにあるので夜に起きる妖怪化があまり出なかったりと、いろいろだ。

「んつと、今日の条件はなんだっけか？」

横で眠そうにあくびをしている紅に聞く。

「んつと……」りんご飴を右手に持ちながら左手の中指と小指で触れて七秒待つ』だな」

「めんどくさつ。誰だこれ考えたやつ」

「突っ込まんぞ」

「あ、俺か」

「素だったのかよ！」

「馬鹿め！引つかかったな！」

「ちつ！これで7834勝9772敗か」

くだらない会話をしている間に右手にりんご飴を創造する。

わかっているとは思うが、直径10cm以上じゃないと意味が無いので気をつけるように。

あと青りんごでも駄目だぜ？真つ赤なちk……リンゴじゃないと。

はい、着きました！妖怪の山の上空です！眺めがとてもいいです！

「ひゃあああああー！」

いや、あれだね。里の人たちが眠り始めているこの時間帯は静かでもいいね。

多少気温が高いが、夜の冷たい風が適度に冷やしてくれる。いやはや気持ちのいいことだ。

「あつ、ひゃ、ひい、ふええええええ！」

んで、その気持ちのいい時に、なんとも癒されるような可愛い悲鳴を上げているのは、もちろんのことみんなのアイドル、慧音だ。小さいころの藍には及ばずとも癒される。

さてさて、慧音が悲鳴を上げている理由はみんな知っているとおり、ここが上空だからだ。

想像してみしてほしい。地上500メートル付近で体を支えられているだけの自分の姿を。

ここから落ちたら即死は免れないという恐怖で足が竦んで泣きたくなってくるはずだ。

え？空間があるんじゃないか？  
わけ無いじゃないか。

地下ならまだしも、上空に大きな四角い箱のようなものが浮かんでいたら不自然すぎるだろう。

空中に浮いている？の紙をスツと縦になぞる。するとあら不思議、空間が出来上がりました。

中から見ると広い部屋のようになっているのに外から見ると何も無いようにしか見えない。

透明ならぶつかるやつがいるんじゃないかって？いやあ、この場所だからね。

天魔の住居である一本杉の上にあるこの空間に近づく恐れ多いやつなんていないし。

いるとしてもよつぼどの馬鹿か命知らずなだけだ。あ、俺たちは別だぞ？許可取ってるし。

まあ許可をくれなくても作るつもりだったがな。

ちなみに慧音、俺の胸に顔をうずめて震えているので空間ができたのに気がついていない。

もうちょっとこのままでm「零」ちっ、嫉妬かこのやろつ。

「慧音、もう離れても大丈夫だぞ」

恐る恐る下を見て、足場があるのにホツとしたのか、その場に座り込んでしまつ。

なんだろう、数百年ぶりに俺のドS心に火がつけら「零」鎮火された。

慧音落ち着き中……

「さて、時間も無いのでさっさとやり方を説明しようか」

「誰のせいで時間がなくなったのか説明してやるうか？」

「正直すまんかった」

慧音が恨みがましい目でこちらを見ている。ちょっと罪悪感。

しかしマジで時間もなくなってきたのでスルースキル発動。これにより文句は（ry

「いいか？慧音がやらなきゃいけないことは一つ。自我を保つことだ。

妖怪化が始まったら意識を保つことだけを考える。他の事は二の次だ。

足掻いて足掻いてそれでも駄目だったら俺たちが止める。その辺は安心しろ」

「あの……具体的にはどういう風にすればいいのでしょうか？」

どういう風について言われてもなあ……説明しづらい。

「あ〜っと、なんつうんだ、嫌がれ」

「嫌がる？」

「ああ。本能的に俺たちを殺して食ってしまおうっていう考えに支配されるだろうが、

それを本気で嫌がれ。半分は人間なんだから、本能を抑えることはできないわけがない。

または楽しいことを考えろ。あとはもう慣れるしかない。さ、そろそろ立ったほうがいい」

妖怪化が始まるころだ、と言葉をつなげようとした瞬間、慧音が頭を抑えて蹲った。

「あ……アあ……!?!」

瞳が徐々に紅く染まり、なにやら頭を押さえた指の隙間から角が生えてきている。

「慧音！気をしっかり保て！」

慧音は呼びかけに応じず、呻き声を上げて立ち上がった。瞳は完全に紅に染まっている。

角の伸びが止まると同時に、慧音は紅に向かって突っ込んでいった。

紅は慧音の突進を数度避け、完全に自我を失っていることを確認すると、さっさと気絶させた。

ちなみに、首の後ろを叩いて気絶させるやりかたは達人じゃないと危険です。よい子はry

「ま、最初からできるわけが無いか」

紅はふう、とため息をついて、床に慧音を寝かせた。

俺は寝ている慧音を包むように、妖怪化沈静（たった今命名）の結

界を張る。

「おーおー、逆再生を見ているようだ」

聳え立っていた二本の角はシルシルと頭の中に戻っていき、やがて見えなくなった。

目を閉じているのでわからないが、おそらく瞳の色も元に戻っているだろう。

「ところで紅よ、慧音が俺より遠いところにいたお前に攻撃しに行ったということは、

慧音は自我を失おうとも決して俺を攻撃したくは無かったという意味でいいのだろうか？」

「気持ち悪いから触りたくも無かったと捕らえるのが妥当だな」

「お前ハイスラでボコるわ・・・」

「その話はおいとして、そろそろ起きるぞ」

「おや、ずいぶんと早いな」

「結構軽めに叩いたからな。3 / 2 / 1「うう………?」な?」

紅のカウントと同時に気絶していた慧音が目を覚ました。が、まだ焦点が合っていない。おーい、こっち見る。

「あ……お兄様」

「あー、まだ動かなくていい。それよりどうだ?妖怪化したときの

「何か覚えてないか？」

慧音はふるふると首を振った

「……わかりません。何も考えることができなくなって、すぐに意識を失いました。」

「そうか……」でも「あ？」

「お兄様の声が聞こえた気がします」

俺の声が聞こえたってことは、意識が完全になくなるわけでもないってことだな。

じゃあ呼びかけ続ければさっきよりはよくなるんじゃないだろうか？

「よし、じゃあ慧音。さっきと同じ要領でもう一度やってみるぞ。」

三つ数えたら妖怪化がまた始まるから、がんばって気を保て」

「はい」

慧音を立ち上がらせ、俺は少し離れたところでカウントする。

「行くぞ。1、2、3、解除ッ！」

再び慧音の頭から角が生えてくる。ところであの角はどういう風に収まっているのやら。

レントゲンで見たら面白いことになってそうだな。

「ヴアア！」

淑女が出してはいけない声を上げながら突っ込んでくる慧音。  
結構なスピードなので目が怒り状態のナルガ ルガと化している。

とはいえ音速にすら達していないわけで。

ガシッ！（両手首を掴んで止めた音）

ガブツ！（首を噛まれた音）

グリッ！（肉を噛み千切ろうとする音）

「あだだだだだっ！早く正気に戻れ肉が千切れるように痛いイ！」

これはやばい洒落にならないくらい痛い。痛みで能力使えなくなる  
ことは無くても

痛いモンは痛い。余裕ぶっこいて筋肉ゆるゆるだったせいでおくま  
で刺さって尚痛い。

しかも妖怪化のせいで歯も尖ってきてるからさらに痛い。

「落ち着け！正気に戻れ！あああああ頸動脈に達するううう  
！」「ぷっ」

ヤバイヤバイヤバイ脳に血液いなくなったらさすがに能力使えね  
えよバカヤロー！

そして笑ってんじゃねえクソヤロー！これ終わったら絶対泣かす！  
むしろ殺す！

「慧音エ！抵抗しろ！自我を取り戻せ！そして歯を離せ！」

「う……ア」



必死の（マジで必死の）呼びかけが届いたのか、あごの力がほんの少し緩まった。

「よし！そうだ、抵抗し続ける！がんばれ！」

「お、兄……様……？」

徐々に首から歯が抜けていく。首に開いた穴から流れる血が着物を赤く染めていく。

ごめん嘘言った。赤というかどす黒いわ。傷ついたの静脈だったみたい。

んなこと言ってる場合じゃねえよ！

「そつだ！もう少しだ！本能を押しさえつける！」

「う、あ……ア」

完全に歯が離れると同時に、慧音はその場に崩れ落ちた。

「よつと」

地面につく前に体を支える。本能に打ち勝つのは予想以上に精神力を消耗したようだ。

起きても大丈夫なように妖怪化沈静の結界を張り、口についた（俺の）血をぬぐってやった。

「とりあえずは成功ってところか」

命の危機に瀕した俺を助けようともせず笑っていた男がいい笑顔で近づいてきた。

とりあえず、アレだ、うん。

「バルス！」

「目があ！目がああああああ！」

目潰しからのおゝ

「右ストレートオ！」

このままツ！！親指を！！こいつの！！

目の中に……………つつこんで！殴りぬけるツ！

「なっ！何をするだアーーーーッ！ゆるさんッ！」

「紅オオオーーーーッ！君がツ、泣くまで、殴るのをやめないッ

！」

「よ、よくも……………よくも。よくも！このぼくに向かって……………このきた  
ならしい阿呆がアーーーーッ！」

「UUURRRRRYYY!!！」

「貧弱！貧弱ウ！」

結局、起きた慧音に止められるまで壮絶な殴り合いは続いた。

## 妖怪化（後書き）

### 後日談

「慧音、寝る前に風呂入って来い。汗びっしょりだろう」

「はい。どこにありますか？」

「廊下を突き当たって右にある。着替えは置いておくからゆっくり浸かって来い」

慧音をさっさと送り出し、部屋に布団を敷いておく。

部屋はいくつか余っているのですが、そのうちの一つを慧音の部屋にしたのだ。

必要最低限のものはそろっているし、特に問題は無いだろう。

さて、お茶でも飲ま「あの……」「んあ？」

後ろを振り向くと、風呂に送ったはずの慧音がシャンプー片手に立っていた。

「見たことの無いものがいっぱいあるんですが……どう使えばいいんでしょうか？」

……しまった、失念していた。

「あの……もしよかったら、一緒にお風呂に入って、説明してくれ

「ませんか？」

茹蛸のように顔を真っ赤にしながらもじもじと言つ慧音。

……k n e g g ?

その後割り強引に風呂場につれてこられ、結局一緒に入ることになった。

……なにもしないよ？ホントだよ？

理性と本能の狭間（前書き）

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺はいつも通りログインしたと思ったら、いつの間にかP.V.10  
0万突破していた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが、

俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超ウイルスだとか、

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

## 理性と本能の狭間

時刻は深夜、ちょうど十二時を過ぎたあたりの時間だが、慧音はまだ起きていた。

いや、起きていた、と言うより、眠れなかった、と言うのが正しいだろう。

布団の中でかれこれ一時間以上寝転がっているのだが、どうも寝ることができない。

夜、布団に入ってから冷静に考えてみると、色々変なことがあるすぎて混乱してきたのだ。

変な二人に妖怪化しているときに保護され、すぐに出て行くことしたらここに居ていいと言われ、

おいしい食事を食べさせてもらって、その人たちは里人に神扱いされていて、見たことも無い

変な能力まで持つていて、妖怪化を抑える方法まで教えてくれた。

おかしい

色々考えて、結局出た結論が逸れであった。

別にここが嫌なわけではない。二人ともいい人だったし、里の人もやさしい人ばかりだった。

ただ、うまく行き過ぎているのが、逆に不安をもたらした。

思えば、この家は見たことの無いもので満ち溢れていた。

そこそこ上流階級の貴族の長女として育った自分には、ある程度の

学がある。

それでも、この家にあるほとんどのものはまったく理解できなかった。

今自分が寝ているこの布団だって、昔使っていたものよりずっとふかふかで心地よい。

窓から入る月明かりが自分を照らしても、妖怪になることも無い。

本当は全部夢で、目が覚めるとまた元に戻ってしまうんじゃないか？ そんなことを考えると、体が小さく震えた。

なんだか、急に怖くなった。自分は今ここに居ると言う証拠がほしくなった。

自分は今もう一人じゃないという、確かな証拠がほしくなった。

そして気がつくとき……

(きちちゃった……)

いつの間にか自分は枕を抱え、家主の部屋の前まで来ていた。

こっそりと襖を開けて中を覗いてみると、部屋の真ん中に布団が敷かれ、兄がいた。

規則的な寝息が聞こえることから、どうやら完全に寝入っているようだった。

「失礼します……」

口の中で小さくつぶやき、襖をゆっくりと開けて中に入った。部屋の中は昼間と変わっていないが、布団の枕元に香が焚いてあるのを見つけた。集中しないとよくわからないような淡い匂いだが、自分が落ち着くのがわかった。

香の微かな香りで落ち着いたせいか、自分の行動が急に恥ずかしく思えてきた。

考えれば、夜中に異性の部屋にこっそりと行く、というのは、夜這いと言うものではないか？

変な妄想が頭を駆け巡り、顔が熱くなるのを感じる。おそらく、耳まで真っ赤だろう。

十数分そのまま迷っていたが、ついに覚悟を決めて、布団の左側に潜り込んだ。

人肌で暖められた布団が眠気を誘う。

枕を頭の後ろに置こうとして、ふいに広げられた腕が目に入った。何を思ったのか、次の瞬間には枕を放り出し、その鍛え上げられた腕に頭を乗せた。

意識せずにしてしまった自分の大胆な行動に、自分でびっくりしてしまった。

頭が重くて起きてしまったらどうしよう、などと色々考えて、やはり枕をしようとして、急に兄が自分を抱きしめるようにして寝返りをうった。

「きゃっ!?!」



大きな声を出してしまったことに慌てて自分の口をふさぐが、規則的な寝息はそのままだ。起きなかつたことに安堵して上を向くと、また声が漏れそうになつた。

顔が、近い。

その距離およそ十センチメートル。乙女な慧音にこの距離はやばかつた。

(pおきじゅbgkynfjhb!!?)

恥ずかしくて思考がまとまらない。胸の鼓動が今までに無いほど激しくなる。抜け出そうにも、起きてしまうのではないかと思うと体が動かなくなる。

嬉しいやら恥ずかしいやらで飛びかける意識を必死で戻すこと約二十分、どうにか落ち着いて現状を受け入れることができた。

(あ、けど何でここに来たのか忘れちゃった……)

結局、思い出している途中で眠気が強まり、慧音はそのまま眠りに落ちた。



なにこの状況！？ちょっと誰かここに来て説明しろや！

大丈夫だ！考えうる最悪の状況は無いはず！俺は昨日酒に酔ったわけでもない。

というか酒に酔ったこともないし、麻薬的なものを吸った記憶も無い。

おk、間違いを起こしたわけではない。これは間違いのないようだ。ではなぜ慧音が俺の布団に？

？俺が寝ぼけて慧音の部屋に来ている……ありえん。ここは俺の部屋だし、

夜中に徘徊したことなんて一度も無い。どこぞのボケた老人じゃあるまいし。

？慧音が部屋を間違えた……これはまだありうるか？まだここに来てから日も浅いし、いや、慧音のほつが先に寝たんだからこれはありえない。いたら気がつくはずだし。

？夜中に慧音が潜り込んだ……これが一番可能性が高いか。夜トイレに行つて

その後寝ぼけて俺の布団につてとこか？まさか故意にじゃあ……ないよな？さすがに。

ああ、駄目だこれ以上考えてられない。早く起こさないとマジ理性崩壊する。

寝顔マジ可愛い腹筋に当たってる慎ましい胸とかサラッサラの髪とか……イカン！





そして布団と畳は血みどろである。ついでに零の着物も血みどろである。

しかし慧音に一滴も血がついていないのは、完全にイツちゃってる零の能力である。

自我を失って尚この能力のコントロールはさすがと言つべきだろう、言いたくも無いだろうが。

紅はさつさとここから逃げたい気持ちでいっぱいだったが、さすがにこのままだと

慧音が壊れるまでいじられる可能性があるので、早急に零を正気に戻すことにした。

こっそりと零の後ろに近づいて……

キュッ

どさっ、という音とともに零が布団に沈む。必然的に慧音も沈む。なんのことはない。頸動脈を止めただけである。息の根は止めてない。

「こいつの可愛いもの好きにも参ったものだな」

実は、こういったことは今回が初めてではない。

紅も紫から聞いたことなので実際に見るのは初めてだが、一度藍にやったことがあるらしい。

まだ四人で紫の家に住んでいたころ、夜に居間でバイオハ　ードを見ていたのだが、

布団に入ってから藍がそれを思い出して、怖くて眠れなかったそう  
な。

いつも一緒に寝ている紫はその日幽々子のところに止まっていたの  
で、

夜中に一人で居るのが怖くなって、零のところにもぐりこんだらし  
い。

で、朝起きて、紆余曲折あって今日と同じようなことになったと言  
うわけだ。

元の世界に居たところは犬や猫を見ると一目散に撫でに行つたが、さ  
すが人にいろいろと

することは無かつた。しかし、幻想郷こっちに来てからは常識がなくなっ  
たよつで、

なんかもう色々と容赦がなくなっていた（主に映姫や藍に対して）

「ま、起きたらゆっくりとOHANASHIすることでしょう……」

零の悲鳴が里に響き渡つたのは、それから三分後のことである。

理性と本能の狭間（後書き）

祝！百万PV突破記念！

零「いやあ、めでたい！まさかここまで見てくれる人が居るとは」

紅「お前の愚行がなければもっと増えていたかもな」

作「それ遠まわしに俺への暴言だからやめてくれ」

紅「そのつもりで言ったんだ」

作「最弱ウウウ！自分のキャラのしつけがなってねえぞ！」

最「お前にだけは言われたくない」

零「なんだ？まるで俺が常識知らずみたいな言い方だな」

紅&最「そう言ってるんだ」

零「……」

作「まあまあ、祝い事なんだからそう邪険になるなよ、なっ？」

紅「……それもそうだな」

作「ということとで、こんな駄文を読んでくださった皆さん、心より感謝申し上げます。更新が遅い私でございますが、高校に行っても長々とがんばっていきます。読者の皆様、これからも平凡少年が幻



想入りを……

作&最&零&紅『よろしくお願いします!』

## 罪には罰を

季節は秋

人里から見る妖怪の山が紅葉で紅く染まり、なんともいえない風情を出す。

作物の収穫のため里人は忙しく走り回り、来たるべき冬に備えようとしている。

幻想郷は今日も平和です。

〜完〜

「終わらせんなや」

紅はいつの間にもやらモノローグまで突っ込みを入れるようになった。以心伝心と言うかもはやこれは一心別体みたいな感じになっている気がする。

まあそれは置いておこう。

しばらく俺に近づかなかった慧音（ガチで落ち込んだ）も近づいてくれるようになったこの頃、

店に来る人がどんどん増え始めている。食欲の秋とはよく言ったものだ。

ちなみに言うと、幽々子の食べる量もどんどん増えている、kg単位で。

洒落で作った超大盛り炒飯（米一升）を四回もお代わりしたのはさすがに壮観だった。

その次の日、二キロ太ったと嘆いていた。幽霊や亡霊も太るものらしい。

むしろアレだけ食べておいて二キロしか太らないと言うのはおかしいのだが。

さてさて、そろそろ本題に入ろうか。

たった今天魔から一通の手紙が届いた。長ったらしい前置きがあるが、内容を簡単に言うと

『明日妖怪の山で宴会するから料理とか酒とか用意してくれ』とのことだ。

まあこれはいい、どうせ宴会のたびにやってることだし、楽しくもある。

問題はそれじゃない、この手紙を持ってきたやつが誰かってことだ。今俺と紅（慧音はお買い物中）の前に座って茶を飲んでいるこいつだ。

「あややや、お茶までが一級品とは流石ですね」

鴉天狗、しゃめいまのあや射命丸文

能力は確か……『風を操る程度の能力』……だった気がする。

紫とはまたベクトルが違う感じがするんだが、なんとなく胡散臭い。スキヤンダルのためなら平気で捏造するようなやつってイメージしかない。

無論、それは二次創作とか呼んで勝手についたイメージだから大丈夫だとは思うんだが……

「でわでわ、早速取材を始めさせてもらおうとしましょう」

懐から手帳と万年筆を取り出し、口で万年筆のキャップをポンと取る。

その表情は大好物のお菓子を目の前にした子供のようだ。邪気は見られ……ないな、うん。

ちらりと横目で紅を見やると小さく頷いた。おそらくは大丈夫だろう。

「OK、何が聞きたい？」

と紅。最近髪が伸びてきて少し目にかかっている。

「では最初に、この料亭を開かれたのはいつですか？」

万年筆の先をペロリと舐め、手帳のページにあてがいながら聞いてくる。

「よく覚えてないが、おおよそ二百年位前かな？その辺は稗田の方が詳しいだろう」

「では、この料亭の名前の意味は？」

「外国の言葉で『幻想郷』って意味だ。零が付けた」

矢継ぎ早に繰り出される質問に紅が一つ一つ答えていき、所々俺が補足を入れる。

料亭の話から鬼との戦争、更には慧音のことまでいろんなことを聞かれた。

すでに最初の質問から五十分以上経っている。質問の数は百を越えたころだろう。

「では最後に、妖怪の賢者である八雲紫や幻想郷最古参の妖怪である風見幽香などと

付き合いがあるそうですが、恋愛云々の話はないんでしょうか？ それについての興味は？」

「ん〜、今のところあいつらに恋愛とかの興味はないな。半分家族みたいなものだし。

仮にそういう関係になったとしても、零がいるからな。一人暮らしならアレだけど」

少し言いくさそうな顔をしながら言葉を口にする紅。それを見てニヤニヤとする射命丸。

今の言葉からなにを考えたのかは知らんが、とても嫌な予感がする。

紅の答えにネタにできそうなところは見当たらなかつたと思うんだ

が、どうにも心配である。  
何か変なことを書かれないうつ、俺はできるだけ口数を少なくして答えることにした。

「そういう女性との恋愛云々についての興味は特にない」

正確に言うと、そこまでない、となるのだが、曖昧な表現をするのは避けたほうがいいと思う。  
恋愛にまつたく興味ないなんていう男が居たら、そいつは本能と言うものが存在しないのだろう。

「あやや、貴重なご意見をありがとうございます」

ぱたんと手帳を閉じて深々と頭を下げる射命丸。なんだ、意外に礼儀正しい。

心配する必要もなかったかな、と必要以上に警戒した自分を少し恥じつつ、手土産を持たせる。

「それ、自家製梅干。天魔に渡しておいてくれ。それとこっちはお前のぶんな」

「あややや、どうもすいません。押しかけたのはこちらだというのに」

「いやあ気にするな。天魔に届ける手間が省けてちょうどいいだけだ」

「では！新聞ができるのを楽しみにいいいいいい……」

ドップラー効果をきかせながらすごいスピードで飛んでいった射命

丸。

幽香より速いんじゃないか？アレ。幻想郷最速ってのは案外当たってるのかもな。

「ただいま戻りましたー」

「おう、おかえり」

ちょうど慧音も帰ってきたことだし、お昼ご飯としましょうか。

……なんか最近店を分身にまかせっきりな気がする。自分たちの飯以外作っていない。

まあ数年作らなかつたとしても料理の味はほとんど落ちないだろう。

だって、自転車とかに数年乗らなくなつて、体は勝手に動くだろう？それと同じだ。

もはや体を通り越して魂まで料理が染み込んでいる気がする。

まあどうでもいいことか。今は飯だ。

～次の日～

少し肌寒さを感じるようになってきた朝、鍛錬のあとは一杯の牛乳でエネルギーを補給する。

近所の農家からもらってくる絞りたての牛乳は現代の牛乳とは比べ物にならない美味さである。

殺菌？『俺の飲む牛乳に悪性菌が存在することは不可能』で消滅してくれる。

最近こんなくだらないことにしか能力を使わない俺。まあ争いごとに使うよりはよからう。

外に出ると、すでに大人たちは働き出し、子供たちは元気に走り回っている。

首を上に向けてみると、青空の下をカラスや天狗が飛び回って……天狗？

何でこんな時間に天狗が人里の上を飛んでいる？

（結界に引っかかってないってことは、悪意や敵意があるわけじゃないさそうだが……）

と考えていると、ヒラヒラと上から紙が落ちてきた。見回してみると、それは里中に散っている。

「号外号外！文々。新聞だよ〜！」

……どうやら、里中に舞っている紙は新聞らしい。よく見ると、飛んでいた天狗は射命丸だった。

新聞撒くと片付けが大変そうだから、次からはやめさせることにしよう。

「なんだ？すごいことになってるな」



家からひょっこりと出てきた紅も、目を丸くしている。

ちようと近くに落ちてきた新聞を一枚ほど掴み取り、片方を紅に渡す。

新聞、といつても現代のような何枚も重なって折られている灰色のものではない。

A4サイズの一枚の紙に、びっしりと記事が並べられ、所々に白黒の写真が張ってあるだけだ。

手書き文字のようだが、印刷はしてあるようである。おそらくは河童の技術だろう。

『文々。新聞』というタイトルの文字は見事な達筆で書かれていた。

まあそんなことはどうでもいい

問題はこれだ。タイトルの横に遠目からでも分かるようなかさで書かれている大見出し。

手書きなんだろうが、実に見事なポップ体で書かれているこの文字。

『人里の守護神、まさかの男色家か!?!』

待て

落ち着け俺

高鳴る衝動を押さえるんだ俺

新聞を裏にして、一度深呼吸だ。はい大きく息を吸ってー、はい

「吸ってー、はいてー。」

落ち着いた？もう大丈夫か？どんなものを見ても慌てず、冷静に対処できるか？

「おーけーおーけー、ならば今一度見直そう。何かの間違いだったのかもかもしれない。」

今の俺なら何があっても大人でいられるはずだ。

はいじゃあ裏返しにした新聞をもう一度ひっくり返してみるよ？せーのっ！

「!?!」

「人里の守護神、まさかの男色家か」

脳が噴火直後の溶岩をかけたような熱さに襲われるが、今は置いておこう。

パキッ、という心地よい音とともに、里中にはら撒かれた新聞の文字が消える。

数秒後、また新たな文字が滲むように浮かんできた。

『今のは天狗の悪戯だ。もし新聞の内容を信じたら、お前に明日は来ない。by守護神』

一応これで新聞を信じようとするやつらはほとんどいなくなるだろう。

今記憶を消すと証拠がほぼ完全になくなるので、まだ記憶は消さない。

「さアて、まずは捕獲してからだなア」

隣にいる相棒が、黒い笑みを浮かべながら呟いた。額には青筋はすではちきれそうだ。

俺も女に暴力を振るってはいけないとか、色々とフェミニストみたいなことを言ってきたが……

「躰ならかまわないよな……」

パン！と音を突き破る音を残し、妖怪の山に向けて飛ぶ。

自分でも抑えきれないほどの怒りを覚えたのか、この時点で理性は完全になりを潜めた。

この日、天魔はご機嫌だった。

いつもより目覚めがよく、眠気を引きずることもなく起きて窓を開けると、外はさわやかな秋晴れ。

朝ごはんには好物の零特製梅干がついていたし、仕事もいつもより少ない気がする。

文句の付けようがない、とても平穏な日だった。

しかし、その平穏はすぐに破られた。

「たたた助けてください天魔サマああアアアッ！！」

バギン！という襖の壊れる音とともに、突如として一人の天狗が飛び込んできた。

ただ事ではないのが天狗の様子から伺えるが、それでも静かな時を邪魔され、表情がわずかに曇る。

何事だ、と事情を聞こうとしたところで、更なる不幸が訪れる。

バガン！と先ほどとは比べ物にならない衝撃が起き、壁ごと部屋

の入り口を吹き飛ばされた。  
今度こそ、天魔の表情が完全に歪む。こんなところに突っ込んでくる馬鹿なんて分かりきっている。  
少し灸をすえてやらねば、と機嫌を悪くして考えるが、このときは本当に運がなかった。

なにせ、突っ込んできたやつらは不機嫌という言葉では表せないほど怒り狂っていたから。

『そいつをこっちによこせ』

空間が歪んで見えるほどの高密度な力を纏った二人の男を見てすぐに逃げ出さなかったのは、  
天狗の長であるゆえのプライドと、自分の力に対する自信のおかげだろう。

「理由も示されず、同族を売ることはできんな」

『こんな記事を作りやがったからだ』

硬いカードでも投げたかのようにシウルシウルと回転する紙が天魔の目の前に飛んできた。

慌ててそれをキャッチすると、驚くべきことが書かれているではないか。

『人里の守護神、まさかの男色家か！？』

見出しの下に、二人のコメントが掲載されている。

紅「恋愛とかの興味はない。零がいるからな」

零「女性に興味はない」

とんでもないところで略されたものである。が、天魔はそのことを知る由もない。

「……………これは本当に言ったか」「あ？」「……………すまん」

勇気を出して確認してみるが、この様子からして間違いなく違うだろう。

とすれば、天魔の取るべき行動は一つしかない。

「勝手に連れて行け……………」

すなわち、下手人を突き出すことである。

会話の隙を突いてこっそり逃げ出そうとしている射命丸の背がビクウ！と震える。

ダッ！（全力で逃げ出す音）

ガシッ！（空しく捕まえられた音）

恐る恐る振り向くと、満面の笑みを浮かべる男が二人。その二人の口が同時に動いた。

ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だ

「い、いやああああああああアアアアアアアアアアアあああ！」

その後、射命丸が二人のことにに関して脚色を入れるのはなくなった  
そうなの。

どんな拷問を受けたのか、それは当事者のみが知っていることである。



罪には罰を（後書き）

夏休みなので復活。長らくお待たせいたしました。

幻想郷の夜々前編 (前書き)

作者「夏休みの間に三回くらいは更新したい」

宿題「そげぶ！」

けっきょく二ヶ月以上空けるといふ暴挙。

本当に申し訳ないです。

## 幻想郷の夜〜前編〜

月が幻想郷の真上に昇るころ、妖怪の山は騒乱に包まれていた。数多の妖怪どもが跋扈し、劈くような叫び声があたり一帯に響く。

肉を喰らう音がした

鋭い牙が生えた妖怪が噛む肉からは熱い液体が滴り、その口を汚していく

何かを嚼る音がした

その液体を飲むごとに、妖怪の口もとは引き裂かれたような笑みが浮かんだ

ここまで言えば、もはや何が行われているか考えるのはたやすいだろう。

妖怪どもが本能の赴くままに行動する阿鼻叫喚の地獄絵図。

そう

宴会である

「いやー、作った作った」

ぷらぷらと腕を揺らしながら呟いているのは他の誰でもない、俺。

今日は相当の数の妖怪が集まっているので、満漢全席を5セットほど作った。

持ち前の料理スキルを存分に振るったわけだが、さすがにこの量はきつい。

紅と一緒に作ったと言うのに、一時間もかかってしまったのだ。

……え？満漢全席5セット作るのに一時間ですむわけがないって？  
ヘイスト×20を舐めてはいけないな。僕を誰だと思っているんだ

い？（キリッ

今回は春巻が会心の出来だった。鬼道丸が『ううううまあああいいいぞおおおお』  
と味皇ばりのリアクションしてたから、間違いない。

ひとまずその辺の席に座り、適度に腹を満たしながら周りを見ている。

まず、紅と蒼を発見。

小さなテーブルで囲碁（もしくは五目並べ）をやっているようだ。

「神の一手！」「初手天元……だと……！？」とかやっているから、たぶん囲碁。

神の一手と言っているのが蒼だということに突っ込みたいが、我慢しておく。

次、萃香と勇儀を発見。

酒飲み勝負をしているようだが、ジョッキや杯ではなく樽で飲んでいるところがポイント。

萃香が自分よりでかい樽から酒を飲んでいるのは、非常にシユールだったりする。

いったいその質量はどこに消えているのか、是非とも教えてほしいものである。

次、幽香と鬼姫を発見。

広場のところで壮絶なバトルを繰り広げている。若干幽香が劣勢。あの速度と威力だと間違いないくらいに被害がいくがその辺は考えているのか結界が張ってある。

環境破壊レベルの戦闘の時にはどちらかが結界を張るのが暗黙の了解である。

次、天魔と妖忌を発見。

爺二人でどちらの孫娘が可愛いか討論していたようだが、いつまでたっても決着がつかない。

結局、どっちも可愛いと言っことで落ち着いたようだ。この孫馬鹿どもめ。

ちなみに天魔の孫の名前、鞍馬風嵐かまふうらんというらしい。いつか会ったら愛でる

次、幽々子と紫を発見。

点心を食べながら取り留めのない話をしている。

妖忌の孫が可愛かった、とか未来に行って遊んできた、とか

なんか妖夢がもう白玉楼にいるみたいなので、今度会いに行くことにする。

最後、慧音と藍を発見。

向かい合って笑いながら何か話しているが、なぜか目だけが笑っていない。

聞こえてくる会話はこんな感じ。

「あなたは兄様とどういうご関係で？」

「百年ほど一緒に住んでいたんですよ。とっつっても可愛がってくれましたよ?」

「へえ、そうなんですか。まあ私は現在進行形で可愛がってもらっているんですが」

「お情けで住まわせてもらっているだけで何を偉そうに。慈悲深い兄様に感謝しなさい」

「ペットとして愛でられていただけの獣が言いますね。さっさと野生に戻りなさい」

「「ふふふふふ」

「おいおい、喧嘩するなよ」 紅

「「紅兄様は黙っていてくれますか！」

「「……あ？」

「「ごめんなさい」

いやあ、こうしてみると中々にカオス。まあみんな楽しんでいるよ  
うなのでよしとする。

まあ一番カオスなのはテーブルの一角で麻雀やってるやつらなんだ  
けどさ……

「きたぜ……ぬるりと……」「面白い……狂気の沙汰ほど面白い……」「じ  
じい……その牌だ……！」「悪いな……ノートンだった……！」「倍プ  
ツシュだ……！」「倍プツシュだ……！」「倍プツシュだ……！」  
「「「「倍プツシュだ……！」「」

……なにあれこわい。

なんかあのテーブルだけ空気が違うんですけど。色々と淀んでるん  
ですけど。

なんかみんな鼻が長いんですけど。人を刺せるくらいアゴ尖ってるんですけど。

暇だったからって麻雀を広めたのは間違いだったのかもしれない。つかあれ驚巢麻雀じゃね？あの半自動卓は河童製か？河童製なのか！？

横においてある注射器はただのオブジェだよな？何とか言えよ！

背中に視線を感じたので振り返ってみると、入れてもらってこいよ、とアイコンタクトを送る

紅と蒼がいた。そうか、貴様らは俺に出血多量で死ねと申すか。よろしい、ならば（ry

「で、絶賛貧血中ってわけね」

「勝てると思ったのが、間違い、だった。あゝ、頭、クラックラする」

結局、興味本位で麻雀に参加してしまった俺である。

リアルで『俺の暗刻はそこにある…』とかやられるなんて思っても



いなかった。

若干視界が霞んでいるが、気合でカバー。近くにあった岩に座り、肉料理を食べて血を補給する。

隣に座った紫が揺らしてくる。止めるマジで意識がなくなるウボア―

「能力で戻せばいいじゃない」

「血、足りない。思考、できない。結論、能力使え、ない」

片言になるレベルで血が足りない。本能的に肉をカツ喰らっているが、ほぼ気休め。

注射器で血を戻そうにも時すでに時間切れ（永琳がサンプルとか言っ  
って持ってた）

ゾロの気分がよく分かった。血が足りないと眠くなるのな。永眠し  
そうだが。

「お酒を飲めば治るんじゃないかしら？」

「アホ、この状態、だと、さすがに、酔う。そのまま、死ぬ」

いつもの俺はザルを通り越してワクだが、今飲んだら酔ってそのま  
ま死ぬ自信がある。

比喻表現ではなくマジで閻魔のお世話になる。死神に船で運ばれる。  
当人はそこで酔っ払った鬼相手に真っ赤な顔して説教している。鬼、  
なぜか爆笑。

映姫さまろれつがまわってませんのことようふふ 思考崩壊

……もつと血になりそうなものを取ってこよう。

「あ、ムリ」

立ち上がるうとするが、強烈な立ちくらみにより失敗。尻が岩に逆戻り。  
ふんばれずにそのまま横に倒れる。ぽふんと柔らかな感触が耳の辺りに感じる。

「あらあら、本当にダメなみたいね」

所謂、膝枕。嫌がっていないようなのでしばし堪能。柔らかくて気持ちいい。  
起き上がる気力が失せる。予想だにしていなかった眠気が俺をふるもっこ。  
逆らったら負けだと思ってる。

膝に感じていた重さが増した。どうやら彼は寝てしまったようだ。規則的な寝息が、周りの喧騒に巻き込まれずにするりと耳に入ってくる。

「黙っていればかつこいいのにねえ」

常々思う。なぜ自分から周りの評価を下げるようなことばかりするのか。

傍から見ればもてる顔をしているのに、その行動で全てを台無しにしている（断言

もつとも、顔や性格がいいからといって私が好きになるわけでもないのだが。

膝上で夜風に揺れている髪をゆっくりと撫でる。

……予想以上にさらさらで、多少の焦りを感じた。負けてないわよね？

「あらあ、なんかいい雰囲気をかもし出してるわね」

妙に艶っぽい声が耳に入ってくる。

顔を上げてみると、顔をほんのりと赤く染めた幽香がこちらに歩いてきた。

手に握られている酒瓶の中では、半分ほどに減った酒がちゃぷちゃぷとゆれている。

「ずいぶんと酔っているようね」

「いつも以上にいろんなお酒があってね、色々試したらこうなっちゃったわ」

そういつて瓶ごと酒をあおる。中の酒が三分の一程度まで減った。

そういえばさつきまで鬼子母神と試合をしていたようだが、どっちが勝ったのだろうか？

「で、そいつはなんでぶっ倒れてるわけ？」

私の膝の上で寝息を立てている男を指差して聞く。

指した指をそのまま零のわき腹に突き立てた。オウフ、と苦しみの声が出られる。

とりあえず事情を説明する。

「馬鹿ね」

哀れなことに、一言で切り捨てられた。まあ私も同感なのだけど。

「……日頃の恨みを晴らすなら今がチャンスよ」

なんとなくそんな言葉を口走った私も、少し酔っているのかもしれない。

「いい考えね」

「おい、やめろ馬鹿。この会話は早くも終了ですね」

わき腹の痛みで目を覚ましたのか、零が物騒な会話をとめる。

話せる程度には回復したようだけど、起き上がらないところを見ると、その程度らしい。

「いぢめはよくない。そんなだからお前らはいつまでたっても独り身なのだ」

「今酒飲んだら死ぬかもしれないわよ」

「じゃあ少ないけどこれ一気ね」

「嘘だといってよバーニィ」

抗議の声も空しく、酒瓶ごと口に突っ込まれる零。

レモンハートと書かれた酒瓶から、どンドン酒が口の中に流れ込んでいる。

一度吐き出そうとしたので、上から手で押さえつけて飲む以外の選択をなくした。

全て飲み干したのを確認して、瓶を口から離してあげると、零は震える口を開いた。

「頭が、熱い」

その言葉を紡いだ直後、再度零は意識を手放した。

果たして、最初に異変に気がついたのは誰だったのか。

貧血状態で無理やり酒を飲まされぶっ倒れた零が、ほんの十数秒で起き上がった。

軽く頭を振ると、目の前に垂れ下がった前髪を後ろに掻き揚げる。露わになった目には、いつものふざけた雰囲気はなく、妖しい光が灯っていた。

「あら、ずいぶんと起きるのが早いじゃない。もっと飲ませるべきだったわね」

まだ立ち去っていなかった幽香が、サディスティックな笑みを浮かべて零に近寄る。

酔って弱っているうちに虐めてやるうという魂胆を隠そうともしていなかった。

「いいや、これ以上飲んでも意味はない。酔いは最高潮まで達している」

柔らかな笑みを浮かべて零は振り返る。男だというのに微かに紅く染まった頬が妙に色っぽい。

その顔から、いつもの冗談を言うように、零はさりげなく口に出した。

「なにせ、“オレ”という存在はどうしようもないほど君の美貌に酔っている」

世界が、止まった。

幽香、それと傍にいた紫の思考は停止し、周りの喧騒が遠ざかっていく。  
言われた言葉は分かっているが、言葉の意味が理解できない。二人ともそんな顔をしている。  
が、そんなことは関係ないといわんばかりに零は次の言葉を口にす  
る。

「嗚呼、オレはなぜ今まで気づけなかったのだろうか。こんなに魅力的な人が傍にいるのに。」

オレの中に渦巻くこの気持ちは、この世にあるどんな言葉を使っても伝えきれないだろうが

愚直に、素直に、思い浮かんだこの言葉を君に送ろう。狂おしいほどに、愛している、幽香

ゆらりと音も無く立ち上がった零が、ゆっくりと幽香に近寄る。

「~~~~ツツ!？」

そこでようやく意識が戻り、言われた言葉の意味を理解することができた。

生れ落ちてから幾百年、その間一度たりとて、好意の言葉を言われたことなどなかった。

そんな幽香が、身近に思っていた男性から、いきなりこれ以上の無いほどの好意の言葉。

しかも、いつものおちゃらけた雰囲気は微塵もなく、その顔は真剣そのもの。

「いいいいまごろ気がついたのかしら? まままったく、見る目に

「やいわねっ!?!」

結果、風見幽香は照れた。それこそこれ以上ないほど。

酔いで薄桃色に上気していた頬は真っ赤に染まり、目は泳ぐを超えて暴れまわっている。

唯一ピンク色の口からは、自分でも理解できないであろう支離滅裂な言葉が延々と紡がれている。

その間に、すでに零は幽香の目の前まで迫っていた。

「嗚呼、照れている君も美しい。思わず、自分のものにしてしまいたくなる……」

くいつと、幽香のあごが持ち上げられる。必然的に、幽香は真正面から零の目を見た。

瞬間、胎の奥が疼き、心拍数はさらに上昇。目はとろけ、表情は雌のそれに変わる。

本能的に感じる、目の前の雄に自分の全てを捧げて屈服したいという感情。

ついでに少し出る、苛めてほしいというM心。

(なに、これ……逆らえない)

少しずつ近づけられる唇。腕を前に突き出せば防げるといつのに、それができない。

むしろ、唇は自分のほうからも近づけている。だがそれに気がつかない。気がつかない。



ついに、二人に唇が重なる

と思ったそのとき、トンと零の手によって幽香の体がほんの少し後ろに押された。

それとほぼ同時に二人に間を別つように薙ぎ払われた、独特の形をした傘。

「ずいぶんと見せ付けてくれるわね……」

額に青筋を浮かべて地面にめり込んだ傘を引き抜くのは、空気と化していた紫。

体から力が抜け、ぺたりと地面に座り込んでしまった幽香から、残念そうなため息が漏れる。

幽香としては意図せずして出てしまったのであろうが、それは紫の怒りを助長する。

「なんだ、嫉妬かい？」

本来、紫は二人のキスを止める理由などなかった。むしろ囿し立てる立場にある。

しかし、どうしてか零がキスをしようとしているのを見て、なぜか妨害したくなった。

それはなぜか？きつと理由は自分でも理解していないのだろう。

「ちが「そんなにオレを想っていてくれていたのか。ならばこんなに嬉しいことはない。」

嗚呼、こんなにも胸が苦しい。きつと今この瞬間、オレは君に恋

をしたんだらう」「ツツ!？」

さっと、紫の顔に赤みが走る。がすぐにそれは収まった。

先ほどからの零の言動と、紫がもつ賢者としての研究心が状況の解明を優先した。

一人に告白した直後、すぐにもう一人に告白すると言つ暴挙。

いつものふざけた言動ではなく、どこか芝居がかった言葉の使いよう。

いつも身に纏っている雰囲気の違い。

これらのことから推測されることは唯一つ。

考え始めてからもの数瞬、紫は正しい結論に達した。

「愛している、紫」

こいつ、酔っている

しかも、とんでもない口説き上戸

幻想郷の夜は更けていく……

幻想郷の夜々後編 (前書き)

また大変長らくお待たせいたしました、作者です  
今回はずつと三人称だったのでとても辛かったです。クオリティも  
さらにアレです  
少しでも楽しんでいただければ幸いです

## 幻想郷の夜〜後編〜

「あなた、酔っているのよ。目を覚ましなさい」

「酔ってなどいないさ。オレは君を愛する想いが酔いなんかではないと断言できる」

口説き上戸の考察を終えた紫は、まず説得する方法を試した。結果、失敗。酔っていないなどと即答され、おまけに口説き文句がつけられた。

(…ッ!……これは結構クるものがあるわね…)

もともと、零や紅の顔は一級品であり、スタイルも非の打ち所がない。

ただでさえ好意を向けられることに免疫がないというのに、普段とのギャップがそれを加速。

はつきりいつてしまえば、超照れる。もしくはデレる。

話そうとするたびにいちいち口説かれては、打ちのめして正気に戻すこともできない。

ここは一度退き、紅に協力を要請すべきだと結論付け、紫は素早く隙間を開いた。

が

「恥ずかしがりやだな。別に逃げようとしなくてもいいじゃないか」

反応するまもなく一瞬にして後ろに回りこまれ、優しく抱きしめられた。

脱出しようとするも、そのままなじに顔を突っ込まれ、スンスンと匂いを嗅がれる。

「甘い匂いがする……紫の匂いだ。おや、抱きしめられて緊張したか？汗をかいているぞ」

「ヤッ！ちょ、なに嗅いでんのよ！離しなひゃうん！」

ついだとばかりに舐められる。熱く濡れたものが首筋を這う感触に、紫は思わず声をあげた。

その反応に気をよくしたのか零はそのままぺろぺろと舐め続ける。もはやただの変態である。

もしかこのままなし崩し的にあんなことやこんなことをされてしまうのではないかと

多大なる不安と少しばかりの興奮が心を占める紫。余裕があるやらないのやら。

腕ごと抱きしめられているので妖気を集めてぶつけようとするが、耳を甘噛みされ妖気が霧散。

ひるんだところで体を回され、抵抗する隙もなく正面から零の目を見つしまう。

「紫は、オレのこと、嫌いか？」

もの悲しげなその視線は、抵抗に傾いていた心の天秤を一気に逆転させた。

雷に直撃したかのような電撃が背筋を駆け、血管が破れそうなほどに心臓の収縮が強まる。

もはや紫の目は数百年の時を生きた大妖怪ではなく、恋焦がれる純情な乙女のそれと化した。

「そんなこと、ない。私は、あなたが……」

言い切る前にゆっくりと近づけられる唇。もはやそれを邪魔することなどできなかつた。

紫には、だが。

「ゼイツ!」「ッラア!」

突如として現れた二本の腕は、異なる掛け声と同時に捻りを加えた掌底を打ち出し、

今まさに（キス的な意味で）繋がるうとしていた男の方を吹き飛ばした。

「ほう、あのタイミングでガードするのか」

吹き飛ばした一人、蒼が感心したように言う。

確かにあの瞬間放たれた掌底の下には、しっかりと零の腕が差し込まれていた。

「酔ってなければガードどころじゃなかったぞ。下手すりゃカウンターだ」

もう一人の男、紅が打ち込んだほうの手首を鳴らしながら言う。

二人の介入あつてか、紫は我を取り戻した。が、その頬は未だに赤いままである。

「た、助かったわ……」

「ん、助けるのが遅れてすまん。まあまんざらでもなかったようだな」

「あ、あれは！ちょっといい雰囲気になっちゃっただけよ！」

「つまり、まんざらでもなかったわけだな」

「~~~~~ツツ！」

しつこいからかいについ傘でぶん殴ってしまいたくなるが、状況を考慮し我慢する。

森のほうまで吹き飛んだが、ガードしていたのなら、あの程度で終わる相手ではないからだ。

「……で、吹き飛ばしたはいいけどどうするの？」

「このまま時間を稼ぐ」



さらりと言うが、時間を稼いでどうなるというのか、と紫は顔をしかめる。  
一度酔ってしまった者が、たった十数分で酔いが覚めるとは思えない。

しかし、紅はあと数分凌げば零は自滅すると言う。

「能力も使えずフラフラになるほど血が減ってたから酔っちゃったんだらう？」

「ってことは今もまだ能力を使えないから、血の残量はまったく変わっていない。」

「その状態でさっきまで普通に動いてたなら、限界はもう近いはずって事だ。アングスタン？」

なるほど、といったように紫は頷く。

同時に、状況の判断と解析が異常に早かった紅に対して少し感心する。

先ほどまでの数秒間の間にここまで考えたのは賞賛に値するだろう。

余談だが、実は紫や幽香のキョドる様子が面白くてこっさりビデオで撮っていた

ということがバレ、紅と蒼は二人にボロ雑巾になるまで追い掛け回されたのであった

さらに余談だが、ビデオカメラは破壊されたが、データは守りきった二人である

「……………それにしても、口説き上戸など俺は聞いたことがないぞ」

蒼がポツリと呟く。紫も同意だと首を振った。

「んー、いつも押さえつけていた性欲的な部分の本能が完全に開放されてるみたいだな。」

幻想郷に来てから思春期の男がやることをサボり続けてきたツケみたいなものと推測する」

実は、彼ら現代っ子が幻想郷に来てすぐにやったことは、精神修行だったりする。

肉体を鍛える修行と併行して毎日一時間の座禅と一般的(?)な滝に打たれる修行。

あのころ健全な男子高校生であった零と紅には、美の化身のような女性と一緒にいるのは

相当な苦痛であったに違いない。もともと、紅は幻想郷にしかないものなどの研究に熱心で

途中からはあまり考えずになり、零にいたっては藍や慧音、映姫を愛でることで

擬似的な欲求を満たし、大いに満足していたようだが。

「っと、話してる間に時間のようだ」

折れた木々を跨ぎ、森から人影が現れる。

多少服に汚れが見て取れるが、体自体はまったく傷ついていないようだった。

「よし、じゃあ蒼は作戦通りによろしく」

そう言って、紅は紫を引いて十数メートルほど下がった。

「心得た」

てつきり三人で戦って時間を稼ぐと思っていた紫は二人の意外な行動に驚く。

いくら昔倒した相手だといっても、今現在の力の差がどれだけあるのかわかりはしない。

不安を隠せない紫の顔を見て、紅は悪戯っ子のようしくクツと笑う。

「嫌々、舐めてるわけじゃないんだ。あいつの実力は俺が一番知っているしな。」

でも普通に戦っても楽しくないだろう？せつかくの宴会なんだ、巫山戯よう」

とりあえず、と言って紅はある言葉を耳打ちする。

それを言えば零はこっちの術中にはまって勝手に自滅するらしい。

「まったく、いきなり攻撃してくるとはやってくれる。どうやら死にたいらしいな」

蒼の数メートル前で立ち止まった零は、苛立ちを隠そうともせず言う。

一応微笑を浮かべたままなのだが、如何せん目がまったく笑っていない。

(ほら、早く言え。零にも聞こえるように大声でな)

これでいったい何が変わるんだと思いつながら、紫はとりあえず叫んだ。

紫にとっては、特に何の変哲もない言葉。しかし、零にとっては違ったようだ。

「足止めをお願い！」

その言葉にすかさず蒼が返す。

「ああ、足止めはいいが 別に、アレを倒してしまっても構わ  
んのだろう？」

ピクッ

微かに零の眉が動いた。苛立ちを含んだ目が違う方向に歪む。

「ああ、かまわない。思いっきりやってしまえ」

紅が続き、それにまた蒼が返す。

「 ついて来れるか」

瞬間、蒼は音を置き去りにして走り出し、零に強烈なとび蹴りを食  
らわせた。

しかし不意打ちだったのにもかかわらず零は両腕を交差させて防御  
を成功させる。

が、この攻撃はダメージを与えるためにしたものではない。

「ご覧の通り、貴様が挑むのは神速の鬼。速度の極地！ 恐れずし  
てかかってこいー！！」

この言葉に、零の纏う空気が変わった。

口説き上戸の軽い雰囲気が消え、代わりに闘気が陽炎のように体を  
包む。

心なしか、纏う鬨気が黄金色に輝いて見える。

「雑種ごときが、王に刃向かうか」

尊大な口調でそういった零を見て、紅は自分の計画が成功したことを悟った。

（え、ちょっと、また雰囲気が変わったんだけどどうということ？）

一人だけ何が起こったのかさっぱり理解していない紫が小声で尋ねる。

（簡単な話だ。性欲以上に本能を刺激されるものを与えてやったんだよ）

そう、今の零が本能の赴くままに行動しているのなら、他のもので本能を誘導すればいい。

しかし、零が性欲以上に本能を刺激されるものとはいったいなんだったのか？

それが分からない紫は余計に混乱する。

（あいつは根っからのポケ役だからな。つまりはまあそういうことだ）

まあそういうことだと言われても、と紫はうなだれる。

しかし紫が分からなくても仕方ない。むしろ分かっていたら大分精神的に病んでいる。

零が本能的にとった行動は、至極単純なものだった。

すなわち、ネタにのる

数百余年、極稀にシリアスになるものの、ひたすらポケ倒してきた零だからこそ通じた策。

つまり零のポケは、体を超えて魂にまで刻みついているということだろう。

「いくぞ英雄王

武器の貯蔵は充分か」

更なるネタを押し込み、蒼は零に突撃する。何気にノリノリな蒼である。

ちなみに蒼はネタなど一切知らず、ただ紅に言われたことを実行しているだけである。

（私に感じる性欲より意味の分からないネタのほうが優先順位が高いのね……）

魅力がないのかしら？いやいやさつきはあんなに好きだって言ってくれたし、

でも酔ってたから正常な判断ができなくなって、けど私の体だって悪くないと思うし、

あー！もうどう思えばいいのよ！と紫は一人頭を抱える。

その様子もキッチリとビデオカメラに収める紅。外道な顔をしている。

と、ここで紅の予想外の出来事が起きる。

ゴシャア！と人体が出していい音ではない破壊音とともに吹き飛ばされる蒼の姿。

受身も取らず地面に叩きつけられたことから、どうやら完全に気を失っているようだ。

「たわけ。我は最古の英雄ぞ。はなから貴様に勝てる道理なぞない」

ふん、と鼻を鳴らし、零がゆっくりと近づいてくる。

体にはたいした傷もなく、服についた汚れを払う姿は余裕に満ちている。

「……そついやアイツも結構飲んでたっけな」

いつもと違ってノリも相当よかったしなー、と自分の読み間違いを恥じる。

酔っていて本気が出せないのは、どうやら零だけではなかったようだ。

ついでに英雄王のネタを振ったのも間違いだったかもしれない。

冷静に考えて、アチャーさんが王に戦いを挑むのは無理があった。

「……やっべ、そろそろ漬物混ぜる時間だ。じゃあな」

「えー！？ちよつと待ちな」『ヒュン』……」

まるで最初からいなかったかのようにその場から消えうせる紅。

残された紫はとりあえず、後で紅を半殺しもとい全殺しにすることに決めた。

酔っている零と正常な状態の紅が戦えばすぐにケリはついたのだろうが、本人は逃げた。面倒くさくなつたのか、それとも傍から見ているほう面白いとふんだのかはわからない。ただ、今重要なのは紅がこの場からいなくなつて、零と紫が残されたということである。

おそらく、自分が逃げようとしたらさっきのように捕まってしまう。戦つて時間を稼ぐしかないと判断した紫は、すぐさま零に向き直る、が

(消えた!?)

いつの間にか零の姿は消えている。もしかして紅と一緒に転移させたのでは?と淡い希望を抱いたが、その幻想はぶち殺された。

「やっと二人きりになれたな」

ふわり、マフラーのように首に巻かれる二本の腕。

「ッ!……本当、後ろに回るのが好きね」

「いいや、本当は紫の美しさを真正面から余すところなく眺めたいんだ。

けれど残念なことに、君がオレには眩しすぎて、まともに顔も見れないんだ」

呼吸をするように自然に、零は賛辞の言葉を述べる。

少しは慣れたのか、紫に先ほどのように顕著な変化は見られない。



まだ冷静である。

「零、もう一度言うけど、貴方酔ってるのよ。自分の状態を省みなさい」

「オレの状態？ああ、確かに通常じゃない。……頭はぼやーっとしているし、

身体は火照るように熱い、服が今にも燃え上がりそうだ。あちこちがだるくて

一歩踏み出すだけで倒れそうだよ。眼球から水分が飛んでいるのか、

紫の姿もまともに見えやしない。次に瞬きしたら、もう二度と目を開けないかもしれないな。」

つまり、ベストコンディションだ」

あ、駄目だ、言葉が通じてない。紫は負けを悟った。

「さっきから紫はオレのことを酔ってる酔ってると言っているが、些か失礼じゃないか？」

「いきなり首を舐めてくる変態よりは失礼じゃないと思っているわ」

「なんだ、気に入ったのか？」

「今の発言でなんでそんな解釈にいたったのかしら？一度頭の中身を見てみたいわね」

「ほう、オレの全てを知りたいと」

「……もうそれでいいわ」

うん、無理だ、話が繋がらない。紫は諦めた。

「……紫の言うとおりオレが酔っていたとしても、好きでもないやつに好きなんていわない。

むしろ、酔っているからこそ、普段隠している本心がさらけ出されるものなんじゃないか？」

「……」

悲しそうな声で零は言った。

その言葉はとても酔っていると思えないほどに真摯で、紫はただ黙ることしかできなかった。

「それを理解してから、もう一度“俺”の言葉を聴いてほしい」

抱きしめていた腕を解き、くるりと体を反転させられる。

そこで紫が見た零は、今まで見たことのないほど真剣な目つきだった。

「紫、俺は、お前を」

トスン、と紫の肩に重さが加わった。

全体重を預けられた紫はその場に踏ん張ることもせずにペタンと座り込む。

耳元で規則的に紡がれる寝息を聞き流し、紫はゆっくりと零の体を抱きしめた。

「……………馬鹿」

ぎゅ、と抱きしめる腕に力を込める。

「寝るなら、最後まで言ってからにしなさいよ……………」

そうだった紫の顔は、やはり赤く染まっていた。

幻想郷の夜々後編（後書き）

一方そのころ、八神・那香河家にて

四肢を拘束された射命丸の前で、紅がなにやら苛めをしていた。

「ホレホレ、旨そうな北京ダックだろう？香ばしい匂いが漂ってくるだろう？」

「うう〜！私が悪かったから食べさせてくださいよう！」

「やつべ、超美味いんですけど。舌が蕩けそうなんですけど」

「うがー！」

「ちなみに言っておくが、三日間は飲まず食わずになる予定だからな？」

「ながっ！死にますよ！私死んじやいますよ！」

「なに、三日程度の断食では死なない。まあとても苦しいとは思っけどな」

「うわあああああん！助けてはたてえええええええ！」

「ふははは、俺たちをホモに仕立て上げようとした罪は重いのだよ  
」！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1622j/>

---

平凡少年が幻想入り

2011年12月18日01時46分発行